
東方短編集 ~ The Another Story

影猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方短編集 ｝ The Another Story

【Nコード】

N2962L

【作者名】

影猫

【あらすじ】

それは物語を紡ぐたった一つの糸。

それぞれの物語が交差し、やがて一つの物語へと収束していく。

「私は幻想郷を愛してるから」その言葉の真意とは。

「約束は必ず果たすわよ」そして彼女は動き出す。

忘れ去れた者達の樂園を。全てを。

不完全な満月 第一章（前書き）

ご留意していただきたいこと。

東方知ってる方推奨。

東方の二次創作です。

同人誌の影響受けすぎです。

二次設定入ったりします。

オリキャラはいません。

以上の事を踏まえて、それでも読んでいただければ幸いです。
幸いです。

不完全な満月 第一章

「はあ……はあ……」

走らなきゃ、走らないと。捕まってあんな奴らに使われるなんて。そんなの、そんなのいや……。

走っていると見慣れない場所まで辿り着いた。そして、走るのを止めた。

ぽつ、ぽつ、ぽつ

……雨が降ってきた。寒い。

誰にも見せなかった涙。雨が降っていれば誰も気付かないだろう。そう思うと少女は静かに、声を殺して泣いた。

全ては、この能力のせい。

私の名前は……、あつたのだろうが忘れてしまった。

そう、私は物心ついたときには孤児院にいた。

なのに孤児院でも先生や子供達にも遠ざけられていた。

銀髪の所為とか性格とかもあつたのだろうが、それよりも私の能力が大きな原因だった

それは、ある時だった。私は得意だった手品をみんなに見せた。それなのに、私は迂闊だった。

「私は……そんな筈じゃ」

時間を止めてる時に私はよくナイフの手品の練習をしていた。

が、運悪く時間が止まってる子供に怪我をさせてしまった
咄嗟に時間停止を解除した。
その子供は訳が分からず自分の血を見つめてる私はその子供に謝る
うとした。

「ごめんなさい……私が時間を止めてる時にナイフが……」
「……」

子供にしてみれば意味の分からない惨状だったに違いない。
呆然として私を見つめる子供。

「ごめんなさい」

必死に謝る私。

二人とも立ち尽くす。私は謝ることしか出来なかった
そして、先生がやってきた。

怪我した子供は医務室に運ばれた。

私は他の先生に薄暗い部屋に入らされた。

先生が迷いと悲しみの交じった低い声で話す。

「どうしてあんな事に？」

「時間を止めてるときに間違っただけ……」

「時間なんか止まるわけないだろう」

「信じてください！私はっ……」

「先生は貴女が魔女だなんて信じたくない」

先生はため息をついた、そして話を変えた。

「……ナイフはどこで手に入れたんだ？」

「キッチンです……」

「馬鹿な、あそこ入ったらおまえみたいな子供はすぐに放り出されるだろう」

「時間を止めたんです」

「・・・・・・・・」

結局話は有耶無耶に終わった

その後も私は信じてもらおうと皆に何回も説得した。だが信じてもらえなかった。

それもそうかもしれない。世間では『魔女狩り』というものが有ると聞いた。

教会が魔法や異能者に対して恐れを抱き、根絶やしにするという。

ああ・・・・・・・・、もしかして私は魔女なの？

「魔女は近寄るな！」

そして私の居場所は無くなった。

しかし、その後も孤児院でなんとか生活していた。

幸い、あの子供は無事だった。

そして、ある日私のもとに白いコートを着た人たちに迎えられた。

先生が時間を止める力を持つてると言って私を売ったのだろう

いや、もしかしたら私がいればこの孤児院は教会の手で火をつけられたに違いない。

「さあ、行こうか」

白いコートを着た男が手を差し伸べながら言う。
私は差し伸べてきた手を握ることは無かった。

私はとある研究所に連れていかれた。
どうやら教会ではなくほつとした。

研究員が私に質問を浴びせる。
家のこと、孤児院での生活。そして、時間について……。
熱心に聞いてくる研究員に私は嬉しかった
私は遠ざけられていない。
誰であろうと私は嬉しかった。

二週間後。

私の能力を調べるために実験が行なわれた。
痛かった。全身の感覚がおかしい。
ただ、実験が終わると研究員の人たちに優しくしてもらった。
その実験は毎日行なわれた。

…あれから一年ぐらいたっただろうか？

実験は嫌だが幸いな事に、もう慣れてしまった。
ある日実験が終わると、女性の研究員が私に誕生日を尋ねてきた。
私が自分の誕生日は知らない事を知ってるのだろうか？

「分からない…です」

私は言った。すると女性は、

「んじゃここに来た日を誕生日にしたら？」

「え……？」

「はい、これ」

女性の研究員が差し出したのは銀の懐中時計だった。

精巧な銀の装飾がされており、蓋を開けるとカチツカチツと懐中時計特有の針の音が聞こえた。

蓋を閉じ、ぎゅっと銀の懐中時計を握り締める。

「ありがとう……初めてのプレゼント……」

「うふふ、よかったわね。 ……この時計はあなたの時を刻めるように。 そう思ってた。」

そういつて女性の研究員は持ち場に帰った。

私はずっと懐中時計を握っていた。

これからの実験がつかぬいとさえ思えた。

そんな私の誕生日。

だけど“それは”突然やってきた。

その夜、私はずっと懐中時計を見ていた。

飽きなかった。針の音、銀の装飾。この懐中時計は私の初めてのプレゼントなのだから。

……懐中時計で？の短針を回った頃だった。

突如施設内に轟く爆発音。

うとうととして眠りにつきそうな私は我に返った。

何事だろうか？私の部屋からドアを開けて外を伺おうとした。

研究員が慌ててやってくる

「入ってきちゃだめっ！！！」

あまりの気迫に私は咄嗟にドアを閉めた。

……なにがなんだか分からない。

この施設に何が起こったのだろうか

何一つ音がしない私の部屋は緊張に包まれた。

何一つ、では無かった。

チツ……チツ……チツ……

私がついている銀の懐中時計の針の音が鳴り響く。

あれからの数分がとても長く感じられた。

扉をこっそり開けようとしたが、どうやら外部から鍵を掛けられたようだ

ガシヤン

沈黙を破るかのように扉の外で何かが割れる音がした。

ふと、壁に耳をあてて外の音を拾う。

「やめろおお！！あの娘だけは！あの娘だけは……！」

私に手を差し伸べたあの研究員が叫んでいた。
寒気がして自分の体を抱きしめる。

……もしかして、私の体震えてる？

気付くと私は懐中時計を握り締めていた。
また叫び声が聞こえた。
何が何だか分からない。

……さっきまで何もなかったのに。

ガチャ

扉のドアに鍵が差し込まれた、やっと外に出られるのかな？
そう思っ、扉に駆け寄った。

ガチャリ……

扉が開いた。

扉の隙間から光が差し込む。

……そこに研究員の姿は無かった。
そこにいるのは拳銃を私に向けた知らない男
知らない男が口を開く

「お前が……時間を操れる娘か？」

「……え、……あ」

思考は動くが言葉が出ない。

これが恐怖？

怖い、怖い、怖い ……！

「やめなさい！その娘に触れるなっ！」

あの人だ、一年前に手を差し伸べた研究員。

「うるせえな。邪魔だ」

男は研究員のみぞおちに蹴りを入れる。

研究員はドサツと音を立てて床に倒れる。

「や…めろ…その娘に、は…」

ふと男が持っていた拳銃を研究員に向ける。

「私たちの大事な娘なんだ！！！」

研究員が叫んだ。

ドン……

研究員は動かなくなった。

動かなく……なつた？

すると二、三人の研究員達がこちらに向かってきた。

「所長？……所長！！しつかりしてください！！」

一人の研究員が涙声で動かなくなった人間に話し掛ける。

一方他の研究員達は所長を殺した男に目を離さないようにずっと睨んでいた。

そして、沈黙を男破るように男は当初の目的を話した

「この娘を貰いにきた」

研究員たちを嘲笑うかのようにそう吐き捨て、

男は私に近づいてきた、片手には銃が握られている。

「駄目っ！ あなたには渡さない！この娘は私たちの宝物なんだからっ！」

一人の女性研究員が私をかばう様に前に立ちふさがった。
この人、見たことある。

ああ、私に懐中時計をくれた……。

「……研究対象に情でも？」

一瞬、時が止まった。

「あなたには……」

女性研究員が言いかけた時、

ドン

鈍い銃声が響いた。

血の雨が私の体を染めた。

私は目の前で倒れる彼女に寄った。

「私は大丈夫……だから……ら」

言葉を紡ぐ。

「だから」

衰弱しきった体。

ありつたけの一言を、

「逃げて!!」

私はあまりの突然の出来事に戸惑っていた。

すると彼女は微笑んだ。

そして声の無い言葉を言った。

言葉に出なかつたが口の動きで分かつた。

私は涙をこらえた。

そして彼女は動かなくなつた。

『あなたは時間を操れるでしょう、逃げるのよ』

私は時を操れる。だが、この施設に入つてからは実験以外はほとんど力を使わなかつた。

・・・だけど、使う時が来たのかもしれない。

「逃げて！」

私をかばうように次々と研究員が私の前に出る

男はまるで虫を殺すかのように、無常にも銃で研究員達を殺していく。

何人も私の前には動かなくなっていく。

「や……めて……」

朱に染まる白い無機質な部屋。

「私は逃げる……」

自分に言いきかせるように、

「くく、お前は逃げられない。」

殺人鬼が何を言っているのか、わからなくなってきた。

「私は……逃げてやる！」

私は時間を操れるんだ。

ゆっくりりと、目を閉じる。

時よ……止まれ。

逃げる。

走って、走って足が折れるくらい走った。

ここまでくれば大丈夫だろう。

……雨が降ってきた。

あれ？視界がぼやけてる。

私……………泣いてるの？

雨が血を洗い流す。

だが、服には染み付いていて雨では落ちなかった。

さっきの記憶が甦る。あの光景は衝撃的だった。

あんなにも人が……………、吐き気がする。

「少し歩こうかな……………」

必死に走り続けたからもう走りたくなかった。

これからのことを考えただけで虚しくなる。

これから先どうすればいいのだろうか、

私の能力のせいで皆死んだ。だったら私は…

懐にあったナイフを取り出す。

いつそ首を切り、終止符を付けるべきか

その時、研究員の人たちの事を思い出した。

命懸けでかばってくれた。
私を大事にしてくれた。
なによりも…暖かった。

守ってくれたのに死ぬなんて。
私がどうかしていたかもしれない

「私……生きてやるんだから……」

天に向かって私は叫んだ。

「誰だ！」

男の叫び声が聞こえる。

私は振り返った。

雨が降っていて深夜だ。視界は悪すぎる。

男……いや、男”達”は手に灯りを持ちながらこちらに向かってくる

復讐だ。

ナイフを持って構える。

ナイフの輝きに男達は気付く

男達の一人が私を捕まえようとする。

止まれ、止まれ、止まれっ

すると男達の動きが止まった。

雨の滴も止まった。

まるで、全てが凍って動かなくなったように。

その時が止まった世界、色彩の無い灰色の世界で私はナイフを握り締めた。

時を止めると疲れる。この力は、持続するには限界がある。

すぐさま、私は男の後ろに回った

解除。

「・・・なに?!」

背中をナイフで切り刻む。

男の悲鳴と同時に私は的確に相手の心臓を貫く。

男は痙攣し、獣のような叫び声を放った後に、動かなくなった。

ナイフを男から抜くと血があふれ出てきた。

・・・気持ち悪い。

そしてゆらりと、次の奴に狙いを定める。

相手も少女に気づいたのか、鉄の棒を振り回し、殺気を込めた一撃を放とうとする。

止まれ、動いて

止まれ、動いて

止まれ、動いて

「ひっ !？」

血の雨が降る。

・・・次は誰？

崩れ去る男達。

止まれ 止まれ 止まれ 止まれ 止まれ 止まれ

ッ！

私をつき動かしていたもの……。

それは復讐という名の狂気

眼前にいた男達となんら変わらない、憎しみの心だった。

はあはあ……。

あれから三十分か

一時、時間の止まった灰色の空間で息を整える。

能力も使いすぎた。今時を止めてるだけでもつらいのに。
意識が朦朧としてる。

片目を開き、周りを見渡す。・・・あと男は三人。

「これで最後」

……解除。

「はや」

すかさず男の足をナイフで切る。

次に崩れ去ったところをナイフで心臓を貫く。

次の男も首を切った。

雨じゃなかったら血の雨が降っていただろう。

首の一閃に男は仰け反り、隙を見せる。私はそれを見逃さなかった。強く握り締めたナイフで心臓を貫き、息の根を止めた。

「……………」

残るは最後の男。

こいつには見覚えがある。

研究員達を殺した男。

躊躇なく皆を殺した、イカれてるやつ。

すると、突然男は笑った。

「馬鹿だよなあ。研究の成果も無いのに。全くもって無駄だ。

お嬢さん、あんたは人間じゃない。殺人兵器だ。それをかばっ

て死んでいくなんてなあ？」

そう言い放ち、笑う男。

手には銃。朱にそまつたそれは、きつと研究員の返り血だろう。

私は男の挑発を無視し、キッと睨んだ。

「そんな兵器を使わないなんて、それこそおかしい話だ」

止まれ、

ありつたけのナイフを

止まれ、

コマ送りのように少女は動く。

少女の回りにナイフがどんどん出現する。

止まれ、

精製、精製、精製、精製、精製、精製、精製、精製、精製、精製

解除

男が気付いたときには少女は後ろにいた。

止まれ

ありつたけのナイフを投げ付ける。

ナイフは脳天へと、違うナイフは心臓へと、

憎しみを込めた一撃は男を死に追いやるには十分すぎた。

「……解除」

殺人鬼の断末魔の叫びは無情にも聞こえなかった。
否、一瞬で殺された。

終わった。

能力を使い、過ぎた。
ちよっ……と休も、う、か……な……。

力なくまま私は倒れた。
ふいに、懐中時計が光った。

カチツ・・・
時間が止まり、灰色の、凍った世界へ招かれる。
カチツ・・・
時間が動き、色は染まり、現の世界へと戻される。

もうどうでもいい。

休ませてよ
時間止めなくていいから。

カチツ・・・
時間が止まる
カチツ・・・
時間が動いた

やっと思いで懐中時計を懐から出す
時計の針がありえないくらいのスピードで進んでいる。
それ、を見ていくう…ち……に、

意識が……遠退いて……い……く……

不完全な満月 第二章

目を開けなくても分かる。

そよ風が気持ちいい。

そう、私は今草原で横たわってる。

だって私がそうだといいなって思ったから。

そう…これは夢。

これが現実だったらいいのに。

だから目を開けない。

だって夢から覚めたら嫌だから。

・・・、
・・・、
・・・、

あれ？足音が聞こえてくる。
夢の中に誰かが来るなんて。

「あれ、こんなところに人間が落ちてる・・・。」

幼い女の子の声だが、どこか威厳のあるそんな声。

だけど目は開けない、夢から覚めたら嫌だから・・・。

そんな事を思ってたら、頬をつねられた。

痛い……………。

あれ？

痛い？

「貴女は誰？」

幼い女の子の声がまた聞こえた。

そう、耳で聞くようなリアルな音が。
ふと希望が込み上げる。

これは……………夢じゃない……………！

私はゆっくりと目を開く……………。

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

ゆっくりと目を開ける。

広大な湖の湖畔に私は寝ていた。

ふと気付くと私の隣に少女が立っていた。

”黒い翼”を生やし、薄紅色のドレスを着て、帽子を被った、非現実的な少女が。

「あ、起きた」

翼の生えた少女が反応する。

「ここは・・・？ あなたは・・・誰？」

突然の問いかけにも少女は丁寧に話してくれた。

「ここは幻想郷。私は紅魔館の主、レミリアよ。レミリア・スカーレット」

そういつてレミリアは後ろにある大きな館を指差す。

「あなたは？ここに人間がくるなんてね……。どういったご心境で？」

レミリアは薄笑いで話し掛ける。手で下唇を触り、いかにも興味があるかのようじ。

「……………、分からない。気付いたら此処にいて……………」

しどろもどろに話す。本当に何も分からないから。
気づいたら見知らぬ場所にいたのだ。
今、雨なんて降っていないし、男の死体なんて無い。

「へえ、分からない……か」

そう言ってレミリアは私の手を取る。

一瞬、顔を歪ませた。……気がする。

「……大変だったわね」

「え？」

「それより、悪魔を恐れない人間がいたとはね」

「あなた……悪魔なの？」

悪魔……、というのは本でしか見たことが無い。
本で見た悪魔は醜かった気がする。ましてやこんな

「そうよ、紅き悪魔、スカーレットデビル」

「悪魔がこんな可愛い少女なんて知らなかったわ」

そう言くとクスツとレミリア笑った。

本当に悪魔と思えないな、と思う。

「フフ……面白いわね。なんなら私の屋敷に泊まらない？」

「は……？」

拍子抜けだった。

「だってあなた、夜になったら妖怪に食べられるわよ」

「よ、妖怪?! ……いいの、本当に？」

「ええ、いらっしやい紅魔館へ」

そういつてレミリアは私の手を取り、立たせる。
あら意外と大きいのねと少女は感心したように言った。

「紅魔館はこっちよ！」

「あっ……………」

私の手を取ってるのにも関わらずレミリアは走る。

こんなの、別世界だ。

私は走っていくうちに笑っていた。

.....

「お帰りなさいませお嬢様！」

長い赤髪の少女がレミリアの姿を見ると元気よく挨拶をしてきた。

「あれ、そちらの方は？」

「客人よ」

「こ、こんばんは……………」

私は赤い髪の少女に頭を下げた。

「ようこそ紅魔館へ！私は紅美……」

「さあいきましょるか」

そういつて館の扉を開ける。

後ろを振り替えると彼女が手を振ってくれた。
夜なのにあの人は何をしてるのだろうか？

そんな事を思っているうちに、ギィィィ……と扉が開く。
後で分かった事だが、どうやらメイドが内側から開いたようだ。

「うわぁ………凄い………」

赤を色調とした壁。

とても大きいシャンデリア。
何よりも私を驚かせたのは、

「お帰りなさいませお嬢様」

そう……、メイドの数。

「ああ、彼女達は妖精メイドで家事とか掃除をしてくれるの」

なかにはサボってる妖精もいるけどね、とレミリアは私に説明してくれた。

「さ、あなたの部屋はこっちよ」

案内されたのは大きい寝室。

「今日は夜だけど寝なさい、疲れてないように装ってるみたいだけど体に悪いわ」

「え、あ、……はい」

凶星だった、装ってるつもりは無いのだけだ。

「あと、その服着替えたほうがいいわ」

改めて私の服を見る。

・・・返り血を浴びた赤い服。
気付かなかった。

「でも……服なんてこれしか……」

「あ、待ってて」

そういうとレミリアは指をパチンと鳴らして妖精メイドを呼ぶ。

数十秒後、妖精メイドは一着のパジャマ服を持ってきた。

「今日はこれしか無かったけど我慢してくれる?」

「え、いいんですか……?」

「当たり前じゃない」

レミリアが言った後、妖精メイドが服を着替えさせてくれた。
着替えさせてもらうのは……、慣れてない。

「あら、似合ってるわよ」

「そ、そうですかね?」

正直薄くてスースーする。

寝巻ってこういうものなのかな?

「んじゃ寝なさい。今日は夜遅いし、明日起きたらあなたと色々
話したいわ

それじゃ、おやすみなさい」

「お、おやすみなさい」

そういつてレミリアは部屋を出ていった。

ふと、過去を振り返る。

今までつらい人生を送ってきたんだ。

何時の間にかここに来ちゃったけど……

今のこの状況が幸せなのかもしれない。

ベッドに横になる ふかふかで気持ちがいい。
ふと懐中時計を取り出す 短針はもう？を過ぎた。

レミリアは夜遅いと言ったがもう朝ではないか。

「まあ……、いいや」

懐中時計を枕元に置く。

悪魔、紅魔館、妖精、メイド

「やっぱり、別世界だわ……」

……、ふかふかのベッドのせいか眠くなってきた。
寝てもばちは当たらない筈……。

おやすみ

門番の仕事が休みになって嬉しい限りです！と本音を言う美鈴。と
いうか案内係は休暇なのか。

「んじゃ、昨日夜遅くにあそこにいたのは門番をやっていたから？」

「そうです、お嬢様は人使い荒いんですよ！もう少し妖精も門番に
駆り立てれば……………」

と愚痴をこぼす美鈴。

そういえば、何時の間にか対等に話せてることに気付く。

これも美鈴の力なのかもしれない。いや、力というよりも魅力？
適当な言葉が見つからない。

「そついや…………あの、服はどうすれば……………」

「ああっ！すいません…………その」

慌てる美鈴。どうしたのだろうか。

「その…メイド服しか…………無いです……………」

申し訳なさそうに頭を何回も下げる。

…………まあいいか、着るものがあるだけ幸せだ。

「大丈夫、着てみる」

「すいません、今持ってきてますね」

そう言っつて美鈴が慌てて服を取りに部屋を出る

「こちらですー」

しばらく歩いてると、ある部屋の前で止まった。

「えと、ここが紅魔館の図書館ですー。とても広くてたくさん
の魔術書や図鑑がありますー」

そういつて扉を開く。

「凄い……」

そこにはおびただしい数の本。

本、本、本。

どこを見ても本。

「パチュリー様、客人の方を案内して……」

「……何でもいいから静かにしてなさい」

向こうには美鈴と“パチュリー様”と呼ばれた人がいる。

様付けしてるからおそらくこの偉い人なのだろうか、
そう思いながら美鈴とパチュリーの所まで歩いてきた。

するとパチュリーも本を読みながらもこちらに向かってくる

「貴女が例の客人？」

小さいがはっきりしている声。

「は、はい……」

「貴女は……いつまでここに居るつもり？」

いきなりの問いに戸惑う私。

「え……」

パチュリーの目が私に向く。

なんて凄みのある……。

「まあいいわ、好きにきなさい」

「……はい」

「それにしても貴女……特別な能力を持つてるみたいね」

えっ、と驚く美鈴。

「時間を操る能力と……まあ少しナイフの技術」

「そうです……が、何で知って」

「時間を止めて銀のナイフでレミイを殺すことも出来る」

「殺すなんてそんなんっ！」

「例え話よ、ただ聞いてみただけ」

微笑。そう言ってパチュリーは元の場所へ戻った。

「あ……あの、次にいつてもいいですか？」

美鈴が気まずそうに話し掛ける

「・・・はい」

まだ紅魔館に来て能力を使っていない。
なんで・・・？

「次は……って紅魔館の名所って図書館だけだったり……」
どうしましょ？と聞く美鈴。

「そつだ、ここにいる人達の事を教えて欲しいわ」

・・・ぐう

その時私のお腹が鳴った。

赤面。

「その前に少し遅い昼食ですね」

元気に話す美鈴。

「そつですね……」

と頬を赤らませながら美鈴の後に付いていった。

廊下を何度か曲がり、大きな食堂に入った。

どうやら妖精メイド達が食事をする場所の様だ。

美鈴が言うには、お皿の上に食べたいものを乗せてテーブルで食べるのだとか。

「好きなものをとっていいですからね」

そう言いパンをお盆の上に置く。

私は見たこと無い料理に圧倒されながらも、とりあえずパンを取る。

数分後

美鈴と同じ物をとっていたら凄い量になってしまった。

「さあ、座って食べましょうか」

食べるのが待ちきれないのだろうか、美鈴が急かす。

「いただきます」

美鈴が勢い良く食べる 門番だから食物もそんなに食べないのだろうか、

私もパンを食べる。 お腹が減ってるから何もかも美味しく感じる。 いや実際に美味しいのだろう。

間もなくして美鈴が話し掛ける。

「それで何が知りたいんだっけ？」

「え？」

食べるのに夢中で忘れてた、・・・なんて言えない。

「あ、…………えと最初から話すと、私、実は気付いたらここにいたと
いうか」

元いた世界と違うこの世界に来たみたいで、んでこの世界の事を知
りたいんです…………。

と分かるか分からないかギリギリの説明をする

いきなりスケールの大きい質問に美鈴も説明の内容がまとまらない
ようだ。

紅魔館の方々の事を聞くと書いておきながら、この世界について聞
いちゃったけど大丈夫かな…………？

そんな罪悪感を抱く。

そんなこんなで、しばらく経つと説明がまとまったらしく美鈴が口
を開いた。

「えと、まずこの世界は幻想郷といって……………」

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

- - - - -

「……………またか」

また悪夢。現実にはフラッシュバックされる。

紅魔館の主、レミリアは昨日から続く悪夢にうなされていた。

二度寝して二回とも悪夢なんて今日は厄日かしら。

そんなことを考えながら服を着替える。

そういえば湖の畔で見つけた銀髪の彼女はどうなったのかしら。
暇だった生活も楽しくなるかもしれない、そう思って彼女を紅魔館に招いた。

いや、違う。彼女の手に触れた瞬間、ほんの少しだが私は彼女の記憶を垣間見た。

・・・私の運命を変える能力が彼女をここに引き付けたのかもしれない。

もしかしたら。
いやなんでもない。

ま、考えたって憶測でしかないけど、
それにしても彼女の事が気になる。

「昨日招いた客人は何処にいるの？」

湖面にも月が反射して見えた。

「綺麗ですね……」

「そうね」

二人は紅魔館から少し離れた草原に横になる。

昨日と同じ風が吹いている。

「そっぴゃ貴女、他に行く宛はあるの？」

「それが無くて……」

「だったら私の処に住んだら？」

「え？」

思っても見ない言葉。

だが正直、紅魔館にいたいと思っただのも事実だった。

「私なんか……いいんですか？」

「もちろん」

「その代わり、紅魔館のメイドをやってもらおうかしら」

レミリアと私の目が合う。

嬉しそうに私が答えるのを待っている。

私の答えは只一つ

レミリアは二階の窓から庭の手入れをしている新入りのメイドを見ていた。

「あら、珍しいわね」

振り返ると、そこには私の唯一の友人がいた。

よく見ると目に隈が出来ていた。・・・徹夜でもしたのだろうか。

「また徹夜？」

「いつものことよ」

と、愛想なくパチュリーは話す。

パチュリーが愛想無いというのはずっと前から変わらない。多分これからも変わらないだろう。

「それより」

パチュリーも窓の外のメイドを見る

「あの新入りのメイド、人間なのに周りの妖怪や妖精達と同じ仕事の量こなしてるわね、

それに、彼女は大雑把な妖怪達には出来ない細かい所まで掃除をしている」

「あ、言われてみれば……」

と、窓の隅を指でなぞる

案の定、埃は指に付いていなかった。

「……………あの娘、これからどうするつもり？」

ふいに、魔女の顔が険しくなる。

「このままにしても良い方向にはいかないわ」

「ああ、分かってる」

「それに、名前もないんでしょ？あなた、名前は大切なんだとか言っただけ？」

「名前は運命を左右する力を持つくらい重要なんだ」

「そうね」

パチュリーは心配していた。

レミイはあの人間のメイドを気に入ってるとはいえ人間は人間だ、数十年しか生きられない。

……気に入れば気に入るほど失った時の悲しみは大きくなる

レミイを悲しませたく無いし、だからといってどうするわけにもいかない。

ああ、結局はレミイの好きな事をやればいいという結論になる訳だ
けど。

「そういや」

「何？」

「昼間から起きてるとは、あなた随分と早起きね」

「……暑苦しくて眠れないわ」

「そう？最近涼しいと思ってたけど」

そんな話が続く。他愛も無い話だが貴重な時間というのはレミリアも知っていた。

数分話したらパチエは図書室に帰っていった。なんでも、魔術書の本を書くそうだ。

ふいにあの言葉が再生される。

『彼女に名前が無い』

名前……か

「メイドの仕事の方はどう？」

「はい、毎日楽しいです」

「そう、良かったわ」

そして言い忘れたかのように続ける。

「ねえ、今度紅茶の葉がとれるのは何時かしら？」

それについてならさつき庭の手入れをしていたから分かる。

「そろそろですね、明後日頃でしょうか」

「あら、案外早いのね。　なら、三日後ぐらいにあなたがその紅茶の葉で私たちに紅茶を作ってくれないかしら？」

「私が……ですか？」

「そっよ」

「…味は保証しませんよ？」

「楽しみにしてるわ」

そういつてお嬢様は私に微笑む。

それにつられて私も微笑む。

「ふふふ、何がおかしいのかしら？」

「いや、微笑み返しただけですよ」

笑顔で私は話す。

あれ、何時の間にか自然に笑えるようになってる……。

そのあとお嬢様は、言いたいこと言ったから帰るわね。と言って自分の部屋に帰っていった。

「紅茶かぁ……」

無意識に呟く。 正直、作り方も何もかも分からない。

鼻歌が聞こえる。

ふと音のする天井の方を見る。

そこには赤い髪と黒い羽と耳が生えている小悪魔

「この大きな図書館の司書さんが空中に浮かびながら本を読んでいた。」

「あ、」

どうやら私に気付いたらしく近づいてきた。

「どういったご用件で？」

「紅茶の作り方の本を探しに」

「えーっと……料理関係は……」

司書が辺りを見回す。

司書でさえこの本は全部把握出来ていないのだろう。

「あちらの本棚を左に曲がったところに料理関係の本がありますよ」
そういつてその方向に指を差す

「分かったわ、司書さんありがとう」

「いえいえ」

そういつて料理関係の本棚を探す。

左に曲がってもたくさんの本棚だった

その一つの本棚を見る

アップルパイの作り方……、トマトジュースの美味しい作り方……、
料理の心得……。

他の本棚にも料理関係の本がある。

どうやら一部屋くらいの本棚全部に料理関係の本があるようだ

「……仕方ないか、一つ一つ見ていかないとね……」

そういつて私は本を手取る。

トントン ……反応無し。
試しにドアノブに手を掛ける

・・・ガチャ

(あれ……開いてる……)

恐る恐る入ってみる。

キレイに整理整頓された部屋だった。

散らかったモノは無いし、ベッドのシーツも畳んである。

ふと、机の上に置いてある”あるモノ”に気付く。

(あれは何かしら?)

パチュリーが見つけたもの。

それは無造作に置かれた銀の懐中時計。

(これは・・・普通の懐中時計ね・・・。)

パチュリーが懐中時計に触れようとした時だった。

「痛……」

思わず手を引つ込める。

今、目に見えない何らかの力が働いた。

なんだ今のは、結界だろうか？

いや、懐中時計にそんな力がある訳が無い

これは・・・何かしらの強い思いが具現化したもの・・・かしら。

その時、唐突に分かった。

この懐中時計が彼女の唯一の繋がりなのかもしれない。

もしかしたら彼女は

(……………出よう)

そう思い、パチュリーは音もなく彼女の部屋から出た。
色々な疑問があるが、彼女に聞くまで分からないだろう。

いや、何れ時が来る。

それまでの辛抱かしら。

.....
.....

- - - - -

- - - - -

- - - - -

走る

走る

走る

物を投げ付けられようが、先生に怒られようが

逃げる

逃げる

逃げる

ふと空を見ると血のような赤い空

よく見ると雨も赤い

ああ・・・そうか、また悪夢を見たのか。

「それにしても……統一性が無いな」

そんな皮肉もさっきの悪夢には効果が無かった。

レミリアは彼女がとても気になっていた。

どっかの閻魔では無いが白黒つけないと一生この悪夢を見続けるだろう

と、レミリアの直感は告げていた。

悪夢の所為で眠気が吹っ飛んだのでベッドから出る。

カーテンを開けると夕方だった 赤く染まった夕日が痛いくらい眩しかった。

「……………早く起きちゃった」

シャツ、とカーテンを閉める。

「そう……他には？」

「何もありませんでした」

それを聞くと私は料理関係の本がある本棚に向かった。

何しろここの本の量は尋常ではない。人間なら探すだけでも疲れてしまうだろう。

(……やっぱり)

案の定、探し疲れたのかメイドは壁にもたれ掛かって寝てしまっていた。

(仕方ないわね)

魔法で彼女の体を浮かす。

そして、私の書斎にあるベッドに移動させた。

.....

「寝てませんね……」

ふと気付く

「あ、あのパチュリー様、今何時でしょうか？」

「そうですね……夕日が沈む頃合いだわ」

「え、あ………」

と言う事はお嬢様が来た22時から……。

「そうですね、ざっと十時間は寝てたかしら」

「とりあえず、さっきメイド長に休みにしてもらったように言っておいたわ」

「あ、ありがとうございます………」

「立てる？」

私の手を取る 長時間寝てたせいか、足がやつれてフワフワする

「あ、すみません………」

「そっぴや」

パチュリーの書齋から図書館の広間に向かって歩いている途中で話し掛けてきた

「ねえ、なんの本を探してたの？」

「その、紅茶の作り方の本を……」

それを聞くとパチュリーはクスツと笑った

「レミイ、楽しみにしてたわ」

「そうですか」

「えと……紅茶に関する本は……」

こっちな、と歩くパチュリー

「ここら辺に……あ、あった」

はい、と本を渡す

「ありがとうございます。」

そう言ってお辞儀する。

「いいのよ。それに」

「それに？」

「私も紅茶楽しみにしてるわ」

またクスツと笑うとパチュリーは自分の書斎に帰っていった

それを見届けた後、私は本の最初のページをめくり始めた。

不完全な満月 第四章

「あ……あれ？」

庭の手入れをする美鈴。

庭の手入れ、いや草むしりという名の雑用も門番である美鈴の仕事だ。

最近では手伝ってくれるメイドもいるから、仕事量は減ったのだが。

「紅茶の葉がきれいに採られてる」

ま、いいや。

しかし、門の前にいたけど誰も通った覚えが無い

「……寝ちゃったのかな」

……メイド長にバレるとやばい。

そして持ち場である門に足早に向かった。

- - - - -

書斎

「明日、白黒付けようと思うんだ」

レミリアが険しい表情で話す。

「そう……」

しばしの沈黙。

「珈琲をお持ちしましたー！」

小悪魔が書斎の扉を開いて珈琲を持ってきた。

言ってから気付いた、よく分からないが空気読めてない。と

小悪魔自身やってしまったと思った。

「ど、どござ……」

「ありがとう」

「で、では失礼しますねっ」

そう言っつて小悪魔は慌ただしく去っていった。

「……面白いわね、司書さん」

レミリアが笑みを浮かべる

「それで、どうするの?」

パチュリーが話を元に戻す。

「まだ何も分からない」

レミリアも真面目な顔になる

「ただ何か言わないといけない気がする」

「言っとくけど」

パチユリーが珈琲を飲む

「あの娘、一筋縄ではいかないわよ」

「…分かってる」

レミリアも珈琲を飲む。

「……苦い」

「そう？ 良い眠気覚ましにはなるけど」

「それに早く寝るから珈琲はいいや、なんとなく今日は良い夢が見れそうだしね」

「分かったわ」

レミリアが席を立つ

「おやすみ」

「おやすみなさい」

そう言つとレミリアは帰っていった。

(レミィも成長したのかしら?)

ポットからカップに注ぐ。

（色は……大丈夫ね）

カップの中にはいつてる夕日色の湯。

（本の通りやったけど、美味しいのかしら……）

そう思い私は紅茶を飲む 体の芯まで暖まる。

……美味しい。

念入りに葉の量を計算したためか、苦くは無く良い香りが漂っていた。

（やっと、やっと出来た……）

この世界に来てから、何故か時間を操る疲労が少し減った。

時間的に五時間掛かったが、私の体内時計は十時間進んでいる。

そう、時間を止めて紅茶を作っていた。

そして紅茶を飲み干す。 うん、やっぱり美味しい。

(この手順を明後日やれば)

「ふぁ……」

自然に出た欠伸。寝なきゃ……。

ベッドに横たわり天を仰ぐ、部屋だから天井なのだが、これまでの出来事を思い返す。

上手く行きすぎてる。

紅魔館に来て、メイドになって

皆には優しくしてもらって。

……そして気になることがある。

『あなた、名前思い出せないの?』

「……名前か」

思い出せない、

名前なんて必要無いから思い出そうとも思わなかった。

そう思った。

いや、もしかしたら“今の私”には必要なのかもしれぬ。

……明日、ハッキリさせよう。

「ふう……」

今日の夢は……思い出せない。

パチュリーに良い夢見れると思うの　とか言ってたのに。

「ま、いつか」

トントンとノックの音がする。

「失礼します」

そこにはすこし大人の風格を漂わすメイドが一人。

「入っていいわ」

メイドはレミリアに服を着替えさせる。

「そっぴゃ、あの人間。どうかしら？」

「仕事もよくこなすし、私たち妖精メイド以上に頑張ってるわ」

人間も捨てたもんじゃないですね、と続ける

「そう」

「もしかしたら……あの娘にメイド長を任せられるかも」

そう言つてメイド長はレミリアの服のボタンに手を掛ける

「ひ、一人でボタンくらい付けられるわよ!」

そうですか、とメイド長はクスツと笑う。

「……お嬢様、大丈夫ですか?」

「ボタンくらい……」

「違います」

ん?とレミリアは顔をあげる。

「なんか思い詰めた様子だったので」

「え、いや私はっ」

「伊達にメイド長を10年やってはいませんか？」

メイド長がクスツツと微笑む。

「流石メイド長ね、お気遣いありがとう」

でも、気にしなくていいわと続ける。

「そう仰るなら……。あ、あと……お食事が出ていますので」

そう言ってお辞儀をしてメイド長は部屋から出ていった。

それを見届けると、レミリアは鏡の方に向かった。

自分が写っている鏡を見る

(表情固いかしら……私?)

その声の主はメイド長だった。

「なんでしょうか？」

「お嬢様のお世話お願いしていいかな？」

お嬢様と話す機会

「私でよければ」

「ありがとう、今お嬢様はお食事中だから……」

「行ってきますね」

「行ってらっしゃい」

私は早歩きでお嬢様の元へ向かった

懐中時計を見ると短針が？と？の間を指していた

……あれ、ふと思っ。

「そうね、だったら食事後の散歩でもしよつかしら」

「はい」

そういつて私の斜め一步後ろを歩く。

廊下を出て大広間に出て、そして、門を開ける。
ふと、視線を落としてみる。

……微妙に自分の手が震えてるのが分かった

497年生きてきて……震えてるのか？

馬鹿らしい

「お気を付けて！」

ふいに門番の声がした、その声に構わず私はいつもの足取りで歩く。

何処に行くのかって？
決まってるじゃないの

私と貴女が出会った場所。

不完全な満月 最終章

湖の畔で悪魔と人間がたたずみ、二人は夜空を見上げる。

「満月が綺麗ですねお嬢様」

「あれは満月じゃないわよ……………でも綺麗ね」

「……………？じゃああれは」

見上げたまま私はその質問を流して、銀髪の少女に訊いた。

「貴女は……どうやってここに来たの？」

メイドが月から私に驚きの目を向ける、けれど私は月を見続ける。
満月でも無いその月を。

「え……」

「この世界、幻想郷は博麗大結界によって外界からの干渉を受けない筈」

「貴女は……。貴女は、何を捨てて此処に来た？」

「」

メイドが頭を抑えながら俯き低くなるような声で

「……っ」

辺りの風景が歪み、湖や森の風景が抜れていく。

きっとこれも彼女の方だろう、でもそんなの構わない。私は戻らない。

「貴女は何を捨てて……」

「やめて……！」

言い放った瞬間私は吹き飛ばされた。

そして見えない壁にぶつかる。なんてあべこべな力だ。

「痛っ」

ふと見回すと私は結界の中に閉じ込められてるのが分かった

それも特殊な何か、博麗の巫女や大結界のようなモノじゃない。

周りには大きな、壊れて針のスピードが狂った時計が何個もある。

きっと、これが彼女の心象風景。私の悪夢の原因

周りの背景は何もなく、空間として存在している

「ここら辺一体を食ったか」

私は少し目眩がするが立ち上がる。改めて異様な風景だと認識する。

「悪夢は覚めたのかなきゃ」

私は………

何を捨てて……

心？ 力？ 人格？

懐中時計を握り締める

あ……

バリバリッ

凄い衝撃音が鳴る。

「レミイ、聞こえる?」

パチュリーの声が背後からした。しかし背後を振り返ってみても何も無かった。

「……私は結界の外よ」

「あーなるほど」

魔女がため息をつく。

「どつやら貴女との間にタイムラグがあるらしいわ、そこで聞いてほしいことがあるわ」

魔女の声はいつものような落ち着いてるような声では無かった。

どちらかといえば感情を押し殺して、冷静になろうとしてるような、そんな感じ。

「この結界は時空が捻じ曲がってるの、いわば彼女の世界。多分貴女が見てる風景もきつと彼女の心の中の世界よ」

改めて、見渡す。

「寂しかったのかな」

「その世界では彼女が絶対的、いわば神よ。だからもしかしたら時空の狭間に落ちて戻って来れなくなるかもしれないわ」

「そりゃ大変ね」

「レミィ、ちゃんと聞いて！」

「もしかしたら、とか、そんな事考えるよりもね私は、彼女を救い

たいの
「

「……ッ、救えなかったら？ 救えずに貴女は死より怖い恐怖を味わうのよ？」

「ククク……」

「何がおかしいのよ？」

「恐怖なんて、彼女に比べたら遙かにいいわ。それに」

「……それに？」

「私は誰かしら？ スカーレットデビル！ 紅き悪魔！ ツェペシュの末裔のレミリア・スカーレットよ。」

「こんな事で死ぬなんてごめんだわ」

「……やっぱり、行くのね。彼女の元に」

「ああ」

「分かった、私はこの結界を破壊してみる」

「外は任せた」

「彼女は任せたわ」

「何してるの、帰るわよ」

「お嬢様、私は……、私は過去を捨てました。気付いたら……私が何処から来たのか、

この懐中時計は誰から貰ったのか……忘れてしまった。まだ“感覚”として残ってるものもあるけど、いつか忘れてしまう」

「私は過去を捨てました……！」

レミリアに話す、ありったけの思いを、

「そう……」

そういつて私を抱き締める、お嬢様の腕の中は温かった。

私の冷えた芯を温めるくらい、それは心地よかった。

「お嬢様……っ」

自然と目から雫が落ちる

「辛かったわね……」

「うん……」

「私は……ここにいていいの……?」

「当たり前じゃない」

涙で言葉が途切れ途切れになる

「私、は……掃除しか……できないっ」

「それでもいいわ」

「……それに、私は……人間、よ?」

「人間でも仕事は出来るわ」

「私はっ……………」

顔が涙でぐしゃぐしゃになる。

「こんなに……………幸せでいいの?」

「当たり前じゃない」

……………お嬢様らしい。

空間が歪みだす

今度はお嬢様が話す。

「貴女が新しい時を刻めるように、銘を刻むわ」

周りの結界が崩れ去っていく

「咲夜……」

崩壊した壁から月が見える

「十六夜 咲夜」

私が最も美しいと感じた十六夜の月、

満月なんかじゃない、私のなかの、いや二人の間の特別な『月』

「ありがとう」

「咲夜」

「なんでしょうか？」

私の声はまだ涙声だが気にしない。

「ふふ……呼んでみただけ」

何時の間にか周りは元に戻っていた。

私とお嬢様は笑ってた。

塞がっていた何かが消えたように。

お嬢様が紅魔館を背に私に手を差し出す

「ようこそ、紅魔館へ」

「はい………」

私も手を差し出す、

なんだか……懐かしい気がする。

お嬢様と手を繋ぐ。

「咲夜、紅魔館に帰りましょ」

「そうですね」

駆けつけた美鈴とパチュリー様と合流し四人で帰る。

私はお嬢様に会えて良かった

「どうぞ」

紅茶が入っているカップをお嬢様とパチュリー様の前に置く

「どれどれ……」

そう言ってお嬢様は紅茶の薫りを嗅ぐ

「お、いい香り」

「あら、良い香りだわ」

二人が言葉を洩らす スウー、と紅茶を飲む

「美味しい……」

「ありがとうございます、気に入っていただけましたでしょうか？」

「咲夜、今度また作って！」

お嬢様が目を輝かせる。よほど美味しかったのだろうか

「わかりました」

咲夜は自然に微笑む

誉められたのが初めてだからかもしれない

「さーくーやー！」

お嬢様が私の名前を呼ぶ。

「なんでしょうかお嬢様？」

。そして、紅魔館に人間のメイドが加わり、いつもの日常が始まる

f i n

不完全な満月 最終章（後書き）

さて、はじめて東方のSSを書いたわけですが、やはり文才が無い
せいかちよつと薄いなーとか（、・・・）
というのも、これ中学時代に書いたものでして、いくつか添削した
り書き加えたりしてますが、ひどいひどい。
これを読んで、他のを読めば気になった台詞とかの意味が分かるか
もしれません。

全ては元一つ。 始まりがあれば終わりもある。
東方という世界観は自由でいて、自由じゃない、
もしかしたら私達は幻想を追い続けているのかもしれない。

私の幻想郷 前編

此処は私たち天狗や河童が棲む妖怪の山。
河童や天狗、神々が住み、この山の内部では天狗や河童の社会が
来ている。

そんな中、私は今昼寝中。

……記事のネタが無くなって自暴自棄になってるのは内緒。

「どこかにネタが転がってませんかねえ……」

よほど欲していたのだろう、そんな思いが口から溢れた。

仰向けになって天を仰ぎ、秋の澄み切った青空を眺めようとした。

そして、太陽の光で眩しく、目を細めた先に、白狼天狗の影が見え
た。

彼女達は今日も山の警備だろう、ふむ、私も動かないより動いたほ
うがいいのかもしれない。

「さて、とりあえず色んな所に出向いてみますか」

私は、私なりにやらなくちゃいけないのだ。
そんな変な使命感を持ちながら私は地を蹴り、空へと飛び立った。

……と意気込んでみたものの行くあても無く。

「だからって何で私の所に来るのよ」

「あ、煎餅お一ついいですか？」

「話を聞きなさいよっ」

「そつだ霊夢さん」

「ん、何よ」

私は万年筆と文花帖を胸ポケットから取り出す。
ネタがあつたら文花帖に素早く書き留める、これが私のいつものスタイル。

というか鴉天狗は皆このスタイルだろう。……中には河童が発明した録音機なるもので音声を保存してやってるとかも聞くが。

「単刀直入に、何かネタありますかね？」

「無い」

そもそもネタって言われてもね、と霊夢が続ける。

「じゃあ何か変わった事とかはありますかね？」

「強いていえばお賽銭が減ったことかな」

茶を飲みながら話す霊夢。

……山の神社の巫女に信仰を吸収されたり？

嗚呼、そうだった博麗神社には元から賽銭が少ないのだった。それなら別段変わったことはない。

ネタにはなりませんね。

「なんか失礼な事を考えられた気がする」

「か、考えてませんよっ」

……これが勘違ってやつですか、鋭い目で霊夢に睨まれしどろもどろし、どうにか誤解（実際は誤解ではないが）を解く。

「ふうん、まあいいわ」

なんとか誤解を解き、はあ、とため息をして万年筆と文花帖を仕舞う。

「いつまでいるの？」

「煎餅もう一枚頂いたら、おいとましますね」

「煎餅ねえ、そんなに人気かしら……」

.....

最近異変が起こらない。

妖怪の山の騒動も目立たなかったし、ボヤ騒ぎ程度だったようだ。私が出向かなくても良かったんじゃないかと思う。

全く、平和過ぎて……。

上手く天変地異とか起こしてくれればすぐ記事に出来るのに

「平和を嫌う天狗、ですか、……何かこの二つ名は嫌ですねえ」

「あ、文じゃないか」

飛んでいると後ろから箒に跨がった魔理沙が声を掛けてきた。
魔理沙は空の大きな布状の袋を持っていた。……何をやる気だ。

「魔理沙さんですか、これからどちらへ？」

「紅魔館に行くところだ」

嗚呼、どうみても図書室の本を盗む気ですね……。

「そうですね、頑張ってくださいね」

「……？ まあ頑張るぜ」

香霖堂の店主、森近霖之助が愛想よく挨拶する。

「こんにちは、霖之助さん」

挨拶するや否や、店内を見渡す。

相変わらず用途の分からないものや外の世界のモノがいっぱいだ。發明好きな河童に今度教えればきつと歡喜するだろう。

「そつだ霖之助さん、何か珍しいモノでも手に入りましたかね？」

「最近は特に無いなあ」

「そうですか、ありがとうございます」

何故だろう、今日はこれといって何も無い。

誰かの陰謀かしら？ まあこんなくだらない陰謀するやつなんていないでしょうけど。

まあでも、たまにはこんな日があるのかな。

「あ、そつだ。私の知り合いに發明好きな河童がいるんですが紹介してよろしいでしょうか？」

「ほう、發明好きな河童か。……会ってみたいな」

なんだか記事のネタよりも色んな人に会うのが楽しみになってる私
がいた。

ま、そんな日もあってもいい筈だ。

……ということで人里に来てみた訳ですが

「すまないな、水汲みを手伝ってもらって」

「いえいえ」

何故私は慧音さんと水汲みをしてるのでしょうか。

「はい、これ」

慧音さんから茶色い水が入った飲み物を手渡される。

「これは…?」

「麦茶だ、美味しいぞ。夏バテにも効果があるらしい」

「へえ、そうなんですか」

もう秋だから夏バテは関係ないですよ、とは言わなかった。とりあえず、試しに手渡された麦茶を一口飲んでみる。

「……あ、美味しい」

「また飲みたくなったら来なよ、まだ一杯あるし」

「ではお言葉に甘えて」

残りも飲み干し、飲み干したときの余韻を味わいながら、私は慧音に尋ねた。

「そういえば何か変わったことでもありますかね？」

慧音が顎に手を当て、考えるポーズをする。

「うーん、無いなあ。……記事のネタにするなら紅魔館にいったらどうだ？」

「なるほど紅魔館ですか。確かにそうですね。ありがとうございます」

「簡単に言えば突撃取材ですね」

「とりあえずは知人さんということですが、お嬢様に迷惑が掛からないようお願いしますね」

「はい」

美鈴が門を開く。

そういえば魔理沙は無事に本を”借りる”事が出来たのだろうか。

……後で図書館に行ってみよう。

久しぶりの紅魔館、周りを見渡すと妖精メイドたちがいそいそと掃除をしていた。

私の家にも掃除のメイドさんが欲しいものですね。

「……ぎゃおー」

「こ、これは伝説の怪物モケーレムベンベ！ なんとこの射命丸文、伝説の怪物に遭遇しました！

果たしてモケーレムベンベの生態はいかに！」

「モ、モケー……。ごめん、分からないわ」

「……」

「……」

「……」

「なんとかいいなさいよっ、恥ずかしいでしょ！」

「これは……趣味ですか？」

「趣味でもなんでもないわ、ただの暇潰しよ！」

「……そうですか」

周りをチラッと見るとハンカチで鼻血を拭うメイドが数多。
この異様な雰囲気、私は一体どうすればいいのでしょうか

- - - - -

レミリアは私を殺そうとした咲夜と一緒にどっか行っちゃった。
……とりあえず、私はさきほどのゾツとする話を私なりに肥大化させて文化帖に書き込んだ。

「折角、紅魔館に来たものの取材する場所が無いし、図書館に行ってみますか」

慧音の言う通り紅魔館に来て正解でした。
新聞の記事にしたらメイド長に半殺しにされそうですが……。

廊下を歩き、幻想郷一を誇る蔵書量の図書館の前に辿り着く。
そこにある意味住んでいる魔女、パチュリー・ノーレッジは凄い知識人なのだと私は思う。

そう思いながら図書館の扉をノックする。
そういえば魔理沙はどうなんたんでしょうか、無事、盗みは成功したのでしょうか。

「失礼しまーす」

「あら、珍しいわね」

そこにはパチュリーと司書、……そして魔理沙がいた。

あの、なんかクリスタルみたいなモノに魔理沙が閉じ込まれてる気がするのですが。これは？

「パチュリーさん、これは一体？」

「新しいマジックアイテムを使ってみたの。お陰で魔理沙から本を守る事が出来たわ」

得意気に話すパチュリー。その傍ら、おどおどしている司書さんともあれ、珍しい光景なのでクリスタルに閉じ込まれている魔理沙の写真を撮る。撮った刹那、ドンドンとクリスタルを叩き必死の抗議。

お陰で二枚程、カメラに収めさせていただきました。

助けてくれー。と言ってる様ですが、このクリスタルは音すら通さないようです。

「そつだ、何か変わったことでもありますかね？」

「魔理沙が捕まった事かしら」

「あ、いえ、他にもありますかね？」

「強いて言えばレミイのカリスマが著しく下がった事かしら？」

「ああ、モケ……いえ、何でもありません。ありがとうございます。」

「どついたしました」

くるりと向きを変え、

「司書さん、これはいつまで続くんですかね……？」

「パチユリー様の実験台にされるかと……」

さらりと斜め上の答えをした司書

「お仕事、頑張ってくださいね」

「は、はいっ！」

あ、そっだ、良い事思い付いた。

「あーっ、あれは!!」

図書館の扉の前で私は大声で叫ぶ。

距離は……大丈夫、この距離なら全員”写る”だろう。

「何!?!」

二人、いやもとい三人がこっちに向いた瞬間、私はカメラのシャッターを押した。

小さなフラッシュに驚く司書

間をおいて数秒後に聞こえる「あーっ！」という声

「よく撮れてるじゃないですかねえ」

そう言って足早に図書館を後にした。

そうか、レミリアは通行人に”暇潰し”をしているのか
なんだか可笑しくて笑いを堪えるのが大変だった。

「そつだ咲夜さん」

「……？記事にしたら殺すわよ」

「あ、いえ、しません。そのレミリアさんの隣に寄って貰っていいですか？」

「……え、あ、いいわ」

「ちょっと、文、どうするつもりかしら？」

「ちょっとした、記念撮影です」

「ふふ……二人とも良い顔でしたよ。上手く撮れてればいいのですが」

誇らしげな笑みを浮かべ次の目的地に向かう。

図書館で思い付いた”良い事”をしようと、本来のネタ探しを後にする

何でだろうか、皆の元気な顔が見たくなつたから？

さあ、私にも分からない。

「楽しければいいんですよ」

そんなアウトロー精神を自分に言い聞かせる。

目の前に見えるのは麓の神社。
そこには二人の神と一人の巫女が住んでいる。
空は朱色に染まり、妖怪の山は木々の紅葉で綺麗だった。

私は神社の境内に降り、紅葉を箒で集めてる早苗に会釈した。

「あら、天狗さん」

「鴉天狗の射命丸文です。以後お見知りおきを」

「よろしくお願いします。私は東風谷早苗と申します」

ペコリと頭を下げる早苗。
どこの巫女とは違うオーラが漂っていた。なんとというか本来の巫女って感じがします。

早苗の事は知っていたが話したりはしなかった。いや、話をする機会が無かった。

これを機に、親交を深めようか。うん、そうしよう。

「生活は慣れましたか？」

「は、はい。幻想郷の人達は親切ですね。色々と生活の豆知識を教えてくださいました」

微笑む早苗、なんだか幸せそうに見えた。

「そうだ、お二方は？」

「神奈子様と諏訪子様は中で寝転がっています」

「そうですか」

「そういえば、どうして此処に？」

「三人の写真を撮りたいなあ、と」

「そうでしたか、記念写真いいですね。……少しお待ちくださいね」

なんだか楽しげな早苗。

此処に来たのもある意味奇跡なのかもしれない。

いや、奇跡なんて後から気づくものだ。

少しすると神奈子と諏訪子が早苗に急かされながらも来た。

「早苗ー、何するのさ?」

「早苗ー、ご飯まだあ?」

(へたれていますねえ……)

心底、思った。なにやってんだ神様。

「写真撮りますよー」

「さ、さ、神奈子様、諏訪子様、ピースピース!」

「じゃ、写真!?魂吸われるわよ!」

「神奈子、それは迷信だと思うよ?」

「……え、そ、そうよね。でも、だ、だ、大丈夫かしら」

(何なんですかねこの神様……)

太陽は山に隠れるちょっと前。

私は最後に博霊神社に寄った。

「あら、また来たの？」

どこかの魔女のような話し方をした霊夢が言った。

「文ー、さっきは助けてくれよー。酷いぜ全くー」

魔理沙も一緒にいた。

恐らく夕食を御馳走になるつもりだろうか。

軽く会釈して神社の中に入る、魔理沙の話に関わるとなんか問われ
そんな気がしたので半ば相槌と愛想笑いで軽くスルー。

魔理沙は話すネタも無くなったのか、くつろぎながら煎餅を頬張っていた。

煎餅、人気なんでしょうか？

いや寧ろ煎餅しか無いから、ですかね。

一人、自己解決し私も煎餅に手を付ける。

「そついや文は何しに来たの？　はい、お茶」

「記念写真のサービスに。……あ、これは麦茶ですね！」

「記念事なんてあったかしら……、その麦茶、慧音から貰ったのよ。美味しいって評判みたい」

よし、明日また慧音の元に行って麦茶を分けてもらいますか。
最近疲れ気味の椀にも飲ませてあげよう。

「で、写真撮れば帰ってくれるのかしらっ」

「まあ……はい、そうですね」

どうやら夕食に私の分は無いようだ。

「あ、んじゃ霊夢さんと魔理沙さん並んでくださいな」

「私もか？」

「はい」

気恥ずかしそうに二人は並ぶ。

「んじやいきますよー」

シャッターを押す。

パシャというシャッター音

「良く撮れてるといいですね」

そんないつもの台詞を言った。だけどそんな台詞がいいのだ。ふと外を眺めると夜が始まっていた。

全く、私も平和ぼけしましたねえ……。
薄っすらと笑みを浮かべ、漆黒の大空へと羽根を広げた。

「お嬢様、文さんからこれを……」

「あら、これは……」

其れは私と咲夜が笑いながら写っている一枚の”写真”だった。

全く、粹なことしてくれるじゃない。

「良く撮れてますね」

写真と同じ笑顔の咲夜

「あ、もう一枚あるわね」

「神奈子様ー諏訪子様ー、文さんからこれ！」

「お、この前撮ったやつだよな？ よく撮れてるじゃない」

「……これ何時撮ったの……？」

「あー、神奈子はあの後お酒飲みまくってたからねえ」

「そうだったそうだった。 って、私だけ目が閉じてる！」

一人落胆する神奈子。 早苗がそれを宥める。

「今度は幻想郷の皆と写ってみたいねえ」

諏訪子が写真を見ながら呟く。

「私達、幻想郷に来て間もないですしね」

「なら今度、ここで宴を開けばいいじゃない！」

テンションの起伏が激しい神奈子が提案する

「お、いいね」

「それ、いいですね」

麓の神社は普段より活気に満ちていた。

.....

「霊夢ー！」

「なによ、騒がしいわね」

「これ、文からだってさ」

「あらこれは……」

「早く開けてみようぜ」

「分かった分かった急かさないの、今開けるわよ」

魔理沙から手渡された封筒。

それを開封すると一枚の写真が入っていた

「お、これってこの前の文が撮ったやつだよな？」

「ええ、よく撮れてるわねえ」

「そうだな」

私はクスツと笑い、魔理沙はにいと笑う

「さて、夕飯にしようかしら」

「待ってたぜ」

「今日は私の分だけよ」

「なんだよ、霊夢のケチ」

「それ以上言ったら本当に魔理沙の分、用意しないわよ」

「あ、私の分用意してたのか、始めからそう言えばいいのに」

はあ、と溜め息をつく。

ま、魔理沙らしいからいいんだけど。

「ねえ魔理沙」

「なんだ？」

「この写真一枚しか無いし、あんたにあげるわ」

「いいのか？」

「いいわ」

「ありがとな、家に飾っておくよ」

ずっと平和だったら、ずっと時間が止まっていれば、ずっとこのまま
だったら。

どんなに、良いことだろうか。

でも、そんな事は無理なのだ。

だからこそ私は過去を刻まない、刻みたくない。

だって、人間は儂いから。

情なんてあつたら、ただ悲しいだけ

「あ、霊夢。もう一枚入ってたぜ」

「……え」

全く、鴉天狗はお節介だ。本当にお節介。

捨てるわけにもいかないじゃない、魔理沙が私にそんな笑顔を渡したら

「仕方無いわね、折角だし、部屋に飾っておくわ」

「ふう、一仕事終えた麦茶も格別ですねぇ」

結局、新聞は休刊にして撮った写真を配達にしていた。

「ま、そんな日があってもいいですよね」

そう言って麦茶を一杯。

ふと、くつろいでいると玄関からノックの音が聞こえた。

「文さん、椀ですー」

「いらっしやい、麦茶冷やしておきましたよ」

「わあ、そうですか。……して、麦茶とは一体？」

「うーん、お茶を冷やした飲み物と言った方がいいですかねえ」

そう言って手招きして椀を部屋に呼ぶ。

「はい、警備お疲れ様」

「これが麦茶ですか」

一口頂きますね、と言って麦茶を飲む

「どうかしら？」

「凄く、美味しいです……」

目を輝かせながら椀は答えた。ああ、私と同じ反応。

「人里から分けて貰った甲斐がありました」

ニコツと笑うと、それにつられて笑う椀。

「そうそう椀、お願いしたいことが」

「……？ なんてでしょうか」

「写真、私と一緒に写ってもらえますか？」

「私、と？ いいですよ」

私の幻想郷はこのカメラに納める。

たとえ月日が過ぎようと変わらない永遠の時を。

それが私の生き甲斐であり、楽しみなのかもしれない。

新聞を発行し、写真を撮り、微かな事象さえ残し、リアルタイムな歴史を紡いでいく。

私は、そんな平和な幻想郷に夢を見た一人なのかもしれない。

「文さん？早く撮りましょうよー！」

「あ、すみません考え事してました」

カメラのシャッターを押す。もちろん河童に改造してタイマー機能

そして素早く椀の隣に立つ

「あ、文さん近い……」

「椀、笑ってくださいー！」

「え、ええっ！？」

パシャ

シャッター音が鳴り響く。

ああ、出来上がった写真が楽しみで仕方無い。

そんな時、椀がボソッと私に言った。

「文さん、目つぶっちゃったんで、もう一枚いいですか……？」
「……え」

私の幻想郷 後編（後書き）

これ実は2008年の6月頃に書いてたやつなんですよねw
いつもの路線ではなくて、少しほのぼのするようなそんな話を書き
たかったもので。

とりあえず、なんか暖かい気持ちになって欲しいなあとかなんとか。

2008 / 11 / 22 記

咲夜は今私の側近だ。限りある時間、一秒でも私の側にいてほしいから。

だから、私は咲夜にメイド長を辞めさせた。

……と言っても、私の世話係なものだから仕事量は減っていない。

だけど最近、咲夜に負担をかけない為にもある程度の事は自分でやるようにしている。

「おはようございます。お嬢様」

「あら、早いね。おはよう咲夜」

いつの間にか咲夜は私の部屋にいた。

こんな日常は何十年も続けば慣れる。

慣れる……という言い方はおかしいわね、咲夜が毎日来てくれるのが嬉しいって言えばいいのかな。

「今日は天気も良いし、日傘を刺して散歩でもどうかな？」

「良いですね。ピクニックなんてのはどうでしょうか」

咲夜が微笑みながら話す。

「ピクニックかあ、パチエや美鈴も誘って皆でさ……！」

「私もそう思って誘ったのですが……、用事があるそうです。」

「まあ、仕方ないわ二人で楽しみましょ」

そう言って私は寝巻きのままベッドから降りる。

「んじゃ、着替えてくるからちょっと待ってて」

「はい、お嬢様」

いつもの服に袖を通す。

いつも見慣れた光景。

だが、徐々に変わりつつある光景に私は薄々気付いていた。

咲夜は大人の女性になった。

人間でいう20代後半くらいの容姿、といえはいいのだろうか。

だけど、私と出会ってから何十年も経っている。

……咲夜の体内時計を時間を操る能力で止めてるとしか思えない。
だが、咲夜からそんな話は聞かないから推測でしかないのだけど。

『私の血を飲めば咲夜といつまでも一緒にいられるわ』

いつか言った言葉。

『いいえ、私は人間のままお嬢様と共に
』

私の血、永久的に生きる事を咲夜は拒んだ。

そんな事を考えてるうちに、ドアのノック音が聞こえた。

ノックの主はきっと、支度をすませた咲夜だろう。

「あー、はやく着替えないと……。」

……ああっ

「
」!

服のボタンを掛け間違えていた。

普段なら……しない筈。

そして響き渡るノックの音。

それがドアノブに手が掛かる音に変わる。

「お嬢様入りますよー……って、あれ？」

咲夜が見たのは主が服のボタンにしどろもどろしてる光景。

「あ、その咲夜、これは根本から問題があつてだな…」

「私が服を着替えさせてあげますから…。」

「じゅん」

どうやら時を操つたらしく、一瞬で服のボタンが直された。

「それじゃあ、行きましようかお嬢様」

ニコツと笑う咲夜

「さ、咲夜」

「なんでしよつか？」

「その、大丈夫なのか？」

「はい…？」

「咲夜だってもう能力とか使ったら…その…」

「お嬢様の心配には及びません」

「うん……」

「ではいきましょうか、お嬢様」

楽しそうな咲夜。

一緒にいられる時間を考えると虚しくなってくる。

その時が一瞬で崩れそうで…。

「お嬢様？はやく行きませう」

「え、あ……そうね」

「綺麗……」

咲夜の日傘のお陰で思いっきり空を見上げることが出来なかったが。

…澄みわたる青い空

そよ風が気持ちいい。

「絶好のピクニック日和ね、咲夜」

「はい、折角ですから散歩しながら話しましょうか」

私が歩くとそれに合わせて咲夜が私の歩みに合わせて歩く。

「そついや、新しいメイド長はどうなの？」

「美鈴ですか…？メイド長になったのはいいものの、細かい所は…」

咲夜の話聞く。

新しいメイド長の美鈴の事を話す咲夜。なんだか楽しそうだ。

「…でも、やはりそこが良いかもしれませぬ」

話を聞いてるうちに大分歩いた。

「あ、お嬢様、あそこに行きませんか？」

咲夜が指を指したのは

「あそこは……」

咲夜と私が初めて出会った場所

あの時もこんな綺麗な空が広がっていて……。

まあ、あの時は夜だったから青空というより星空なんだけど。

「いいわ、そっぴゃ咲夜何作ってきたの？」

そう言って咲夜の持っているランチボックスに目を向ける。

「あ、これですか？秘密です」

「もー、はやくいくわよ咲夜っ！」

はいはい、と言って私の早歩きに付いていく咲夜

二人とも楽しくて、どこか懐かしい気分に浸っていた。

「さあ、はやく開けて咲夜」

目を輝かせる。

湖の景色よりも咲夜のランチボックスが楽しみだった。

「はいはい、今開けますよ」

そういつて咲夜はランチボックスを開く。

「わーっ、これはサンドイッチかしら？」

ハムとレタスが挟まれたサンドイッチを手取る。

「咲夜の手作り？」

「はい、お嬢様」

確かに見た目も綺麗に整っている。それがいかにも咲夜らしい

「食べていい？」

咲夜に聞く。

普段少食の私だが、今日は違う。

「そうですね、食べましょうか」

そう言って咲夜もサンドイッチを手取る。

「それじゃ」

「いただきます」

「美味しい…」

「私の手作りですから」

そう言って二人はフツと笑う。

「そういえば…」

咲夜が湖を見ながら話をする。

「お嬢様と初めて会った場所ってここでしたね」

「そうね、懐かしいわね…」

「あれから何年経ったのでしょうか」

咲夜は空を眺める。

私も空を眺める。

「90年かしら…?」

「もう少しいきたいと思いますよ」

「そうかな？」

「はい」

そんな会話をしながらサインドイチを頬張る。

「咲夜」

美鈴がメイド長になったため門番は名も無き妖精が努めている。

「お嬢様、門を開けてみてください」

咲夜にせかさねながらも門を開ける私。

」「誕生日おめでとうございますー！」「

紅魔館のホールには数えきれない妖精メイドとパチユリーと小悪魔、
そして美鈴がいた

…そうだった、私の誕生日だったんだ

しかも

」「600歳、おめでとうございます」

側にいた咲夜がいつの間にか片手にケーキを持ちながら話す。

「ありがとう、咲夜」

「さ、行く」

咲夜のケーキの持っていない方の手を握ってホールの真ん中に向かう。

真ん中にはパチュリー達がいる。

「レミイ、600歳の誕生日おめでとう」

「おめでとうございますっ」

「お嬢様、おめでとうございます」

「ありがとう。……それにしても」

皆を見渡す。

「…月日は早いわね」

改めてみると、皆大人になった気がする。

「ってことで、お祝いするために全員呼んだんだけど」

パチュリーが話す。

「皆、仕事あるから帰らせていい？」

「あ、ああ…いいけど」

「お嬢様、はやくケーキ食べましょう！」

と言つ美鈴。

「特別に図書館でやりましょ、誕生日祝い」

それを聞いてさわぐ美鈴と小悪魔。

それを見て呆れる咲夜。

「パチエ」

「何？」

「ありがとう」

「何よ突然…？」

突然の言葉に顔がひきつるパチユリ

図書館はこの百年間、何も変わっていない。

ただ言うなら本を強奪する魔法使いが来なくなったので図書館の本はきれいに整理されている。

「吸血鬼が自分の誕生日にケーキって……。吸血鬼も墜ちたものだな」

そんな事を昔言っていた気がする。

だが、今は今だ。

「ケーキ切るの、咲夜さんお願いしますっ」

はいはい、と咲夜は包丁を片手にケーキを均等に切る。

その光景を見ている私たち。

この光景は……、

いつまで見ていられるのだろうか。

「お嬢様？」

「え？」

「その、ケーキ切りましたよ」

「あ、ああ、ありがとう咲夜」

駄目だ、そんな事考えたら。

只、悲しくなるだけ。

「美味しいですー！」

と美鈴の歡喜の声。

「あら美味しい…」

「私が作ったんですよ」

そんな、パチユリーと咲夜のやりとり

それを眺めながら紅茶を啜る。

「あ…」

懐かしい味……。

「これも、咲夜が作ったの？」

「はい」

ニコツと微笑む。

私もつられて微笑む。

「なんだか懐かしいわね」

「あれから百年が経ったなんて信じられませんね」

「……そうね」

信じたく無い。

出来ることなら、

出来ることなら、この時間が永遠だと願いたい。

あれから小悪魔が焼いたクッキーを食べたり咲夜の紅茶を飲みながら話をした。

途中から私がフランを呼んで六人で話した。

フランは久々のデザートなのか、美鈴以上に騒いでいた。

「さて、私は仕事があるので抜けますね」

新メイド長の美鈴が席を立つ。

「仕事、さぼら無いようにね」

「や、やだなあ仕事さぼりませんよー」

そういつて、美鈴は仕事に戻った。

「んじゃ、私も魔法の研究に戻ろうかしら」

「えー、パチユリーも？」

フランが頬を膨らませる。

最近、という表現はおかしいが

数十年前にフランは地下の部屋から紅魔館の部屋に住むことになった。

百年過ぎ、フランの破壊衝動は制御出来るようになり、今では普通に紅魔館の中を散歩してることが多い。

「うーん、妹様も本読みましょうか？」

「うん！」

そんなこんなで、じゃあねと言って二人はパチエの書斎に行った。

小悪魔と咲夜と私。

気まずい空気。

「あ、そ、その私も行きますねっ」

そう言っつて、小悪魔は本来の仕事に戻った。

「……みんな行っっちゃいましたね」

「そうね」

「あ、私の部屋にいかない？」

「いいですよ」

そういつて、二人は席を立つ。

咲夜に聞こう

いつまで「じじじ」で居られるか。

廊下の窓から外を見たら、もう夜だった。

……ちょうど満月だった。

部屋のドアノブに手をかける

いつの間にか私の部屋は妖精メイドが掃除したらしい。

座るものはあまり無いのでフカフカのベッドに座る。

「咲夜、隣座って」

「はい」

「ねえ、咲夜……」

「なんででしょうか？」

「咲夜……」

咲夜の袖を掴む

駄目だ、言えない

でも、言わなければ

「いつまで、咲夜と一緒にいられるの？」

紅き月と壊れた懐中時計 第二章

いつまで……いられるの？

また…

また、つまらない日々を送るなんて考えたくない。

一緒に、百年も千年も貴女といたい………

.....

「そう……長くはないと思います」

咲夜が俯きながら答える。

ずっとこの答えが出るのが怖かった。

だが、心の中の片隅ではこう言われることが分かっていたのかもしれない。

「そんな…咲夜といられないなんて…」

咲夜を抱き締める。

「私だって出来ることならお嬢様と居たいです」

咲夜が涙を浮かべる

「咲夜……。」

ただ、そう言うことしか出来なかった。

あのと、咲夜と色々話をした。

春を取り戻した時のことや、満月の事を解決したこと。

……、そつだ

その手があったか

『蓬萊の薬』

それを飲めば死ぬことは無くなる。

何年も何十年も何百年も何千年も。

だが、それは最終手段でしか無い。

急かして咲夜に飲ませたら、永遠に生きることになる

そんなことしたら、精神が廃れるだろう。

そんな咲夜は見たくない。

なら、何の方法がある？

冥界は靈魂が減った今、冥界の姫以外に靈魂が住むことは無い筈。

なら、神に頼むか？

八坂の神はそんな事を出来るわけがない。

巫女は・・・

駄目だ霊夢はもういないんだった。

隙間妖怪はたかが知れてる。

……やはり、蓬萊の薬しかないのか……？

.....

「お嬢様ー？」

咲夜の声が聞こえる

「まだ寝かせてー」

「…まあ、仕方ないですね。昨日は色々ありましたから」

「起きたら一声かけて下さいね」

と、言つて咲夜は帰っていった。

「ふぁ……」

伸びをする。

今日は…何をしようか…。

本当に眠いのもういちど寝る。

いっそ、夕方まで寝てしまおうか。

…いやでも、咲夜と一緒にいた方が。

違う……そんな事より大切なことがある。

……咲夜を医者に見せた方がいいのだろうか。

あの医者なら分かる筈だ。

そうと決まったらやることは只一つ

月の頭脳とまで言われた八意永琳に診てもらおう。

それしかない

今日の夜、出発しよう。

だが問題は咲夜をどうやって医者に見せるか、だ

それに、あの医者は何を考えるのかわからない。

いや、ここは正直に咲夜に言った方がいいのか？

天井を仰ぐ。

耳を澄ませば妖精たちの話声が聞こえる。

「さて・・・着替えるか」

また紅魔館の1日が始まる。

あれから最善の方法を考えた。

お陰で食事が喉を通らない。

困ったものだ。

だが、その分頭が冴えた。

方法は決まった。

やはり、咲夜に言っつて永琳の元へ。

でも、咲夜が断つたらどうする？

いやそれでも、無理矢理でも連れていくしかない…。

そう、決心がつくと私は咲夜の部屋に向かい始めた。

時刻は？と？の間

つまり、夜が始まった後。

辺りは静けさの波に包まれる。

決心はついた。

そして咲夜の部屋の前に着く

軽く深呼吸をする。

600年生きてるが、こういうことは慣れてない。

どちらかというと、力でねじ伏せてきたからだ。

コンコンとドアをノックする

部屋の中からどろどろ、という咲夜の声が聞こえた。

「入るわよ、咲夜」

咲夜は本を手に紅茶を飲んでいた。

「お嬢様、どうなされましたか？」

「いや、ちよっとね」

咲夜が座ってる反対の椅子に座る。

「ねえ、咲夜」

「なんででしょうか？」

「私は……、不安なの」

「お嬢様……？」

「いつか、咲夜が消えてしまっつて考えると」

「お嬢様、私は大丈夫です」

そういつて、主人に向けた最高の笑顔をする。

レミリアにとって、それは寂しくなるだけだった。

「そうだ、手品をしましょうか？」

「う、うん」

そう言つて咲夜が立ち上がる時だった。

「！」

咲夜が崩れ去るように倒れた。

「咲夜？……咲夜っ！？」

どうやら気を失っているようだ。

……あまりに唐突の出来事。

だが、当初の目的である永琳にみせる事が出来る。

いや、そんなこと考える自分に腹が立った。

時刻は針が？を過ぎた辺り。

夜雀や虫が活動する時間帯。

……悪魔にとっては真の夜はまだだ。

が、悪魔は従者を抱え医者の方へ向かう。

普段は空を飛べばあっという間に着く永遠亭も

咲夜を抱えながら空を飛ぶわけには行かないので走る。

走った。

走りながら、ふと思う。

咲夜に助けられっぱなしだった、と

今度は私が助ける番。

……月は半月だった。

「はあ……はあ……」

弾幕ごっこを最近やっていないせいか少しキツイ。

だが、こんな所で休むわけにもいかない。

前方に目を凝らすと村が見えた。

月を取り戻すために途中通った場所でもある。

だが、あの時は隠されてしまったが。

そうこうしてるうちに、村に着いた。

辺りは眠ってるかのように静かだった。

村全体が眠ってる、そう言っても過言ではない。

だが、甘くは無かった。

「待て」

律する声。その声には明らかな敵意があった。

「待て、…と言われて待つとでも？」

「村を守るのが私の役目なんぞな」

半妖である上白沢慧音が明らかに敵意のこもった眼で私を睨む。

「視えないのか？抱えてる人間を」

「見えるぞ」

「だが、あなたは“見えて”るのか？」

「…はっ、何を言いつと思ったら」

腹が立つ。

あんたは私の何を知っている？

咲夜を片手で抱く。

もう片方の手を夜空に真っ直ぐと伸ばす。

時間が無いんだ。

「邪魔だ」

「神槍スピア・ザ・グングニル」

神槍を勢いよく投げる。

生死を見届けるほど暇では無い。

村を駆け抜ける。

追っ手は……来なかった。

いっそ、焼き付くしてしまおうか？

そんな考えが過る。

私は、前に進まなければならない。

畜生

痛い、痛い、痛い

だが、咲夜を守るには私が痛い目に会わなければならない。

竹林を掻き分けて進む。

月が照らす。

ふと竹林が無い所に出た。

辺りを見回すと永遠亭がそこにあった。

「辿り着いた……」

改めて自分の体を見る。

ポロポロだ。

咲夜が見たら何て言うかな……？

「私が見てくるわ」

「師匠、いいんですか？」

「大丈夫よ、きっと」

そう弟子に返事をする玄関に向かった。

「ここまで来たのに…」

視界が朦朧とする。

神槍を放ったエネルギーと竹林のせいでレミリアの体はいつしか咲夜を抱えるだけで精一杯だった。

「情けないな……」

一歩ずつ、進む

土を踏む音がやけに聞こえる。

やっとの思いで永遠亭の玄関に辿り着く。

玄関を開けようとしたとき

内側から玄関は開いた。

「あら……、いつぞやの悪魔。」

永琳はレミリアの抱えてるヒトに視線を落とす。

「そして、メイド」

「永琳、単刀直入に言う」

「なあに？」

「咲夜を診てくれ」

「診ないと言ったら？」

「手段は選ばないつもりだ」

「私は死なないわよ」

「……ッ」

軽く舌打ちをする。

それを見た永琳はクスツと笑う。

「まあいいわ、診てやるからこっちに来なさい」

永琳は弟子である鈴仙を呼ぶと咲夜を運ぶように命令した。

「あなたも傷だらけね」

「私の事はどうでもいい、咲夜を早く！」

「……………。分かったわ」

悪魔を隣部屋で待つよう指示すると永琳は悪魔のメイドを診る準備をする。

「いいんですか？礼儀もない奴に」

鈴仙が嫌悪感を露に話しかける。

「仕方ないわ、お気に入りのメイドが倒れたんですもの」

気が動転するのは当たり前だわ、と付け足す。

「し、しかし」

「優曇華、少し黙ってて」

師匠の真剣な目を見て、すみませんと呟く鈴仙

布団の上で気を失ってる咲夜を見る。

なんら、”眠ってる”表現の方が正しいのかもしれない。

永琳は咲夜の診察を始める。

「あら、いつぞやの悪魔」

「……」

「無視？……良い度胸ね」

そう言って輝夜は懐からスペルカードを出す。

「今はそれどころじゃない」

「どっさりっ」とっ」

疑問と微笑が混じった声

レミリアの服装に気付いたか事態を悟る。

「……そういう事ね」

しばしの沈黙。

だが、沈黙を破ったのはレミリアだった。

「……なあ、輝夜」

「なに？」

「一つ聞きたいことがある」

輝夜と目が合う。

「蓬莱の薬について教えてくれ」

「なっ、……何を言い出すかと思えば」

驚いた、半永久的に生き続ける悪魔も不老不死に興味があるのか？

……いや、違う

この緊迫とした空気。

……そういうことか。

そう輝夜は考えた。

そして

「貴女らしくないわね、何があったの？」

あえて知らないフリをする。

いや、まだ”知ってる”訳ではないが。

「……咲夜が」

咲夜？ああ、時を操るあのメイド

いつもレミリアの側にいたあのメイド

「咲夜が倒れた」

「倒れた……だけ？」

「……」

輝夜の疑問に嫌悪を感じたのか口を閉ざすレミリア

一方、倒れた”だけ”なのに緊迫してる状況に困惑する輝夜

……更に緊迫とした沈黙。

「ごめんなさい、話変えちゃったわね」

今度は輝夜が沈黙を破る。

俯いていたレミリアが顔を上げる。

「蓬莱の薬は飲むと不老不死になるわ」

私や永琳のように、と話続ける

「飲めば体の成長は止まる

そして……永遠にこの世を彷徨うことになる」

「貴女は蓬莱の薬の事を知ってどうするつもり？」

「そんなことはどうでもいい」

「まさか」

ふと気付く

「まさか、あのメイドに飲ませるつもり？」

「なっ」

凶星ね

「なら、やめた方がいいわ、彼女の為にも」

「それにもう蓬莱の薬は無いわ」

「……」

三度目の沈黙。

だが、破る者はいなかった。

一方、永琳がいる部屋。

「百年、よくこの体を維持してたわね……」

「どういづことですか？」

「彼女は人間よ。その人間の寿命は60から80歳と聞く」

……その人間が百年も生き、20代後半くらいの若さを保つことは凄いことよ」

「ってことは……？」

「考えられることは一つ。」

彼女の能力で体内時計の時間を止めている」

「でもそれだと……」

「ええ分かってるわ、……時間は止まっている。」

けど、体内時計は完全に時間が止まっている訳ではないわ」

「はあ……」

「だからよ」

「だから百年も生きられたのが不思議なの」

「え…？師匠、逆では？」

「逆じゃないわ、時間を止めている。

それは能力を使うことによって止めている。

能力を四六時中使うことは自身の破滅、又は精神崩壊する可能性がある

けど、彼女にはそれらが及ぼされていない

ひよっとすると彼女。」

咲夜を見つめる永琳

「彼女も……月の人間なのかもしれないわね」

「月人……姫様や師匠と同じ、ということですか？」

驚く鈴仙。

「まあ、推測でしかないけどね」

その根拠は一つある。

幻想卿の人間が能力を使う事が出来るのは稀だからだ

ただ、それだけ。

「まあ、いいわ診察するから鈴仙手伝いなさい」

「え、あ……は、はいっ」

いきなりの話の転換に戸惑う鈴仙

どうやら師匠は鈴仙に話す気は無いらしい。

「心臓が止まっている……?」

いや、そんな筈はない

「そんな、とまっ」

「静かに」

耳を澄ます。

「本当に微弱ね……」

まさか彼女

”これ”を何十年間も…。

正直、これは医者が解決出来るような問題なのか？

そう永琳は思った。

そして

「優雲華、彼女を見てて」

「は、はい」

それを聞くと永琳は隣部屋のレミリアの元へ向かった。

……すると、永琳がこっちに向かってきた。

何があったのだろうか

「レミリア、貴方のメイドの事何か知ってる？」

知ってるなら話して、と付け加える。

「いや、私は……知らない……」

正直、何も知らない……。

「貴方、本当に知らないの？」

「……、どづいづことだ？」

「貴方は

……貴方は百年もあのメイドと一緒にいたくせに何も知らないのね」

「なっ……」

どういう意味で言ってるんだ？

咲夜が一番知ってるのは私の筈だ。

「彼女……咲夜は……」

永琳が静かに話す

「自分の体内時計、そして体の成長を止めていた」

……薄々、感じていた。

「だが、それは彼女の能力で出来た術。

その能力を使うことによって体のエネルギーを消費する」

永琳の言ってる意味に気付いた。

ただ、恐ろしくて言えない。

「彼女の成長をや体の時計を止めてる訳だから、能力を使うエネルギーが精製されることはない。

だから彼女は少しの間だけ時間を動かしエネルギーを貯めた。」

永琳は真剣な眼差しでレミリアを見つめる。

「当然、そうする事で”蓬萊の薬モドキ”が完成する

ただ、それには欠点がある。

エネルギーの消費、そして時間の能力の衰退」

「エネルギーの消費は言ったわよね」

「……衰退ってどついついことだ？」

「今から話すわ」

「衰退ってのは文字どおり能力や身体の衰退を表すわ」

「一見、半永久的な寿命を手に入れた咲夜には衰退なんて関係無いように思える」

「が、それは違った」

咲夜の体は止まっても完全には止まっていなかった

その止まっていない部分が体の促進、そして衰退を司る細胞だった
……、と考えられるわ

結果、彼女は軽い貧血、や目眩が起こるでしょうね

だけど、それは30年前から始まった事

……分かる？この意味」

「100年も生きれば本来の寿命を越える。

寿命が越えた体は衰退を乗り越して……」

「そうよ、体が衰退を乗り越せばなんとか”死”を近づかせるため
にある事が始まる」

「能力の低下……いや、消滅」

「そう、30年も体が危険信号を発してるんだから能力にも影響が
生じる。」

彼女、あんまり時間を操らなかつたんじゃない？」

……いや

いや……咲夜は普通に……

「咲夜は普通に使っていた……」

「……」

驚きで永琳は言葉を無くした。

「よく、耐えたわね……」

また永琳が静かに話す。

「いい？レミリア

危険なのに能力を使うのよ、それこそ自分で首を絞めるようなもの

能力を使いすぎたら身体や精神の崩壊のリスクが高くなる

よって必然的に死が訪れるわ」

「……そんな」

レミリアは涙を浮かべていた

主が気付かなかった責任を感じてるのだろうか

永琳はレミリアの答を待つ

「永琳」

顔をあげる

「咲夜は助かるのか……？」

すると永琳はクルリとレミリアに背を向けた。

「無理」……」

紅き月と壊れた懐中時計 第四章

「少なくとも、今は」

そう言ってまたレミリアの方に向く

「来なさい」

咲夜の居る部屋へ案内する。

レミリアはただ無言のまま永琳の後ろを付いていく。

隣部屋までの一步一步が重たかった。

自分でも分からない。

ただ、部屋を開けたときに私の咲夜じゃなかったら……、そんなことを思ってしまった。

「開けるわよ、優雲華」

永琳の声でハッとする。

受け止めなきや

全てを

「彼女は眠ってるわ」

いつ覚ますか分からないけど、と後味の悪い言葉を残す。

「咲夜っ！」

ただ、私は咲夜の傍で泣くことしか出来なかった。

何で泣くの？

それすらも分からない

悲しいから？

……私らしくない。

だけど、私は今咲夜の傍にいたかった。

それは私の本当の想い。

何時までそこに居ただろうか。

覚えていない。

気付けば、永琳と鈴仙はいなくなっていて

気付けば、朝を迎えていた。

そう、何時の間にか私は寝ていた。

丁寧にも誰かが私の為に毛布を掛けてくれたようだ。

気付いたらこの部屋には私一人しかいなかった。

………私一人？

咲夜の布団がきれいに畳んである。

この毛布は咲夜の布団の一部だということに気付く。

驚く、そして困惑。

気付いたら、私は部屋を飛び出した。

永遠亭の廊下を走る。

「咲夜、咲夜、咲夜っ！」

「どうしました、お嬢様？」

いつもと変わらない、咲夜の落ち着いた声

私を安心させるには十分過ぎた。

「咲夜っ……！」

思わず咲夜を抱き締める。

咲夜は最初驚いた様子を見せたが、それを受け止めた。

「私は大丈夫ですよ……お嬢様」

永琳が居る部屋にレミリアと咲夜が入る。

「咲夜が起きたんだ！」

「知ってるわ、貴女が寝ちゃった後、彼女が目を覚ましたもの」

「昨日はありがとうございました…」

咲夜がお辞儀をする。

レミリアは寝てた事に頬を赤らめる。

「……で、これからどうするの？」

永琳が二人を見つめる。

「咲夜と一緒に紅魔館に帰るわ」

そう永琳に告げる。

永琳はその答を予測してたかのような顔をする。

「駄目よ」

「なっ、何で駄目なのよ」

永琳に抗議する。

その永琳がため息をする。

「少しは考えなさい、レミリア

病み上がりの人をすぐ帰すわけには行かないの。……でも、まあ、少し経てば帰らせるから」

「お嬢様、早く帰れるようにしますので……」

仕方ない

「……分かった、無理しないでね咲夜」

仕方ない、少し経てば咲夜に会えるんだ。

「帰ったか……」

永琳が言葉を漏らす

「貴女……、本当に異常が無いのかしら？」

「はい……」

昨日

目を覚ます

そして辺りを見回す

畳、障子、布団。

紅魔館の洋風な部屋ではなく、落ち着いた和風の部屋だった。

和風となると、白玉楼か永遠亭しか無い。

博麗の神社もふと思ったがその可能性は低い。

とりあえず起き上がる

「つて、お嬢様!？」

そこにはスースーと寝ているレミリア

お嬢様が死ぬ訳ないから……ここは永遠亭かな

しかし、何故永遠亭…？

ふと目を覚ます前の直前の記憶を呼び出す

「あ………」

そうか、私は倒れたのか。

心配させてしまって、お嬢様に申し訳ない…。

お嬢様に視線を写す

「お嬢様…、お体が冷えますよ………」

そう言って毛布をお嬢様にかける。

「永遠亭、ということはあるのかしら」

懐中時計を見る。

時刻は既に？を回っている。

深夜の廊下、紅魔館の静けさと少し違う静けさが辺りに漂う。

私は永琳の居る部屋を目指す

……が、その部屋が何処にあるか分からない

とりあえず適当な部屋に入ろうかな

トントン、とノックをする

はい、という声がした。

聞き覚えのある声、この声は

扉を開く

「あ
」

「こんな夜遅くに……って、えあ……」

部屋には鈴仙がいた。

「もうお目覚めになったんですね、大丈夫ですか？」

最初に口を開いたのは鈴仙だった

「ええ、大丈夫よ

ところで永琳に話したいことがあるんだけど」

案内してくれる？と鈴仙に頼む。

「師匠の所ですか？いいですよ。…行きましょつか」

廊下を歩く

久々に永遠亭に来た気がする。

「咲夜さんって、好かれてるんですね

レミリアさん」

羨ましそうに笑顔で話す

「そ、そうかな…？」

「あ、久々に堅くない咲夜さんですねっ」

「いつも堅くないわよっ、それに久々と言っても……」

そんな会話、和やかな空気が続く

「……着きました、ここが師匠の部屋です」

「案内、ありがとね」

「んじゃ、私は帰りますね」

流石に眠いので

そう言っつて欠伸をする

「悪かったわね、おやすみなさい」

「いえいえ、ではおやすみなさい」

鈴仙が帰るところを見送った後

私は永琳の部屋にノックをする。

「入っていいわよ」

扉越しに永琳の声が聞こえた

その声を確認し、扉を開ける。

「失礼します」

「夜遅くに……あら」

部屋は薬品の臭いで充満していた。

さっきいた和風の部屋とは違う雰囲気だ。

……懐かしいような気がする。

「具合は大丈夫なの？」

「はい、お陰様で」

「良かった、あなたの主人が血相変えて来たときはびっくりしたわ」

「そう…、ですか」

「まあいいわ」

あ、一つだけ約束してくれる？」

「なんででしょうか」

「一日でもいいから少しの間、この永遠亭にいなさい」

意表を突かれた

そもそも、何で？

「あの、何で…?」

「貴女、体内時計を止めてるでしょ?」

「……!」

お嬢様にも言っていないことを。

やはり、医者には見抜かれたか…。

「正直言つて、貴女には休息が必要なの」

「休息ですか…? 私はちゃんと休んでいますよ」

「違う、体のことじゃない。精神面の事で言ってるの」

黙って私は話を聞く

「今、貴女の体は危険な状態だわ

至るところに死が満ちている」

死という単語に反応してしまう

「また、詳しく診ないと貴女がいつまで生きられるのかわからない
何時に死ぬと分かればやり残した事も出来るでしょ？」

「……はい」

永琳の言ってることはもっともだった。

自分自身、いつ死ぬのかわからなくて怖かった。

「……残ってくれる？」

永琳が確認する。

「分かりました、…残ります」

「そつえば……貴女とは昔何処かで会わなかったかしら？」

不意に永琳が思い付いたように話す

「永琳さんと対峙した時と言ってましたが……、私は会ったことが無いと思うのですが」

そう、お嬢様と月を取り戻す時に言われた

「いや……、幻想郷の”外”でなにか思い当たることは無い？」

幻想郷の外の世界

つまり、私がいた世界

しかし今の私にはその記憶がキレイに消えていた。

「すみません、無いです」

「そう……」

少し残念そうに呟く

「んじゃ、診るからこっちに来て」

「…分かりました」

「咲夜……」

竹林を空を飛びながら突き進む

少しの間だが、咲夜のいない生活が始まる

そう考えるだけで胸が苦しくなる

「少し経てば咲夜は帰ってくる」

そう自分に言い聞かせる

夜の竹林。

昨日は必死で気付かなかったが、初めて咲夜と異変解決に向かった
時に通った道

懐かしいな。

竹林で迷いそうになったんだっけ

長かった竹林を抜ける

目の前には人里がある

妖怪が活発になる夜の為か外には人の気配が無い

いや、一人いた。

飛ぶのを止めて歩き出す

「……………」
上白沢慧音

「どうだった？」

慧音が落ち着いた声で尋ねた

「今はなんとも言えない

ただ、本人は大丈夫と言ってる」

「そうか、なら良かったな」

慧音が安堵し微笑む

「……一緒じゃないのか？」

「ああ、永琳が少しこっちで安静させてあげて、っ言われた
だから咲夜は永琳の所にいるわ」

「そうか」

「そろそろ通らせてくれない？」

「あ、…すまない」

「しないと思うが、里の人間を襲うなよ？」

「襲うわけないじゃない」

そう言っつて里を越えて紅魔館を目指す。

途中、夜雀が屋台をやっつてる所を見かけた。

だが、夜雀と馴れ合うのもなんだか嫌だから通りすぎた。

(静かな夜ね…)

湖が見えてきた。

紅魔館はもうすぐだ。

私は速度を上げた。

紅魔館の門の前に降り立つ。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

門番の妖精がお辞儀する

普段なら一瞥するだけだ

だが

「ただいま」

なぜか言ってしまった。

……、寂しいのかな。

主人の様子に妖精が少し驚いた顔を見せたが、すぐ仕事に戻った。

門が開く

紅魔館は静かだった。

…… あ、そうか無断で抜け出したんだった。

心配してるだろうしパチエの所に行かないとね。

そう思い図書館に向かう。

静かな廊下

普段なら落ち着くだろう

…今の私には寂しさを感じた。

(少しの間よ、少しの間)

自分に言い聞かせる

あ……、図書館の扉が見えてきた。

書斎の扉をノックする

するとパチユリーの声が聞こえた。

「入るわよ、パチエ」

「あら、レミィ」

相変わらずパチエは本を読んでいた

「昨日から咲夜といなかったけどどうしたの？」

「その……」

やはり言わないと

「咲夜が倒れたんだ」

パチュリーの眉がピクツと動く

「本当…？」

「ああ、だから昨日永遠亭に行ってたんだ」

「咲夜は…、見ないけどどうだったの？」

「あつちで少しの間、安静にさせたわ」

パチュリーに昨日からの事を話した。

「レミイがいいならそれでいいんじゃない？」

話を聞いたパチュリーが最後に言った。

あれから私は自分の寝室に入った。

部屋に向かう途中も何故か力が入らなかった。

「……疲れてるのかしら」

ベッドに倒れる。

はあ……、と溜め息をつく

胸にポツカリとあいた穴

ふとレミリアは気付く

私は咲夜の事が

……そう、表現するならば、この表現が一番合ってる

私は咲夜の事が好きなのだろう

昔から

そして

未来永劫……。

「はあ
「……」

一回目の溜め息。

好きという気持ち

それが、今の状況において追い討ちをかける。

「咲夜……」

試しに呼んでみた

が、帰ってくる筈もなく。

いつしか私は眠ってしまった。

…深い眠りに誘われて

鈴仙が震える声で話す

「仕方ないわ……、でも彼女に言わなきゃならない……」

「しかし」

涙声。

だが鈴仙の言おうとしたことは永琳も理解出来た。

冷えた医務室に薬品の匂いが漂う

身を翻し、部屋を出ようとする永琳

「師匠っ、言っんですか……?」

永琳は振り返らない

「だってそれが……医者であって

彼女を見ていた者だから」

なら、なおさらよ

そう言つて永琳は部屋を出た

鈴仙は永琳が出た部屋の扉を見つめ続けていた。

咲夜が待っている部屋に向かう

……鈴仙は付いてこなかった。

はぁ……と溜め息。

そして深呼吸。

長い廊下を歩く。

部屋はもうすぐだ

昔は楽しかったのに……、と今思う。

姫様と満月を隠した後、私たちは幻想郷に迎えられた

皆、楽しかった。

逃げる日々が終わったと実感した。

しかし”時”はやってくる

百年はこうも人を、妖怪を

「変えちゃうなんてね……」

咲夜の居る部屋の前で止まる。

深呼吸。

扉を開ける。

「咲夜……、つてあれ」

壁に寄りかかってスースーと寝ている咲夜

「仕方ないか」

もう夜が終わりかけているのだから……。

「体冷えるわよ……」

部屋に畳んである毛布を咲夜にかける。

そして、おやすみと言って永琳は部屋を出た。

廊下には涙目の鈴仙がいた。

「どづ…でした？」

「寝てたわ」

「そづ…ですか」

「今日は遅いわ、寝ましよう」

「はい…」

二人は自分の部屋に向かった。

鈴仙は永琳の後ろをついていき

永琳はなにかに堪えながら。

「おやすみなさい、優雲華」

「おやすみなさい、師匠…」

今日は何をしようか

「図書館に行くか…」

ベッドから出て服を着替える。

咲夜がいないと寂しい。

「レミイがいいならそれでいいんじゃない？」

この言葉が繰り返される。

廊下を歩き、図書館をノックし入る。

パチュリーは本がたくさん積んである机で本を読んでいる

「あら……レミイじゃない」

「おはよう、パチエ」

「おはよう……って、もう昼過ぎよっ」

「あれ、もう昼過ぎなのか」

ふと時計に目をやる

時計が？と？の間を示している。

結構寝ていたのか

「なあ、パチエ」

「なによ、改まっちゃって」

「私は……」

「好きにやってみたらいいじゃない」

「……え？」

「お見通しよ、貴女が咲夜を連れて帰るなんて」

凶星

やはりパチエは凄いな

「その顔は……、やっぱり行く気だったんでしょ？」

「ああ……」

「気を付けてね、何時出発するの？」

そんな事言われても考えて無かったわけで

でも、早く咲夜に会いたい

だから咄嗟に

「今日の夜」

と、言った

「彼女……、咲夜をやく連れて帰りなさいよ」

「ああ、分かってるわ」

「……話はそれだけ？」

「うん」

「そう……」

「……」

諭すような落ち着いた声

「なに？」

「……やっぱりいいわ」

「……？」

……仕方無い

今から咲夜に言わないと

これ以上、躊躇してる訳にはいかない。

ふと外を覗く

夕日が綺麗だった。

沈みかけの夕日が空をオレンジ色に染める。

扉を開ける。

咲夜は起きていた。

「どう調子は？」

「大丈夫です」

「そう……」

沈黙

最初に口を開いたのは咲夜だった

「私は……いつまで生きられるのでしょうか……？」

いきなりの本題。

「咲夜、落ち着いて聞いてね……」

「もう一度診断した所…」

「はい…」

「貴女の命は…」

声が震えてしまう

咲夜は真剣な眼差しで私を見ている。

「咲夜、貴女の命は……あと一週間よ」

一瞬、時間が止まったように感じた。

「一週間……ですか」

布団から体を起こしてる咲夜が目を閉じる

それは少しの時間だったが咲夜にとって長かった

私は咲夜の言葉を待つしか無かった

「良かった、一週間も生きられるのね」

「……え？」

なんでこんなに彼女は…。

「永琳、ありがとう」

彼女が微笑む

気付いたら私は彼女を抱き締めていた

「……どうしました？」

「……っ」

自分でも何で泣いてるか分からない

もしかしたら……。

彼女の前向きな心が

「……しめんなれよ」

そっと離れる

「ねえ、聞きたいことがあるんだけど」

空を仰ぐ

太陽が沈み、夕焼けが広がる。

夜まで待つつもりは無い。

光によって痛む体に鞭を打ち、翼を広げる。

「咲夜……今いくから」

そう言ってレミリアは飛び立ち彼方に消えた。

体内時計の枷を外すだけでもこんなに力が溢れ出すとは

永琳は驚く。

咲夜の能力は蓬莱の薬と対なす力に成りうるだろう

咲夜の空間が収束していく。

「……………大丈夫？」

さっきと同じ言葉をかける

「……………、大丈夫です

少し疲れた……………」

そう言って咲夜は倒れた

大丈夫、心臓は動いている。

「師匠！」

ふいに、鈴仙が部屋に飛び出してきた

「侵入者です！」

「侵入者って、誰？」

「顔は見てませんが…」

駄目じゃない…。

「とりあえず、姫を」

「はい」

と、廊下に出た時だった。

「咲夜を返してもらいに来たわ」

そこには紅魔館の主、レミリア・スカーレットが立っていた。

「侵入者ってのは貴女かしら？」

フツツと笑うレミリア

「私は堂々と玄関から入ったんだけど」

「優雲華」

「は、はいっ」

「紛らわしい事はしないで頂戴」

「はい……」

レミリアが寝ている咲夜に近づく

「咲夜は…、何時までもつんだ？」

私たちに背を向けながらレミリアが尋ねた

「……一週間よ」

沈黙、そこには微かな緊張があった

「そっか…」

「咲夜は連れて帰る、いいわね？」

「…いいわ」

レミリアはその後咲夜を背負った。

背丈が伸びたせいか、咲夜と変わらない

「世話になったわ、ありがとう

……永琳」

」「……どういたしまして」

そう言ってレミリアと咲夜は永遠亭を出た。

……永琳と鈴仙は竹林の中に消えてゆく背中を見届けた。

「あ……咲夜、起きたのね」

「あの、お嬢様……、は、恥ずかしいので下ろしてくれませんか？」

第一声がこれか……

もう少し咲夜をおんぶしたかったわ

「……分かったわ」

ゆっくりと咲夜をおろす

「……、大丈夫？」

「……大丈夫です」

といいながらも咲夜の足がおぼつかない。

「仕方ないわね」

そう言って肩をかす

「……あ」

咲夜が頬を赤らめる。

「すみません…お嬢様…」

レミリアが咲夜に肩をかしながら薄暗い竹林を歩いていく

「ねえ、咲夜」

足が止まる

「なんででしょうか？」

「……星が綺麗ね」

夜空を見上げる

幾千もの星が輝いている。

「……綺麗、ですね」

見とれてしまったのか咲夜は星空を見上げている

私ももう一度見上げる

……それはとても幻想的で

「さ、行くわよ」

夜が明ける前に着かなきゃ」

「そうですね」

「
…お嬢様」

しばらく歩くと咲夜が口を開く

「どづしたの？」

「あの…私、実は…」

分かってるよ、咲夜の言いたいこと

「…言わなくていいわ」

「しかし、私は…」

「いいの、…知ってるから」

一週間までの命、そんなコト咲夜の口から聞きたくない

私は今ある”時”を大切にしたい

せめて最後まで私も咲夜も悲しい思いはさせたくないから

だから、この一週間にしたい……。

「そうですねか……」

「ねえ咲夜」

「なんででしょうか……？」

「帰ったら……何したい？」

「私は……お嬢様の傍にずっと居たいです」

そう言って、クスッと笑う咲夜

「咲夜……」

私とずっと居たい

それを何度も心の中で復唱する。

「私も咲夜と一緒に居たいわ」

私もクスツと笑う

満天の星空の下

二人は楽しそうに道を歩く

一週間の命である人間

そして、半永久に生き続ける吸血鬼

二人にとってこれからの一週間はとても長くて

とても億くて……

紅魔館に帰ってきた。

綺麗だった星空も、今や太陽が昇り始めようとしている。

「ふー、やっと帰ってきたわね」

「そうですね」

門番の妖精が壁にもたれて寝ている。

仕方ない自分で開けるか

そう思い紅魔館の扉を開ける。

紅魔館の中は静かだった

それもその筈、普通は寝てる時間だからだ

「お嬢様、……お休みになりませんか？」

「そうね、そうしましょ」

廊下を二人並んで歩く

扉を開いて部屋に入る

「お嬢様」

「なに？」

「私の部屋で寝るんですか？」

「駄目？」

「いや、逆に嬉しいです……」

服を着替える。

竹林を歩いたせいか泥がついている。

「咲夜、……って着替えるの早いわね」

「……寝巻きですからね」

と笑顔を見せる。

私もつられてしまう。

「お嬢様、ボタン付けましようか？」

「こ、これくらい出来るわ」

焦ってボタンをかけ間違える

「付けましようか…？」

「……咲夜、お願い」

咲夜がボタンを付ける

「……丁寧に。」

「さ、終わりましたよ」

「ありがとう、咲夜」

二人はベッドに入る

咲夜がいるから温かい

だが、やはり睡魔には勝てない

針はもう？を過ぎようとしてたから

二人はスヤスヤと深い眠りに落ちた。

安らかな笑みを浮かべて……。

久々に夢を見た。

咲夜と私がずっと過ごす夢を

楽しい生活が永遠と続く。

目を覚ましたら私は泣いていたことに気付いた。

そっと目を擦る。……やっぱり泣いていた。

静かに寝返りをうつと、隣には咲夜がいなかった。

一瞬戸惑ったが、ベッドから起き上がると咲夜が紅茶を淹れていた。

「おはよう、早いね咲夜」

「あ、お嬢様おはようございます

紅茶を淹れておきましたわ」

無理しなくていいのにと思ったがそれは言わなかった。

「ありがとう、咲夜」

ベッドから出て椅子に座る。

向かいには咲夜が座っている。

テーブルには咲夜が入れたばかりの温かい紅茶。

針は昼を過ぎた？を示していた。

残り六日

「やっぱり咲夜の紅茶は美味しいわね」

「ありがとうございます」

二人とも笑みをこぼす。

その時間はゆっくりと流れていく

「ねえ咲夜

何処か行きたい所とかある？」

「行きたい所ですか…？」

うーん、と悩む咲夜

「花見…なんてどうでしょうか？」

「花見か…：…そういうば今年は行ってないわね

白玉楼に夜桜なんてのもいいわね」

「何か料理でも作っていきましようか？」

「うん、私も手伝おうかしら？」

「お願いします」

夕方になるまで私は咲夜の料理と支度を手伝った。

……「こつこつことは馴れてない為か、足を引っ張る形になってしま

った。

「つ、次は出来るわ」

「頑張つて下さいお嬢様」

料理も結局、咲夜が一人でやることになった。

……情けないわね、私。

そんなこんなで時は過ぎていく

私には決めていたことがあった。

咲夜と二人だけで行く

……フランやパチエ、美鈴を連れていくと五月蠅くなるし

亡霊の姫と庭師が敵だと思われるしね

それに私自身、咲夜と二人だけが良いから

「お嬢様、支度出来ましたよ」

時計の針は？を指している。

私が足を引つ張ったせいで時間がかかってしまった。

「んじゃ、行くわよ咲夜！」

「もう少しよ、咲夜」

「はい」

近づくにつれ桜の花びらも多くなってくる

「……着きましたね、お嬢様」

「綺麗ね……」

「はい……」

私達はその美しい桜の木に見惚れていた。

見渡す限りの桜の木

桜吹雪がとても綺麗で美しくて…。

「さ、奥に行ってみましょうか」

と、咲夜の声でハッと気付く

「そうね、行きましょ」

そう言って歩き出す。

「……………あ」

「どっちなさいました？」

「咲夜」

「……はい？」

「その……手、繋いで」

その言葉に咲夜は一瞬時が止まったように感じた

そしてにっこりと微笑む。

「はい、喜んで」

咲夜が先に手を差し出す。

それを私がそつと握る。

二人は少し頬を赤らめながらも桜が舞う道を歩いていく

満開にならない西行妖は百年経っても未だ満開にはならない
つまり、亡霊の姫がまだいるわけで。

「あら、珍しい」

その姫が屋敷から顔を覗かせる

「たまにはいいかなってね」

「ふーん、まあいいわ」

そう言って幽々子は帰っていった。

夕食でも食べにいったのだろうか。

「さ、咲夜。ねえ、あそこで食べない？」

「いいですね、行きましょつか」

私が指さしたのはある桜の木の下

料理を食べながら桜を見るにはもってこいだ。

咲夜の手を引つ張りながら走る

「あ、お待ちくださいっ」

「咲夜、遅いわよっ！」

距離はあまり無かったため、息切れすることは無かった。

「はい、お嬢様」

咲夜が持つてるランチボックスの中に入っているサンドイッチを手渡す。

「ありがとう」

桜の木に寄りかかる形で座る。

咲夜もサンドイッチを手に取り座る。

「さ、食べましょうか」

「「いただきます」」

……静かに二人の夜桜の宴は始まる

妖夢が障子を開いて外を見る

「……あ、紅魔館の人達ですね」

「そうだ妖夢、ワインあったかしら？」

「幽々子様がワイン……ですか？」

「違うわ、あの人達に贈ってあげるのよ」

「……はあ」

内心、そこまで必要なかと思ったけど

……そこは訊かないでおいた

「……いただきますー」

……なんて幸せなんだろうか

「お嬢様、……あれ」

「あら、あれは……」

咲夜が向いた方向を見る

そこには銀髪で刀を腰に提げている少女がいた。

少女、妖夢は両手でワインを持ちながらやって来た

「お久しぶりです

あの、幽々子様がこれを……」

ワインを咲夜に渡す

「あ、ありがとう」

戸惑いながらも咲夜は返事をする。

ワインは赤ワインだった

「あの、私はこれにて失礼します」

そう言って妖夢はすたすたと帰っていった

「お嬢様、これ……どうしましょ？」

「折角だし飲みましょ」

「そうですね」

グラスにワインを注ぐ

「乾杯」

桜を見ながらワインを口に注ぐ

ああ、やっぱり綺麗だ

いや、綺麗というより美しいという表現があってるのかな

これが、咲夜と最後の花見という事に後悔した

また…、また咲夜と行きたいのにね……。

ああ、駄目だな私

こんなに永く生きているのに

咲夜の事を考えると涙が出てくる……。

「咲夜……」

そうか、そうだった

私が泣いてどうする

私が明るくならないと

「ねえ咲夜」

「なんでしょうか」

「ちょっと……散歩してみない？」

「はい、でも遠くまでは行かないで下さいね」

「分かったわ」

立ち上がる

私は咲夜の手を握ったまま、夜の暗がりの中歩き始めた
桜が黒を白に染める。

「ねえ、咲夜

貴女と初めて会った時の事を覚えてる？」

「はい」

「初めは面白い人間だなんて思ってた」

「面白い人間ですか」

咲夜がクスツと笑う

「貴女が”十六夜咲夜”になって、紅魔館のメイド長になって…

私は……」

咲夜に顔を向く

「咲夜がいることで安心出来た」

「私もですよ、お嬢様」

一時の沈黙

決心を決めたように私は口を開く

「私は咲夜の事が……」

ああ、言おうと思ったけど駄目だ

やっぱり、恥ずかしくて言えない……。

「さ、咲夜！」

「は、はい？」

「そろそろ帰るわよ！」

「え、あ、あれ？」

「日付も変わるわ、さっ帰りましょー！」

「わ、分かりました、帰りましょつか」

苦笑いの咲夜

顔が真っ赤な私

言えるわけないじゃない

”好き”だなんて

だけど、言わなかったことにすこし後悔した。

.....

「咲夜……？」

それは図書館に向かう時だった

廊下で咲夜と歩きながら話していた。

不意に咲夜は倒れた。

唐突の出来事に頭が真っ白になる

咲夜を抱え、図書館へ向かう

ノックなんてしてられない

「パチエ！！咲夜が…」

「一体何の…、…！！」

読んでいた本を置く

「私の書斎にベッドがあるわ

使いなさい」

「分かった」

パチユリーと小悪魔が協力してベッドに咲夜を寝かせる。

咲夜の手を握る

少し、冷たい気が……した。

「咲夜……、咲夜……」

名前を何度も復唱する

「レミィ、大丈夫よ

今は寝てるわ」

落ち着いた声でパチュリーが話す

どこか寂しげで、余計に私を不安にさせる

「それに」

「
まだ2日あるわ」

これだけは言いたくなかったけど、と呟く

「もう、2日しか無いわ……」

そう……私は呟いた。

「咲夜さん…！」

美鈴が勢いよく書斎に入ってきた

「あ、あの倒れたと聞いて」

ここにきた理由を話す

「ねえ、美鈴」

「な、なんででしょうか？」

「二人にしてあげましょ」

美鈴が咲夜とレミリアを一瞥する

「……………そうですね」

そう言って二人は部屋から出ていった。

「咲夜…」

頬を撫でる

…綺麗な白い肌。

白い、雪のようで…。

咲夜の心音に耳を澄ませる。

…微かに聞こえる、休むことなく動き続ける心臓

時は過ぎていく…。

チツ……チツ……チツ……チツ……

銀の懐中時計の音が部屋に響き渡る

小さい音だけど、確かに聞こえる音。

咲夜の手をぎゅっと握る。

少し……冷たかった。

「もう咲夜が起きるまで寝ないんだから……」

咲夜の顔を見る

安らかな顔だ。

少し、微笑んでるように見えた。

「咲夜……」

だから、私はそれを”夢”だと分かった。

だけど

少しは…

少しは、この夢を見ていていいよな……？

だがその時、私の手が暖かい手に握られた感じがした

誰かが言った。

永遠では無いから

だから

人は生きていくのだと

最後まで人間で在り続ける事が……

永遠の二人を一瞥する

私は、……やはり夢なんて見ていられない

永遠は偶像にしか過ぎない

あれから何時間経っただろうか

いや、もしかしたら数分なのかもしれない

そんなのはどうでもいい

咲夜の手をもつ一度握る

そしたら握り返してきた。

え……？

「さ、咲夜？」

「お嬢様……」

以前、咲夜の臉は閉じたままだが、咲夜は確かに言った

「良かった……咲夜……」

思った事を思わず口にしてしまった

「お嬢様……」

咲夜が静かに瞼を開ける

いつもと変わらない咲夜がそこにいた

咲夜が起き上がるようにする、が

「……ッ」

「無理しないで、咲夜」

「……はい」

私は咲夜のベッドに座る

「お嬢様、まさか、ずっと傍に…?」

「そのまさかよ」

「ありがとうございます」

「…当たり前じゃない、咲夜の傍に居たかったしね」

「そうだ、パチエに咲夜が起きたって言うてくるわ」

「ついでに茶菓子持ってくるわね」

そう言っって私は部屋を出た。

咲夜の部屋に戻るまでの時間が、辛くて

一秒たりとも無駄には出来なかった。

茶菓子と紅茶をトレイに乗せ、部屋に戻る

咲夜は体だけ起き上がっていた

「ありがとうございます、お嬢様」

「体は大丈夫なの？」

「少し痛みますが……心配には及びません」

「そう……」

テーブルにトレイを置く

「咲夜、飲む？」

「はい」

トレイから2つ、紅茶を淹れたカップを持ち、片方を咲夜に渡す

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

淹れて間もない温かい紅茶を口にする

「……熱いわね」

「……そうですね」

フーツ、フーツ、と紅茶を冷ます咲夜

それを見て、私も咲夜の真似をする

「……フフ」

その光景を見て、笑みが溢れる

咲夜は途中から皆の話を聞いて笑っていた

終始私はそれを見て安堵した

「咲夜さん…大丈夫ですか？」

「少し、疲れたかな」

「んじゃあ、夜も遅いし寝た方がいいわ」

美鈴がパチエの提案にそうした方がいいですねと話す

あれ、引っ掛かったことがある

夜遅い……だと？

記憶を辿る

残り二日の夜に咲夜が倒れた

あれから1日経ったのか…。

そして、数時間後には……

おやすみ、という二人の声が聞こえる

……私は……

「お嬢様……？」

私は……！

「……咲夜」

「お嬢様、おやすみなさい」

咲夜の優しい声

「……おやすみ、咲夜」

私は本当にどうしようもないのかもしれない

私は咲夜のいた部屋から出ていった。

「貴女、それでいいの？」

「……パチエ」

部屋から出ようとしたとき、目の前にパチュリーがいた

……やりとりを聞いていたのだろう

「言いたくないけど、残り1日なのよ……？」

「ああ、分かってるわ」

「だったら……！」

「分かってる……分かってるわ」

「パチエ、運命ってなんなんだろうね」

「……運命？」

レミリアの背を見るパチユリー

私は図書館の窓から見える星を見ていた

「これも運命なら、私は変えたい」

私は話を続けた

「意図的に、しかも大きな事象を変えられない私が憎いわ」

「レミリア……」

「やっぱり……部屋に戻るわ」

その時、私は知らず知らずに笑った気がした

「パチュリー、皆を頼む」

「……分かったわ」

扉をガチャリと開ける

「あ、お嬢様」

「あれ、起きてたの？」

咲夜は起きていた

手には懐中時計

「なかなか寝付けなくて……」

「そう……」

「もうすぐ、ですね……」

咲夜が突然呟く

「……」

「お嬢様」

「……ん？」

「私は……後悔していません」

「……うん」

「だから、自分も死のうなんて考えないで下さいね」

「し、死なないわよ！」

「……良かった」

……凶星だった

「……何で分かったの？」

「やっぱり死ぬつもりだったんですね」

「……」

「約束です、はい」

そう言って咲夜は小指を差し出す

私も小指を差し出して約束をする

「何で分かったの？」

「百年もお嬢様の傍にいます、簡単なことですよ」

そつだ、咲夜と私はいつも傍にいたんだ……

そんなことを考えたら泣きたくなつた

「ねえ、咲夜」

「なんでしょうか？」

「楽しかったわ」

「私もです、お嬢様」

優しい笑顔

思えば、いつも咲夜は私の前では笑顔だった

そこに、どんな事があるうが

咲夜はいつも笑顔で私の傍にいてくれた

「ねえ、咲夜」

「なんでしょっ?」

私は天井を見上げる

今、咲夜を見たら

私、どうかしちゃうかもしれないから

「私は……………泣き虫だわ」

「お嬢様……………」

「私は……………何も気付いていなかったのかもしれない」

「下らないプライドに縛られて、孤独が嫌だから咲夜の傍にいて

「ただど……、孤独が嫌だから咲夜の傍にいたんじゃない」

何故だか涙が溢れてきた

「お嬢様……」

泣いたなら咲夜の方に向いたって同じだわ

「だって、私は」

咲夜の方に体を向ける。

咲夜と目が合う

「咲夜の事が好きだから」

「私もお嬢様の事が大好きです」

「…………えっ」

驚いて声をあげてしまった

まずい、頭が真っ白になりそう…………。

「…本当?」

「本当です」

「咲夜っ！」

ベッドにいる咲夜を抱き締める

強く、優しく、咲夜を抱き締めた

……咲夜はとっても温かった

「咲夜……」

「なんでしょうっか……？」

抱き締めたまま、私は涙声で話す

「もう少し、早く言っていたら……」

「気に、しないで下さい」

ベッドに入る二人

涙は収まったみたいだ

「咲夜、手、繋いでいい？」

コクリと頷く咲夜

そっと手を繋ぐ

咲夜の手は温かった

さっきの倒れていた時の咲夜とは別人みたい

「お嬢様の手、暖かい……」

「ありがとう」

「お嬢様」

「どろしたの？」

咲夜が俯く

「私……もう少しでいいから生きてかったなあ……」

咲夜の手が私の手をぎゅっと握る

「……咲夜」

私は咲夜を見ていることしか出来なかった

そつだ、方法がある

私の吸血鬼の血を飲めば咲夜は生きることが出来る

何故今まで気が付かなかったんだ

「ねえ咲夜、私の血を飲めば……」

泣きそうな咲夜がこっちを向いた

「お嬢様……、お気持ちだけ受けとりますね」

咲夜が続ける

「私は……、最後まで人間で在りたいんです

私は生きたい……、でも叶わない我が儘だつて事は分かる」

そして咲夜は笑顔で主人にこう言った

「もう私は時間がないのかも知れません……」

咲夜の懐中時計を見る

既に時計は??を過ぎていた、つまり最後の日だ。

「……いいわ、咲夜の行きたいところについてくわ

「ありがとうございます」

「…立てる？」

手を差し出す

「……………なんとか」

咲夜の足はフラフラで

体はもう衰弱している

「これで大丈夫かしら」

肩を貸すレミリア

部屋から出たらパチユリーがいた

「どうしたの、二人とも……?」

「その、咲夜が……」

「最後に生きたい場所があるんです」

ハッキリと話す

その言葉には威厳があった

「……咲夜」

「はい」

「もしかしたら……、これが最後かもしれない」

「パチエ……!」

「レミィ……分かってるわ私だって望みたくない」

「咲夜、最後かもしれないから言うっておくわ」

魔女は静かな声で話す

その声は少し震えていた

「今までありがとう」

……楽しかったわ」

「どづいたしまして」

咲夜が静かにお辞儀をする

「それと

こ、紅茶……美味しかったわ……」

震える声で魔女は滅多に見せない涙を見せた。

「さ、行きなさい……」

時間は少ないわ……、そついでしょっつ……」

「……はい」

「パチユリー様」

「……何？」

「今までありがとうございました」

その後、司書さんにも咲夜は”お別れ”を告げた

やり取りを聞いていると、もう少しで……、と気付いた

もう会うことが無いから

会うことが無いから咲夜は……

一人一人の顔を記憶に焼き付ける

そう、最後の最期まで……。

「今までありがとう、司書さん」

「そんな、咲夜さん……」

”ありがとう”は私の方です

咲夜さん……今までありがとうございました「

司書も涙声で、いや、既に涙を目に溜めながら震える声で話す

その光景を見てみると、私もつられて泣きそうになった

「ありがとう」

そう言って、司書と別れる

図書館の扉の前で立ち止まり、後ろを振り向く

大量の本がある紅魔館、いや幻想卿一を誇る図書館

図書館を出て廊下を歩く

一歩一歩、歩く度に紅魔館の思い出が甦る

「あーっ！お姉様と咲夜！」

「……フラン」

「……？ どうしたのお姉様、元気ないよ？」

「あのね、フラン……」

「妹様」

咲夜が遮る

「少しの間旅に出ようと思います」

「……そうなの？」

「はい」

「とてもそうには見えないけど……？」

咲夜はレミリアの肩を借りて立っている状態だ

誰だって旅に行くとは思わない

「……まあいいわ、気を付けてね」

「……はい」

「あの、妹様」

「ん？」

「今までありがとうございました」

妹様とあまり遊べなくてごめんなさいね……」

「いいのよ、”ありがとう”って言うのは私の方だしね」

「……え？」

「ありがとう、”咲夜”」

にい、と笑うフラン

咲夜もそれに応え、お辞儀した

「じゃあねー、咲夜ー」

そう言って手を振る

「さ、行きましょつかお嬢様」

「…そっね」

廊下を歩き出す

「…………嘘つき」

二人を見送り、フランはそう呟いた

自分の部屋に向かい、廊下を歩く

「咲夜の……ばか……」

そう言って、一人廊下で泣き崩れた

そして”皆”との思い出が

忘れないように目に焼き付ける

「咲夜さん！」

「……美鈴？」

「妖精から聞きましたよ、私を忘れないで下さいっ！」

「ごめんなさいね」

「やっぱり……これが最後なんじゃないか……？」

「……ええ」

俯く美鈴

それを見て咲夜は美鈴の頭を撫でる

「さ、咲夜さん……？」

「美鈴」

「は、はいっ」

「メイド長は大変だけど……、頑張ってるね」

「……はいっ！」

涙脆いせいか、涙を流しながら美鈴らしく、元気に返事をした

「美鈴、今までありがとう」

「……っ、……はいっ！」

「風が気持ち良いですね……」

「……そうですね」

空を見上げる

十六夜の月だった

「お嬢様、行きましようか」

突如来る目眩

咲夜の時間が刻々と失っていくことが分かる

それでも私達は一歩ずつしっかりと歩き出した

私達の始まりの場所

私達の終わりの場所へ

「着いたよ、咲夜」

「はい」

湖の畔

咲夜が話始める

「ここから私は変わった

幸せでした、皆優しい人で」

「……咲夜」

「メイドになって、メイド長になって……色んな人達と会って

そして、お嬢様と会えて……」

咲夜が私の方に向く

肩を貸しているため、咲夜の表情が見えた

「お嬢様と会えて……、本当に良かった」

「私もよ咲夜

貴女に会えて幸せだった」

二人とも声が震えてることが分かる

「お嬢様……！」

「咲夜……」

抱き締める

咲夜の体は冷たかった

「……………」

今まで堪えてきた涙が溢れ出す

それは咲夜も同じだった

「嫌だ、咲夜がいなくなるなんて……！そんなの……そんなの……嫌
……！」

私の最後の我が儘

だけどそれは叶わない願い

「お嬢様」

「……」

抱き締めたまま、レミリアの耳元でいつもの優しい声で咲夜はこう
言った

「いつでも、私はお嬢様の傍にいます」

私がいなくなっても……、私はお嬢様の傍にいますよ」

「……咲夜？」

クスッと笑う咲夜

「……ここに私はいます」

そう言ってレミリアの心臓のあるところに手を置く

「……そうだ、お嬢様」

「……？」

「この懐中時計、お嬢様に差し上げます」

「……いいの？」

「はい」

咲夜がいつも持っていた懐中時計

咲夜との思い出が刻まれた懐中時計

それを……私にくれるというのだ

「はい、お嬢様」

「ありがとう、咲夜」

「いいえ」

懐中時計を私に手渡す

銀の懐中時計は今もなお時を刻んでいた

「……………」

「どうしたの咲夜……………」

「……………」

口に手を当てていた手を見る咲夜

手には血が付いていた

「さ、咲夜……！」

「お嬢様……、……」

「……」

ゆっくりと咲夜を草原に寝かせる。

「……ありがとうございます」

「……うん」

私は草原に座り、咲夜の方に体を向ける。

「お嬢様」

「咲夜？」

「最後に言っておきたい事あります」

涙が頬を伝う

「……なあに？」

私も震える声でそう伝える

「……お嬢様の下に居られて幸せでした

ありがとう……お嬢様」

そして私は

咲夜の顔に近づくと

そっと咲夜の血が付いた口を手で拭く

「お……嬢様………?」

咲夜に近づくと

「……」

「……」

刹那の時間、だがその時間が長く感じられた

「お嬢様……」

「ごめん、最後に……」

「謝らないで下さい……」

咲夜が目を閉じる

「ありがとうございます……トリア……お嬢様……」

でも、お嬢様を安心させないと……

「最後に言っておきたい事あります」

駄目だな私

こんな震えた声じゃ、お嬢様を安心させられない……

だけど、私の想いを言わなきゃ

「…………お嬢様の下に居られて幸せでした

ありがとう…………お嬢様」

涙を拭う

体が震えてきた

もう死がそこまで来てる

ふいに、お嬢様が私の口に付いた血を手で拭う

「お嬢様……？」

突然、私にキスをした

驚いたけど、嬉しかった

涙が止まらない

ごめんなさいお嬢様

私は最後に力を振り絞って、時間を止めた

私のこの力が続く限り、こうしていたいから…

それくらい……いいよね？

一分もてばいい、いや、数秒でもいいから

お嬢様の温もりを感じていたい

涙が止まらない

ああ……、力が抜けていく

「お嬢……様」

止まったお嬢様に語りかける

「大……好き……です」

そして、時間は動き出した……

咲夜は静かに、眠った

紅き月と壊れた懐中時計 Ending

咲夜の葬儀は静かに行われた

棺桶の中にいる咲夜は穏やかな表情だった

でも私は泣かなかった

咲夜は私の傍にいるから……。

あれから数カ月が経った

咲夜からもらった懐中時計は”あの日”以来時を刻むのをやめてしまった

そして私は日課にしていることがある

「あら、また来たの？」

「これが私の日課なんだ」

白玉楼に行くこと

桜並木を咲夜と手を繋いだあの頃を思い出しながら歩く

霊魂がさ迷う場所に来て私は手を合わせた

「おはよう、咲夜」

返事はない

「今日も見守っていてね」

一人、白玉楼の景色を眺める

すーっ、はーっ、と深呼吸する

今日も1日が始まる

咲夜は傍にいる

きっと今も私の傍にいる

「じゃあね、咲夜」

振り返って来た道を歩き始める

その時声がした

優しくくて、私を安心させるその声

「お嬢様！」

紅き月と壊れた懐中時計 Ending (後書き)

紫「長い」

「ごめんなさい(。(。(」

紫「そういや、今回の話で気に入ってるところとかある?」

全部!

「一番はやはり最終章の咲夜が”お別れ”するシーンですね

中でも妹様のシーンは気に入っています

勿論、レミリアと咲夜のシーンが一番大好きですねw

紫「正直、泣いた？」

ええ、泣きましたよ当然

作者が泣かずして誰が泣くんですかっ

書いてるときにBGM流すんですが

丁度、SYNC・ART・Sの猩々緋が流れるからもっ、ね？（；
；）

紫「そっいや、永琳が言った意味深なセリフがあったけどあれは
？」

何で咲夜は時間を止めたとしてもこんなに長く生きられる筈がない

そう永琳は考えていました

本来なら、咲夜が永遠亭についた時点で死ぬ運命でした

しかし、死ななかった

最後にレミリアは運命を変えられない私が憎い、と言っていました

実は変えていた。という

つまり、最後に見た月が十六夜なのも領けますよね

つまりは、レミリアと咲夜の七日間

レミリアが創り出した最後の延長

だから邪魔が入らず、幸せな七日間を過ごせた訳ですね。

2
0
8
3
2
4
記

今と過去の邂逅 第一章

「遅刻するなよー。んじゃまた明日ね、メリー」

「あなたが遅刻したんじゃないの……。まあいいわ、またね蓮子」

いつも交わされるさよならの言葉。

これは、途切れ途切れだが大切に紡いできた私の記憶である。

私の名前はマエリベリー・ハーン。

呼びにくいからメリーと呼ばれてる。

私には超能力みたいな力を持っていて、空間の割れ目みたいなモノを視る事が出来る。

友達の宇佐見蓮子は空を見上げただけで時間が分かるみたいだ。

蓮子みたいな便利な超能力を持っていても、遅刻の常習犯だったり

するのだけど。

秘封倶楽部。

私と蓮子で立ち上げた大学のオカルトサークルだ。

内容は複雑そうだったって単純。二人で不思議な場所に行ったり幽霊スポットに行ったりしている。

話は飛ぶけど、私が視る事が出来る空間の割れ目。

その先の向こうに行ったことがあった。

夢の中でだけど、何もかもリアルで、蓮子も連れて行きたかったくらいに。

そして、気付いた。

その世界は一昔前の日本に似ていたのだ。

蓮子にこの話をしたら目を輝かせながら聞き入っていた。

私にしかその世界に行けない。という事が無ければ今すぐにでも連れて行ってみたい。

まるで子供が秘密基地を作った時のような、そんな感覚。

けれどそんな秘密基地は夢の中でしか存在できない。

現実味も無いし私でさえ疑う時だってある。

それでも蓮子が目を輝かせて聞くものだから話してしまっ。

が、最近どうもおかしい。

「疲れてるのかしら」

向こうの世界に行く事が多くなっているのだ。

普通の夢もみていたが、その頻度は少なくなってきた。
空間の割れ目じゃ、より確かに視えるようになってきた。

……そうだ、疲れてる。

自分の言葉を反芻して、納得させる。

昨日は折角の休みを削って、連子と新しい電車に乗って青い海を見
に行ったばかりだから
だから、疲れているのだろう。休めば大丈夫。

「ふう、やっと着いた」

気付いたら日は落ちていて辺りは薄暗い。

子供たちの喧騒も消え、鴉の寂しげな鳴き声が聞こえていた。

今日は早めに寝ようかしら。

そんな事を思いながら家の鍵を差し込む。

ここから先の記憶は曖昧

本当に寝たのかもしれない。

……少し先の記憶へ。

「ここは、何処かしら……」

あれから何カ月も後の事だった。いやかもしれない。

自分が、向こうの世界に徐々に溶け込んでる事に気付いた。

つまり夢の中と理解出来ていたが、今では現実と区別出来なくなっていた。

逆に現実世界が夢のような感覚に襲われてしまう。

なんとも言葉に出来ないような感覚、それがもどかしい。

蓮子がいる時は、それが現実と理解できる。

そんな極限まで私は求めていたんじゃないのに。

そして辺りを見渡す。

木々が生い茂っていて、夜なのだろうか、とても暗かった。

周りの印象から、それが森の中にいるらしいということまでは理解できた。

待っていても埒があかないので歩いてみる事にする。

土の匂いがやけにリアルで。

雨上がりのような、清清しさがあつた。

そして、ふと夜空を見上げる。

満天の星と満月が煌々と輝いていた。

私の世界には無い美しさが、この世界にはあつた。

森を抜け、小高い丘の上に立ち、辺りを見渡す。

辺りは山と草原しか無かつた。それ以外は何もなく、目の前には大きな自然だけが鎮座していた。

「……まるで昔話の世界」

丘の上に仰向けになり、夜空を眺める。

そよ風が気持ちいい。こんな場所は悪くないと、微笑んでゆっくりと目蓋を閉じる。

いつしか私は眠ってしまった。

その世界に別れを告げて。

「メリーどうしたの？」

「どうもしないわよ」

大学の講義が終わり、帰りの喫茶店にいる時の事だった。

二人で特大のパフェを注文した後、不意に蓮子が訊いてきた。

「それになんだか疲れてる気がする。ちゃんと休んでる？」

「ちゃんと休んでるわ」

「無理、しないでね」

「うん……」

なら良いけどさ、ねえノート見せて！

と、いつもの会話へと戻る。

何気ない、日常の会話をして盛り上がり、そして家に帰る。

もしくは、その帰りに蓮子の言うオカルトな場所に行ったりする
それが大学の講義が終わった後のお決まりのパターンだった。

今日の蓮子はどうやら後者みたいだ。

まさか二人の運命を変えろとは、誰しも予想だにできなかったであろう。

「ねえメリー、今日は古い神社に行ってみない？」

二人すら、そんな結末を考えてなどいなかっただろうから。

「ねえ、薄暗いしなんか怖いわ……」
「もう少しの辛抱だつて」

蓮子はお構いなしに前へ前へ進む。
こんな暗いところで一人にはなりたくないのだから仕方無く蓮子についていく。

「あ、見えた見えた」

それはとても小さな神社だった
人のいる気配も無いし、どこか寂れていて何故か悲しくなった。
悲しくなった？ううん、違う。可哀想だと思った。

「ねえ、蓮子早く帰ろ」

「えー、せめてお賽銭くらい入れていこうよ」

「んじゃお賽銭入れたらすぐ帰るわよ」

「仕方無いなあ」

「さ、はやくはやく」

こういう心霊スポットには本当に弱い。

幽霊は信じてないが、何故か怖い。

私の第六感がそう告げているのだから、仕方ない。

「そういえばここって何て言う神社かしら」

思い付いた疑問を言ってみた

「確か……ハ……ク……。ああ……博麗神社ね」
「博麗神社……。」

話をしていると神社の境内に足を踏み入れ、賽銭箱がある場所まできていた。

元は良質な木材で作った賽銭箱だったのかもしれない。

その賽銭箱を繋げる金具が錆びていて、今にも取れそうだったり、賽銭箱自体が、いつ壊れても分からない。それほどまでに、寂れていたのだった。

「とりあえず百円でも」

チャリーン

そして蓮子は手を合わせる。

幾ばくか、私は見ていた。

「……って、ちょっといつまで手を合わせてるの？」

蓮子は動かない。まるで時間が止まったかのように。目を開けない。

「おい、蓮子ー？　ねえってば」

聞いていない、というか聞こえていないようだ。
そしてその違和感に気付く。

「っ」

頭に頭痛が走った。

痛みを堪えながらも辺りを見渡す。

止まっている木々、止まっている風。

「まさか、時間が止まっているの……？」

そんな有り得ない現実には、戸惑う。

すると私を中心に空間の裂け目が出現していく。

無作為に放たれているそれは徐々に私へと狙いを定めて　。

「どっぴうこと……？　ねえ蓮子、助けて！」

その言葉も彼女の耳には届かない。
裂け目がどンドン広がり、足元が裂け目の中に入ったと気付いた時
だった。

心臓が攪られるような、もどかしい感覚。
そして、地に足が着いてない状態。

「きゃああああつ

!!?」

メリーは空間の割れ目の中に落下した。
夢の中でしか、有り得ない筈の世界が、今まさに現実を飲み込んで
いく。

そこからのある一定の記憶が無い。
……きつと気を失っていたのだらう。

気付いた時には私は”あの世界”にいた
おもむろに腕時計を見てみる。

「止まっている……」

腕時計の針が止まっていた。これじゃ正確な時間が分からない。辺りを見渡す、オレンジ色の太陽が山に沈もうとしている。空は朱と青で混ざりあったグラデーションがとても綺麗だった。

「こんなときに連子はいないのよね」

それでも、はっきりした時間はよく分からないが、空を見る限り夕方ということが分かった。

「これからどうしようかしら」

今までは夢から覚めれば向こうに戻ってこれた。が、今回は少し違う。

何よりも現実で起こった世界。私は”起きて”いる。

「でも……」

地面に倒れて空を仰ぐ。

紫色に染まる空に、一番星が輝いていた。

「「」も悪くないわね」

気付くと日は沈み、夜空には星が輝いていた。
技術が進み、自然が破壊されていく私の世界には滅多に見ることのない星たち。

星の輝き以上に街は明るい、だからこそ星たちは居場所を失った。
私は、もしかしたらとんでもない世界にいたんじゃないかと思う。

「……」

目を閉じて風を感じる。

耳を澄まし自然を感じる。

何故だろうか、急に睡魔が襲ってきた。

そんなに私は疲れていたのだろうか。

もしかしたら、帰れるんじゃないか。

そんな淡い希望を胸に秘めて私は眠りに落ちた。

今と過去の邂逅 第二章（前書き）

「霊夢、貴女は人間は妖怪になると思う？」

お茶を飲んだと、後ろから紫が話しかけてきた。
……いつものことだから面倒で振り返らなかった。

「さあね、なるんじゃない？」

面倒なのであまり考えずに返す

「じゃあ人間から妖怪になる為の条件は何かしら？」

「知らないわ、そんなの考えたこと無いし」

「何かしら人から外れた能力を持ってたら妖怪かしら」

「さあね、知らないわ。まあでも、能力を持つ人間って滅多にいな

いし。そんな事言ったら私だって妖怪にされちゃうわ」

「……………そう」

突然、後ろの気配が消えた

「紫……………？」

気になって振り返ってみても紫の姿は無かった。

今と過去の邂逅 第二章

あれから一週間が経った。未だ元の世界には戻れない。朝、目を覚ましてもそこは私の知らない世界だったし。人影など何処にも無かった。

私のいる場所の近くには森があり、果物が沢山なっていたので食べ物に困るといふ事にはならなかった。

……寧ろ食べ過ぎたかもしれない。

「……………」

眩しい。

もうそんな時間かしら。

かろうじて目を開けて立ち上がる。

光に慣れてないせいか周りがよく見えない。

……ああ、今日は何をしようかしら。

軽く伸びをして深呼吸をする。

今日も清々しい朝。目覚めは悪い。

周りの風景を眺めながら目を慣らしているとお腹が鳴った。恥ずかしくしてお腹を押さえながら周りを見ても誰もいないわけで。あつ、と声を漏らして寂しくなった。

「ま、まずは食事ね！」

気を取り直して。私は食料を探るために近くの森に向かった。

森は元いた世界でいう西洋みtainな森だった。

針葉樹や果物が成る木が沢山生えていた。

茸も生えていたが、知識がないメリーにはどれも怪しく見えて、とても食べる気には起きなかった。

「赤い実は何処にあつたかしら……」

甘酸っぱい味がする赤い実。

それを食べて過ごしてきた。

「あつ。あつたあつた」

高い所にある赤い実。

木を揺すつても落ちなかった。

……木を蹴つてみたら落ちてきた。

赤い実を拾い、手で土を払いかじってみる。

「……美味しい」

今日もこの世界での生活が始まる。
食べながら森を抜ける。

目の前には丘があり、その丘から見る景色は壮大で美しい。
丘に着き、周りを見渡す。

草原が広がり、その向こうには大きな山々がある。
本当に人工的なモノなど何もなく、その人間でさえ私しかない。

「そっだ、この世界を名付けてみようかしら」

それは突然思い付いた事だった。

今思えば、なんでそういうことに至ったのか、分からない。
ない。

「理想郷……いや、違うわユートピアもなんかイマイチだし……」

自然、夕日、夜空

こここの世界の自然に感動していた。
まるで二人が夢見ていた、世界。
幻想の世界。

「幻想……」

あれ、どこかで聞き覚えがあるような。そんなフレーズ。けれど思い出せない。

「幻想郷、うん悪くないわね」

幻想的な世界だから。

私はこの世界を幻想郷と名付けた。

幻想郷の世界に居るにつれ髪が伸びてきた。

そして自分の能力にも変化が起きてきた。

幻想郷でも空間の割れ目、境界が視えるようになってきたのだ。

……もしかしたら、境界を越えれば帰れるかもしれない。

心の片隅にそんな気持ちがあった。

いや、寧ろ片隅にしかない私の気持ちに驚いた。

「私は此処に居たいのかしら……」

元の世界には無い自然や未知が広がっている。

私はどちらに居るべきか。

「ま、帰れるか分からないのに悩んだって無駄ね」

そう言って私はクスツと笑った。

なんだかこっちでもやっつけていけるような気がしたから。

そして幻想郷に来て1ヶ月のこと。
突然の出来事だった。

「おい、起きろー」

……誰？ まだ眠いのに。

「起きろー」

寝かしてよ。起こさないで。

「おい、人間？」

「……」

……え？ そこに、誰かいるの？
目をゆっくり開ける。

寝惚け眼をこすりながら、眼前にいる何かを認識しようとする。

そこには大人の女性が立っていた。
ただ、私と違うのは頭に生えた二本の角があるということか。

それを再確認し、また目を擦り、頬をつねる。

「よ、人間」

「きゃあああああつ?!」

「わっ!?!び、びっくりさせるなよ」

「あ、あ、あなた人間じゃない……」

「へ?……あ、ああ! そうだ私は人間じゃない。鬼だ」

そう言つて鬼はにいつと笑つた。

「お、鬼……?」

「ああ」

「本当に鬼?」

「ああそうさ」

段々、頭が冴えてきた。

メリーは考える。

幻想郷に私以外の人間がいた。あ、いや人間じゃない。鬼だ。

「つまり、貴女は鬼なのかしら?」

「人間、これで三回目だ。……まあいい、ところでなんでこの世界にいるんだ?」

「神社にいったら突然空間が裂けて、気付いたらここにいた」

「ほつ」

そう言っつて私は立ち上がる。
こうしてみると彼女の方がやや身長が高い。

「でもその前から夢でここに来てたのだけど」

「なるほど……。というと、もしかしてあんた妖怪か？」

「……は？」

何を仰る。

しかし妖怪とは聞き捨てならない。

「ああ、あんたは人間だった、変なことを言っつてしまったな、すまない。……ただ、人間が特別な能力を持つてることが珍しくてね。とんだ災難だな」

「災難だわ。……まあでもここも悪くはないけどね」

「災難を引き起こしたのか、巻き込まれたのか。君はどっちなんだい」

「好きで災難なんて起こさないわ。私はね、空間の裂け目、境界を視る事が出来るの。その境界に落ちてしまっただけ」

「ほう、境界とな」

鬼は空を仰ぎクスツと笑った。

そして手を差し出し、

「これも縁かもしれない。よろしくな人間」

「そつだ自己紹介するの忘れてた。伊吹と呼んでくれ」
「私はメリーよ、よろしく」

改まって自己紹介する私達が可笑しくて、クスツと笑う。
……そして伊吹という存在に安堵したのが、
堪えきれなくて我慢してた涙が溢れてきた。

「め、メリー？」

「ごめんなさい、此処に来てからずっと一人だったから……」

これは寂しかったから？嬉しいから？安堵したから……？

よく、分からない

「……辛かったな」

伊吹が頭を撫でる
撫でた手がとても温かくて

「メリー、ここは貴女の世界」

伊吹が私の肩に手を乗せる。

「寂しいなら呼べばいい。得たいなら欲すればいい」

なんの事か分からないけど、その魔法の言葉は不思議と私を安心させてくれる。

「うん……」

「私は出来ないが……。メリー、君なら出来る筈だ」

そして伊吹はにいと笑った。

それは希望を託す笑みなのか、未来を予見した笑みなのか。

それとも

あれから時間が経ち、いつしか日は落ち始めようとした
それまで伊吹と色々な所を歩いたりした

「そういえば伊吹はこの世界に住んでるの？」

「いや、住んでない。この世界は今メリーと私しかいないと思う」

……思考を巡らせる

「ってことは伊吹はどうやって此処に来たの？」

「結界、って言えばいいのかな。その類の術を使ったのさ」

「私も使えるかしら……？」

「メリーならきつと使えるようになるさ」

「……本当？」

「本当だ」

目を輝かせる私。

「んじゃ結界が使えるようになったら伊吹がいる世界に行くわ！」

「おお、楽しみにしてるよ」

今と過去の邂逅 第三章（前書き）

人間は歳月を経れば進化する。
それは能力も同じといえよう。

彼女、メリーは容易に境界を操れる事が出来るだろう。
世界は”言葉”によって構成され、”言葉”によって認識出来る。
境界も然り、
天と地、火と水、そこに曖昧は無い。ハッキリとした境がある。

その境界を操る事が出来るのなら。

彼女は何でも出来る。

出来るが故に脆い。

が、それも私の杞憂かもしれない。
たまたま放浪した世界に来て、メリーに会えた。
それはもしかしたら凄い事なのかもしれない。
だから私はこれを書き残すとした。

願わくば、私の子孫がメリーと会える事を

そんな馬鹿げた事、ある筈もないだろうが、
無いなんてことも否定できないのだから。

いくら、廻っても。

今と過去の邂逅 第三章

その後、伊吹と少しの間幻想郷で過ごした。

何故か分からないがこの辺りの記憶がぼんやりとしか分からない。故に伊吹とお別れの時、そしてその後の記憶が分からない。

ただ、一つ言えることがある。

記憶がぼやけてる向こう。

つまり、記憶がハッキリしてる所。

「私は、この境界を越える。」

そこから。

”私”の、第2の物語が始まったのだ。

*

気付いたら私は其処にいた

広い野原の上に仰向けになって

ここは……幻想郷かしら

長い間眠っていた……気がする

ゆらり、と立ち上がる

足がふらつく

……周りを見渡す

いつもと変わらない

私の幻想郷

「……そうだった、私は、一人だった」

伊吹と別れた後、私はずっと寝てたのかしら？

(得たいなら欲すればいい)

伊吹の言葉を思い出す

「だったら、境界を弄ればいいのよ」

突拍子も無いその考えに私自信戸惑う

”視”えるなら”弄”れる事も可能かもしれない

試しに、念じてみた

気象の境界を

するとおかしなことに小雨が降ってきた。

「凄い」

……私って凄い

「じゃあ空間移動とか出来たりして」

空間の境界を弄る

すると目の前に一つの線、境界が出来た

それを上下に広げ、人が入るようにする

境界の中は真っ暗。”どこかで”みたことがあるような、空間の割れ目。

とりあえず、行き先を決めなきゃ。

向こうに見える山の頂上を思い浮かべ、目を瞑りながら隙間の中に

入っていく。

入った途端、風を感じた
目を開ける。

「……嘘」

目の前には私がいた丘の上の野原

山の頂上は風が吹いていた。

なんだか唐突に凄い事が出来て、笑いが込み上げてきた。

そしてあることに気付く

足りないのだ

何が？

「あれ……？」

記憶？

何かがぽっかりと抜けていた。

まるで中身がない、虚無感に、震える。

「私の名前は……」

何？

なに？

私は何だったの？

ああ、そうだ。

「………忘れたなら名乗ればいいじゃない」

*

「八雲 紫………。よろしくね」

一人、笑みを溢す。

なんだか楽しくて仕方ない。

山の上から地上を見下ろす。

「一人だけじゃ、つまらないわね」

そう言っつて私は境界を弄った。

夢を叶えよう。私の夢を。

メリーとしての記憶が自分の記憶であると認識出来なくなったのはいつからだろう。

まだ私は何か忘れてる気がする。大切な何かを。

私は幻想郷に現実と幻想の境界をひいた。

無論、これは現実で”幻想”した事象や物質が幻想郷に”幻想入り”するというシステム。

が、無闇に幻想入りすれば外の世界均衡が保たれなくなる。だから私は人間が幻想入りした時の対策を考えた。

それは、”幻想入りした人間に関わった記憶が消える”ということ

最初に幻想入りしたのは博麗神社だった。

訪れる人もいなくて、ただ朽ち果てるのを待つだけの神社。

……なのにそれが妙に懐かしく感じられた

数十年も経てば人も集まる。

最近では”魔界”という所から妖怪が来たりする。特に荒らしたりせず気ままにやってるようだ。

「今度魔界に行ってみようかしら」

幻想郷に村ができ、面白くなってきた。

私は私なりに動物を役使して間接的に人間の手伝いをさせたり、外の世界の人間を”神隠し”していた。

無論、外の世界に執着していない人間を狙って。

私は隙間を使い博麗神社に向かう。

「で、どうすればいいのよ？」

「貴女なら強力な結界を張れるでしょう？この幻想郷を守る結界を張って欲しいの」

神社に住み始めた巫女が私を胡散臭そうに見る。

「面倒だし、ずっと張るとなると管理も大変だわ。断る」

一蹴されてしまった。

私が結界を張ってもいいが、私がいなくなったときのことを考えるとこの巫女に任せた方がいいかもしれないと思っていた。

落胆する私の表情を読み取ったのか、巫女がはあため息をついて、言った。

「分かったわかった。私がやろうじゃない。ただ管理とか修復は几帳面なあんたに任せてもいいかしら」

「お安い御用だわ、ありがとう。」

外界から守るシエルター。

きっと、外の世界が滅びても幻想郷は結界が破壊されない限り生き続けるだろう。

「平和が何よりだわ」

そんな言葉を呟いて、煎餅を頬張る

「ちょっと、勝手に私の煎餅を食べないでよ」
「ちょっとくらいいいじゃない」

巫女が口を膨らませる
それを見てクスツと笑う

なにがおかしいのよ！
いやなんとなく

あーっ、また煎餅食べた
美味しいわね、この煎餅
楽しみにとっておいたのに……
まあまあ煎餅一枚くらいで怒らない怒らない
うるさい、しかも二枚よ二枚！

「……………ふふ」

日常的で平和な幻想郷。
ああ、これが私の望んだ世界なんだ。

……………私は、幸せだ

今と過去の邂逅 第三章（後書き）

「貴女は幻想郷が好きかしら？」

境内を箒で掃いてると後ろから紫の声がした。
なんだ、気にすることなかったじゃない。

「さあね、考えたこと無いわ」

後ろを振り返る。

「じゃあ考えてみて」
「……………」

幻想郷、か…………。

「ねえ紫」
「ん？」

空を見上げる。
澄み切った、青い空。

「じゃああなたは、幻想郷が好き？」

クスツと笑った、気がした。

「当たり前じゃない」

今と過去の邂逅 最終章（前書き）

「ねえ霊夢、幸せかしら？」

「何よ急に、……まあ気ままに暮らせてるし。それなりに幸せだと
思うけど」

「良かった」

「って、煎餅食べないですよ！ 楽しみにしてたんだから」

「固いこと言わないの」

「むー」

私に食べられないように早く煎餅を食べていく霊夢。

それがなんだか可笑しくて笑ってしまった。

「懐かしいわね」

「何が？」

「うっん、何でもないわ」

今と過去の邂逅 最終章

あれから煎餅を一枚頬張り、隙間を使って外の世界に来ていた。

前に来たときより確実に進歩したその世界はあまりに”不”、いや”負”が存在していた。

「ま、経済発展には仕方ないのかしらね」

上空から地上を見渡す。

「……あれは……」

気になった場所に隙間を使って移動する。

*

……そこは墓地だった。

「なんでこの場所が目に入ったのかしら」

折角なので傘を射して辺りを歩く。この石の下には死んだ人の骨がある。

そんなことを思うとこの石は結界か何かの力でも持ってるんじゃないかと考えてしまう。

「あら」

目に止まったのは”宇佐見”という名前が刻まれた墓石。

「……宇佐見」

私はこの、宇佐見という人物を知ってる気がする。

「思い出せないわ」

その人物が幻想郷にはいない、つまり神隠しに関連した人物なのだろうかと考える。

だけどこの宇佐見とはそれ以上の何かがあった気がする。

「全く、記憶なんて宛にならないわね」

はあ、と溜め息をして傘をくるくる回す。

墓石を眺めて、帰ろうとした時だった。

「……メリー？」

*

目の前の傘を射した女性に私は思わず友人の名を言ってしまった。
その女性は不思議な顔をしてこちらを見る。

「じ、ごめんなさい。人違いでした」

慌てて弁解する。

目の前の女性が私の友人なんてある訳無いんだ。
だって彼女は何年も前に突然姿を消した。
今更逢えるなんて、考えるだけ無駄なのだから。

でも、目の前の女性は私の友人の姿と重なって見えた。
きつとまだ生きていたらこの女性のように綺麗な人になっていたの
かもしれない。

「あなた……、もしかして宇佐見さん？」

女性が私に訊いた。

艶のある声、そして寂しさが混じったその声。

「はい、宇佐見です。宇佐見連子といます」

女性はそれを聞いて何か考え事を始めたらしい。

時折顎に手を当てて考えるポーズをしたりしてる。

進展が無いのでとりあえず私は当初の目的の募参りをする
手を合わせ、花を飾る。

だけど私は後ろにいる女性が気になっていた。

もしかして、という希望と、

何年もの時間という空白の現実。

それが何重にも重なり、溜め息となって出る
全く、私は何をしてるんだろうか。

「ねえ連子さん」

「はい」

「そのメリーって人、詳しく教えてくれるかしら？」

ほんとに、何をしてるんだろうか。

「メリーは私の友人、いや親友でした」

乾いた笑みで親友と私の話を話始める。

昔、私とメリーで秘封倶楽部というサークルを作って、

世界の不思議な場所に行ったりしてました。

二人には特別な特技を持っていました、

私は空を見れば大体の時間と位置が分かる能力、

メリーは結界という空間の境界を視る事が出来ました。

仲が良くて、たまに喧嘩したり笑いあったりして、

楽しい日々でした。

が、ある日を境にメリーの姿を見なくなりました。

それは神社に行って帰ろうとした時のことでした。

突然消えちゃって、私はメリーが怖くて帰っちゃったのだと思いま
した。

けど、一週間、1ヶ月経つにつれ私は不安になってきて、

私はメリーの行きそうな所や家に何度も行って探しました。

……でも、メリーを見つける事は出来ませんでした。

「で、そのメリーが貴女に似ていたのでつい……」

「なるほどね」

「そうだ、お名前は？」

「八雲 紫よ」

紫、か。

ひよっとしたらマエリベリー・ハーンという名前を聞いたら、と思
った私が馬鹿らしい。

まだ私は何を期待しているんだろう。

いつまでも、私はメリーの”幻想”を追いかけているんだろう。

「あ、じゃあ私は帰りますね」

追いかけるのは、もうやめよう。

「それじゃさようなら」
「さようなら」

私は疲れたよ。

*

私は連子の後ろ姿をずっと見つめていた。
何故かは分からない。
ただ、見ておかないといけない気がしたから。

「メリー……、か」

宇佐見同様、聞いたことのある名前。
私の記憶はなんだったんだろう。
知らぬ間に都合の悪い記憶は消えてるのかしら。

……？

私の起源はどこ？

傘が手からするりと落ちる

私は何処から始まった？

「……あ、あ……」

「私は誰”だった”？」

「思い出した」

*

「連子……!!」

私は走った。

帽子が落ちても、それよりも彼女を目指して走った。

私は連子に言わなければいけないことがある。

「……連子」

「あ、紫さん？」

すーっ、と深呼吸をする。

「私、色んな所を旅してるの」

「だから、そのメリーって人に会うかもしれないわ」

今の私は

「だから、もし会ったときの為に言いたいことあるなら私に言ってみて」

貴女の求める幻想じゃないから。

「いいんですか…?」

「ええ」

そう、それでいいのよ。

「……じゃあ」

私には私の世界。

連子には連子の世界があるから。

求める先の世界は同じだった筈なのに。

連子はいいと笑ってこう言った。

私はこの言葉を忘れはしないだろう。

「幸せに生きてください」

*

幸せに生きてください

その言葉を何回も頭の中で繰り返す。

何故だろう、涙が溢れ出てきた。

私、らしくない。

「分かったわ……絶対に、絶対にメリーに伝えてあげるから……」
「はい、お願いしますね」

連子は帽子を深く被り、言葉を紡いだ。

「ありがとう」

「連子」

今の私には、そんな資格、無いのかもしれないから。

「ごめんね」

笑った、気がした

「許してあげる」

私は忘れない

貴女がいたこと

私がいたこと

伝えた言葉は少ないけれど

私達はそれで十分なのだから……。

*

帰る途中、紫さんに呼び止められた。

傘や帽子が無い彼女はメリーとそっくりだった。

「……連子」

この声、懐かしい。
なんで気付かなかったんだろう。目の前にあったのに、近すぎて分からなかった。

伝えたい事……？

「幸せに生きてください」

だってそれが私の願いだから。
ずっといたいなんて我儘は叶わない。
だから、私はこの言葉を送る。

だって生きてれば、それだけで十分。
すると紫さんが涙を流した。

メリー、隠すの下手なんだから、
だから私も騙されてあげる。

何かあったか分からないけど。メリーと、また逢える日を信じて

私は待つよ、いつまでも

謝らないで、貴女は悪いことをしてないから
だから私は笑う。

メリー、私は待っているから。

「許してあげる」

それはメリーなのか紫に言ったのかは分からないけど。
それで貴女が私を忘れないのなら。

私は宇佐見連子。

私の親友は、

大切な人はマエリベリー・ハーン。

私達の物語は終わらない。

*

「ねえ伊吹、お酒持ってきたんだけど。たまには一緒に飲まないかしら？」

「紫から誘うなんて珍しいねえ、あと苗字で読むのは違和感あるか

「らやめてくれないかな」

「今日だけよ」

「むー、よく分からないけど……。まあ仕方ないなあ」

萃香にお酒を注ぐ。

「お、ありがとう」

「ねえ、伊吹」

「ん？」

「貴女には助けられっぱなしだわ」

「……え？」

「うつん、忘れて頂戴」

満月の下で鬼と妖怪は乾杯をした。

今と過去の邂逅 最終章（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回はメリー＝紫説に乗っ取って書いてみました
いや、しっかし書くのが難しい…。

考えてたネタとか使えずじまいだったりで、（＾o＾）ノ状態。
でもまあ、最後のシーンとか気に入ってます。

書き終わった日

08/6・13

13日の金曜日。

紅葉舞う、秋の訪れ 前編

「姉さん、遂に私達の季節がやってきましたね！」

「ええそうね、去年はあの巫女のお陰で散々だったけど」

「姉さん暗い！」

「はいはい、……そう言ってる貴女も早く炬燵から出なさい」

「うー、もう少し」

「それ三回目、ほら山の散策をするんだから」

「そつだ、帰ったら薩摩芋で何か作らない？」

「薩摩芋ねえ……」

「デザートとか出来たらいいのになあ」

「んじゃ散策のついでに天狗に聞いてみましょ」

「賛成！」

「……分かったなら、早く炬燵から出なさい」

「わあ、この紅葉綺麗ね」

「今年は張り切ったからね」

「私も頑張ったから村の人達にお供え物貰っちゃった」

「あらいいわねえ」

「収穫したお米なんだけどね、ほら昨日食べた炊き込みご飯。あれが貰った米なんだよね」

「通りでいつもより美味しいと思ったわ」

「ふふ、来年も張り切っちゃうかな」

「私達神様は、幸せを糧にするからね。きっと山の神様も喜んでるでしょうね」

「あ、あの神様なら宴会開くみたいだよ？」

「あら賑やかになりそうね」

「私達も招待されてるよ？」

「あら椀、ここにいたのね」

「休日は山を散歩して紅葉を楽しもうかなと。……文様はどんな
されましたか？」

「んー、ほらこれ、上の神社の神様から宴会開くから来てくれって
言われちゃってね」

「宴会ですか、楽しそうですね」

「去年は宴会出来なかったしね」

「去年……、ああ巫女が神社に殴り込みに行ったアレですね」

「そうそうアレよアレ。椀は来週あたり休み取れるかしら？」

「他の白狼天狗に警備を変わってもらえば」

「よし決まり。椀、宴会に行くわよ」

「は、はいっ」

「そうですね」

「そうだ、来週神社で宴会するんですが来ませんか？」

「お、宴会か、いいねえ」

「昨年はお騒がせしたので今年こそは、と張り切ってるみたいなんです」

「ふむ、んじゃ来週の予定明けておくね」

「本当ですか、ありがとうございますっ」

「期待してるね、早苗ちゃん」

「名前、覚えててくれたんですね……ぐすっ」

「ちょ泣かないで早苗ちゃん、ってか何で!？」

「私は緑の人じゃないです……」

「私も行きます、そのせいで宴会の広報活動を頼まれてまして……」

「あら今回は張り切ってるのね」

「みたいですね」

「ふふっ、楽しみだわ」

「お、文じゃないか」

「これはこれは霧雨魔理沙さん。この沢山の本は」

「お、これか？図書館から借りてきたんだ」

「ちよ、卓袱台の上に置かないでよ！下に置きなさい、下に」

「仕方ないなあ、……しよっと」

「そうだ、魔理沙さんも来週の宴会に来ますか？」

「ん、宴会ってなんだ？」

「来週、山の神社で宴会を行うみたいですが、魔理沙さんも来ますか？」

「あっちの神社で宴会か！ 私も勿論いくぜ」

「魔理沙さん追加……っと。来週が楽しみですね」

「そついや酒癖悪い誰かさんが暴れないかしら……」

「霊夢よんだー？」

「萃香さんお久しぶりです」

「おろ、魔理沙に文じゃない、皆そろってどうしたの?」

「来週、山の方の神社で宴会をするのですが、萃香さんも来ませんか?」

「宴会かあ、楽しみだねえ」

「とりあえず萃香さんもこれる……と」

「萃、また巨大化して神社を壊さないでよね」

「あれ、巨大化して壊したことあったけ?」

「ああー、地雷踏んだなこりゃ」

「んじゃ、私はおいとましますね」

「え、ええっ!? 霊夢なんで震えてるの?ま、魔理沙もなんで遠ざかるのさー!」

「が、頑張れ!」

「ね、雷鳴こわ

うわああああっ！？」

.....

「早苗ちゃん頑張ってるみたいだよ？」

「私達二人も頑張らないと、ところで宴会の料理はどつする？」

「あ、私紅葉天ぷら食べてみたい」

「薩摩芋とか米酒とかいいねえ」

「神奈子は酒飲むと絡んでくるからなあ」

「そういう諏訪子だって悪酔いして早苗を襲うとしたじゃない」

「う、あ、あれは……」

「早苗もこの生活に慣れてきたのかな」

「やっとゆっくり出来るよね」

「一番頑張ってたのは早苗だしな」

「未練はないのかなあ……？」

「私は……、あると思うよ」

「んじゃ、なんで”此処”に来たのさ？ 未練を無くなるまで待つてあげればよかったじゃない」

「未練なんて、無くならないよ。問題は、少しでも」

「神奈子」

「ん」

「早苗は未練はあると思うけど、後悔は、してないと思うんだ」

「そんなもんかねえ……」

「そんなもんだと思うよ……………あ、早苗おかえりー」

「おかえりなさい、早苗」

「神奈子様、諏訪子様、ただいま帰りました！！」

「ああ、そうだな」

「早苗ちゃんには頑張って貰わないとね？」

「ふえっ、まだ何か……？」

「ほら、宴会にはつまみが……」

「わ、私一人で？」

「任せた！」

「私も手伝うよ」

「諏訪子様が手伝ってくれるなら……してもいいですが」

「よし、決定。週末が楽しみだな!!」

「神奈子、あんたも仕事しなよ……」

紅葉舞う、秋の訪れ 後編

宴会当日

山に位置する神社。

夕暮れ刻にも関わらず、妖怪や人間で一杯だった。

「いっぱい来たねえ」

と境内の石階段から諏訪子は宴会に来た妖怪達を見て呟く。

普段、山の中で暮らしてる天狗や河童達も少なからず来ていた。

珍しいねえ、と思いつながり立ち上がり夕日に目を細め深呼吸する。

さて、そろそろ始まるかな

神社、もとい会場は人間や妖怪の種族に関係なく賑わっていた。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

まあそれもそうかと、神奈子は思った。

麓の人間の里には妖怪も通っていたりするから驚きだ。

居酒屋では人間と妖怪が一緒に酒を飲んだりするという噂も聞いた。

始めは、人間と妖怪誰構わずに誘っていた早苗を見て内心不安に思っていたが、この様子じゃあ大丈夫だろう。

相容れぬ存在、だと思ってたが杞憂に過ぎなかった。

ふふ、と微かに笑い、

「早苗、これ揚げていいかい？」

そう言って、私は皆の喜ぶ顔が見たいが為に。

いや、違うな

「神奈子様、焦がさないようにお願いしますね？」

早苗の笑顔が見たくなつたから、

だから、

宴会を開いたのかもしれない

神奈子様の開催宣言で乾杯した後、いよいよ宴会が始まった。

早苗は料理やお酒が無くなるのでは無いかと思っただが、宴会に各々がつまみやお酒を持ち寄りたりしていたため安心した。

神社の冷たくなった縁側に座り、お茶を片手に眺めていた。

そこに諏訪子がひよいとやってきて早苗の隣に座る。

足をばたつかせながら、諏訪子も宴会の様子を眺めていた。

「幻想郷に来て一年だねえ」

「そうですね」

あっという間でしたね、と早苗が付け加える。

「しっかし、人が集まったねえ」

「こんなに集まるとは思いませんでした。これも信仰なのですかね」

「それは違つと思つよ」

「……？」

「早苗ちゃんの頑張ってる姿を見た人、その期待に応えてあげたい人、

早苗の頑張りが、こんなに人を呼び寄せたんだと思つよ」

「そんな、私は」

「だからさ、早苗ちゃんはリラックスしていいと思つんだ」

「それでも、私は風祝として……」

「私達も頑張らなきゃいけない、早苗一人に任せちゃいけない」

「だからね」

諏訪子がいきなりお酒の入ったグラスを早苗の口におしあてた。

「ちよ、諏訪子さ」

抵抗も虚しく、お酒を飲んでしまった早苗。

にい、と笑う諏訪子。

「な、何するんですか!？」

「たまにはさ」

賑やかで、楽しげな人間と妖怪の音が聞こえる。

「もっと楽しんでもいいんじゃないかな？」

「……………いいんですか？」

早苗が俯きながら、訊ねた。

「……………ねえ、神奈子はなんで宴会なんか開いたと思うっ？」

「宴会を、開いた理由……ですか？」

「うん」

少しの沈黙が訪れる。

きっと早苗には分からないだろう、いや、結論にいかないだろうね、
そう諏訪子は思った。

「……分かりません」

小さく、言った。

「……神奈子はね、」

縁側から降りて、宴会を眺める。

「早苗の、心の底からの笑顔が見たかったんだと思うんだ」

「私の……、ですか？」

「心配してたよ、神奈子。幻想郷に来て後悔してるんじゃないか、とか心残りとか……ね」

「神奈子様が……」

「早苗!」

諏訪子が叫ぶ。

「は、はいっ!」?

「行きなよ、”皆”の所に」

にい、と笑い、

諏訪子は片手を差し出す。

「あさ。」

その片手を、早苗は握った。

諏訪子が走り、それにつられて早苗も走り出す。

「諏訪子様っ、はや」

私達の”宴”はまだ始まったばかり

-
f
i
n
-

紅葉舞う、秋の訪れ 後編（後書き）

私の幻想郷の続編的サイドストーリー。だからって本編はありませんが。

多分この後、文に宴会の人達と一緒に（酔いながらも）記念撮影したと思います。

珍しく、すぐ読み終わるような短編。

ちなみに、上だけ会話文なのは仕様です。

こう、遠く離れたところから人物の会話が聞こえてくるような、そんなアングルを出したかったです。

遠くからみていて、人物達がぼやけて見えるようなそんな感覚。

なんだかんだで早苗は良い子。

2008 / 11 / 22 記

ツェペシユの傳き幻想 第一章

「あれ、これは」

それはある日の紅魔館の図書館でのこと、司書である小悪魔はあるものを見つけた。埃がかぶったそれは、どうやら年期の入ったものらしく、所々に染みが付いていた。

「パチユリー様、これは……？」

ある”本”を抱え、小悪魔はパチユリーの元へ向かう。

図書館の主とも言える知識人は机に向かって魔術関連の本を読んでいた。

辺りは既に夜の闇で真っ暗、所々に点在するランプとパチユリー様の書斎のランプで図書館は闇に包まれず、本も傷まず、多少薄暗くも最高の環境を作り出していた。

「パチユリー様」

紫の髪をし、三日月の髪留めを付け、薄紫のローブに纏った彼女は百年以上も生き続けている魔女。

「二回も呼ばなくていいわ。……どうしたの？」

小悪魔は抱えていた本をパチユリーに見せた。その本を見てパチユリーは一瞬、眉が上がった。……ような気がした。

「あの、これは……？」

「この本……、というより日記かしらね」

懐かしむようにパチュリーは日記の表紙を撫でた。

表紙に文字が書かれていたが、本が痛んでおり、なんて書いてあるか小悪魔には読めなかった。

「パチュリー様、その日記は誰のなんですか？」

それは、少しの好奇心。

日記というなら、誰の？と聞いてみるのか人の性だ。

……まあ、人ではないのだけれど。

パチュリーは少し考えて、一度その日記に一瞥した。そして小悪魔の方に視線を移す。

「そうね、その前に……」

「貴女に昔話をしてあげるわ」

それはまだ、紅魔館が幻想入りする前の頃。

*

紅魔館には色んな人達がいた。

当時は忌み嫌われた魔女、魔法使い、行き場を無くした人間も紅魔館にはいた。

「賑やかでいいじゃないか」

それは、この紅魔館の主が受け入れていたからだだった。

主、スカーレット伯爵はそんな人達を介抱した。

人種差別が酷かったこの時代、差別せず受け入れていたのはスカーレットしかいないくらいだった。

スカーレットにも二人の娘がいた。

蒼い髪をした長女、レミリア

金色の髪をした次女、フランドール

娘が産まれたとき、スカーレットは喜んだ。

館の皆も新しい生命の誕生に喜んだ。

「フランドール……?」

しかし、レミリアの後に産まれたフランドールは目を覚まさなかったのだ。

だが息はしており、”生きて”はいた。

「……でも生きているんだ」

伯爵は暗い雰囲気の中、皆を勇気づけた。

本当は伯爵が一番、つらいはずなのに。

それから何十年後、いやもつとかしら、

私、パチュリー・ノーレッジが産まれた。

そして目を覚まさないフランはベッドに寝かせられ、伯爵と一緒に寝ていた。

やはり我が子がやはり愛しいのか、娘二人と寝る伯爵は幸せそうだった。

レミリアもフランも段々成長してきた。

それから何年か後の事だった。

*

「貴女、本読んで楽しい？」

それがレミリア・スカーレットとの出会いだっただ。

ソファで本を読んでいたら蝙蝠の様な翼をもった蒼髪の少女に、声をかけられた。

大人に囲まれての生活だっただけに、少女から声をかけられたという事に上手い切り返しが思い付かなかった。

「まあ、一応」

考えた末に、こう言った。

一方少女は、ふうんと言うと隣の席に座り、本を覗き込んだ。

……仕方ないので、本に視線を落とす。

ページを捲り、本の続きを読む。

「活字ばかりね……」

数分後、少女はそう言った。

私が見るに、彼女は絵本ぐらいしか読んでなさそうだ。

「そう言えば」

今思えば、まだこの少女は誰なのか知らないでいた。

「貴女は誰かしら？」

「まさか館の中で自己紹介するとは思わなかったわ。私はレミリア、レミリア・スカーレットよ」

ソファからおりて、胸を張りながらレミリアは言った。

それに私はふーんと答え、また本の方に視線を落とした。

「いやいや、自己紹介したんだから貴女もしなさいよ！」

相手の意外な行動に慌てて、レミリアは言った。

「私？」

「そう貴女」

スカーレットの娘が私に指を指した。

私は面倒ながらも、自己紹介をした、……初めての自己紹介だったかもしれない。

「私はパチュリー・ノーレッジ。……趣味は読書よ」

「パチュリーね、分かったわ」

そう言うや否や、私の右手を握った。

「よろしくね、パチュリー」

顔を上げると、そこには満面の笑みを浮かべたレミリアがいた。

その笑顔につられて、私は自然と笑顔になった。

「……………」

こくり、と頷きレミリアの手を握り返す。

……………私と同じくらいの少女の手は、

私よりも、強く、暖かった。

それから、彼女と親しくなるまで時間はかからなかった。
レミリアは毎日私の元に来たからだ。

「ねえ」

だから、聞いてみたのだ。

「他に遊ぶ友達とかいないの？」

まあ私が言えたことではないのだけど、
活発なこの少女が本を読んでばかりいる私の所で一緒に本を読んで
いるから、

だから、ふと気になった。

「うーん、いないと言えはいないし、いるといえはいるのかな」
「どっちなのよ」

「私にはね、ずっと目を覚まさない妹がいるのよ」

初耳、だった。

それ以前に私はスカーレットの娘は二人いるなんて知らなかったから。

「目を覚まさない……って？」

「文字通りよ、産まれてから目を覚まさないんだって。お父様が言ってたわ」

そうだったのか、

驚いた、この少女は、私よりも大変な目に遭っている。私の喘息なんかよりも、大変な。

「だから、数十年は暇で暇で」

「え？」

今、レミリアはなんて言った？

数十年、今確かにそう聞こえた。

「レ、レミリア、貴女何歳？」

「うーん、三百は越えてると思うわ」

その発言に私は更に驚いた。

私たち魔女は百年以上生きると言うが、この少女は既に三百年生きているのだ。

……吸血鬼は不老なのかしら？

いや、だったらスカーレットが白髪混じりの髪の毛をしているわけがない。

というか、伯爵は何年生きてるのよ。

「吸血鬼は半永久的に生きるのよ」

半……永久。

背丈も、体つきも同じくらいこの少女は私よりも何百年もの経験をしている。

「ま、心臓に杭を打てば死んじゃうと思うけどね」

と、レミリアは冗談混じりにそう言った。

そう吸血鬼、いわばバンパイアはニンニクが苦手な事や十字架が苦手なんて事はない。

現に、伯爵の食事にはニンニクが使われていたりするし、

カッコつけて十字架のアクセサリーをしてると他の魔女から聞いた。

まあ、でも唯一光が苦手みただけ。それ以外に特に吸血鬼には弱点は無い。

最強の種族、それが吸血鬼。

「ねえ、パチユリー」

レミリアが顔を覗き込む。

「この館を探検してみない？」

「……へ？」

第一声は私の反射的に出た驚きの声。

ただでさえ、この館の事は全部知らないし、ましてやこの館がどれだけ広いのか知らないのだ。

「さ、いっ」

私の右手を握り、にいと笑いながらレミリアは私を引っ張った。

「あ」

持っていた本が、手からすり抜け、落ちた。

そんなことをお構い無しに引っ張り、それに合わせて私は足を踏み出した。

振り向いたら、本が、ソファで眠っていた。

まるで、誰かがその眠りを冷ましてくれるのを待ってるかのように。

振り向き、本に一瞥し、

レミリアに顔を向ける。

「ねえ、何処に連れていってくれるのかしら？」

レミリアは笑いながら言った。

「何処にいこうかしら……。そういや、貴女は本が好きなのよね？」

「え？……まあそうだけど」

「ふふ、なら面白い所に連れてってあげる」

「わあっ！？ ちょっと待って……」

走り出すレミリアを制止する。

私が喘息持ちだと言うことを告げたら納得したのか、仕方ないわねと言って歩を緩めた。

「……ありがとう」

私は息切れしながらもかとうじて言った。

恥ずかしいのかレミリアはそんなのをお構い無しに深紅の絨毯が敷かれた廊下を歩く。

通りかかる魔法使いや魔女、色んな人達が、声をかけた。

「お嬢様と……」

「パチュリーよ、私の友達」

「ははっ、二人とも可愛らしいですな。これから散歩ですか？」

「まあそんなところよ」

「お気をつけて、お嬢様、そしてお友達のパチュリーさん」

執事、というのだろうか、

館の仕事（主に家事だが）をしてる男の人が丁寧な言葉で話しかけてきた。

談笑し、さ、いくわよと言われ、また歩き出す。

物心ついたときには、本が好きで、一日中読んでた事もあった。

そんな訳で、久しぶりの部屋の外に、しかも話しかけられるなんて予想外の出来事で、

適当に返せばよかったのに。とレミリアは言った。

「でも、皆優しいのね」

私はレミリアに言った。そう、皆笑顔なのだ。
レミリアはクスツと笑った。

「この館で、一番やさしいやつがいるわよ」

私はきよんとし、誰?と訊いた。

「やさしい、じゃないわね。……お人好しって言うのかしら」

その答を聞く前に、レミリアはすつと立ち止まった。

「じじよ」

目の前には大きな扉。

扉には装飾が施されており、普通の部屋じゃないというのが一目で分かる。

「この先は……?」

「いいからいいから」

そう言うと、レミリアは私の手をぐいと引っ張り、扉に手を付ける。
ちらりと横を見ると微笑んでるレミリアがいた。

片手では扉が開かないので、両手で扉を押す。

ぎい、という木製特有の軋む音が聞こえ、目の前の光景に目を見張る。

「」

「

そこは図書館だった。
至るところに本、本という書物がところせましにあった。
この館にこんな部屋があるとは思ってもよらなかった。
魔法使いや魔女は本を読み、なにか魔法の勉強してるのだろうか、
時折魔法の詠唱のようなものが聞こえる。

「どう？この紅魔館で一番本がある部屋よ」
「凄いわ……、ここの本は私も読んでいいのかしら？」
「大人の迷惑にならなきゃいいってさ。……あ、あと大声は出さないようにだつて」

その声を聞くと、すぐ近くの本棚に歩み寄る。
それに付いていくレミリア。

凄い、楽しい、幸せだ

そして私は本を手にとった。
ふふ、分厚い本だから読むのも時間がかかるだろう。
退屈そうなレミリアには悪いわね。
そんな事を考えると、自然に笑みが溢れてきた。
夢みたいで。

それから数日が経った。

「あー、パチユリーに図書館の事教えなければ良かったわ」
「あら私が図書館に居ればレミリアは私を探す手間が省けるじゃない」
「まあそりゃそうんだけどさ……」

図書館のテーブルの向かいにはレミリアが座っていた。肘をついていかにもつまんなさそうにこちらを見る。そんな私は視線を感じながらも本を読んでいた。

「レミリアも何か読んでみたら？」

「……絵本なら」

「……………」

「そ、そんな目で見ないでよ！」

「たまには嫌悪せず読んでみたら？」

「気が向いたら、ね」

そう言つてレミリアはテーブルに突っ伏して寝てしまった。

それもそうだが、これは最近気付いたことなのだが、どうもこの図書館は本を痛めない為に本に対して丁度いい温度調節がなされているらしい。

しかもその温度調節も魔法でやってるらしい。

私は別に魔法を使って何かしたいわけでもない。

ただ、知識を得たいという欲求。それが、私を突き動かした。

誰かが言った。

不完全なモノが完全なモノを欲する欲求。

イデアの世界に憧れる人間。

私はそんな哲学で自身という存在を定めたくない。

今、こうして本を読み、

レミリアという友達がいる。

それで十分。

「……………どうしたの？」

「ふふ、私は幸せね」

「何よいきなり、パチユリーらしくないわ」

「そうかしら」

「そうよ」

少なくとも、私は幸せだ。

ツェペシュの傳き幻想 第二章（前書き）

「久しぶりね、伯爵」

「はっはっは、久しぶりだな」

窓からは満月の光が射し込み、既に空は漆黒の闇に支配されていた。

「で、今日は何の用かな？」

伯爵が後ろを振り向き、声の主。

傘をさし紫色の西洋風のドレスを着た女性がクスツと笑った。

「たまに顔を見たくなっただけよ」

「そうかそうか、ゆっくりしてってくれ」

「お言葉に甘えて」

二人はテーブルに向かいながら、椅子に座り、談笑にふけた。

「そうだ、ワインなんてどうだろうか？」

「ふふ、頂戴するわ」

白髪混じりの髪をかきあげ、両手を叩き、召し使いを呼ぶ。

「すまない、ワインを持ってきてくれるかね」

「はい、少々お待ち下さい」

その光景を見ていた金髪の女性は笑いながら言った。

「貴方は召し使いにも敬意を払うのね」

「ははっ、亡き妻にも言われたな」

「あらごめんなさい」

「いいんだ、覚悟してたことだしな」

一瞬、沈黙がその場を支配した。

部屋にノックの音が響き渡った時には、伯爵は、意気揚々と召し使いの元に向かった。

「貴方も大変ね」

女性はそんな伯爵の後ろ姿を見て呟いた。

「あら良い香り」

「何年も、何十年も寝かしたやつだからな」

ワインを注ぎ終わり、グラスを持ち、

「久しぶりの友に乾杯だ」

「乾杯」

ガラスとガラスを合わせた時に鳴る、特有の音が鳴り響き、

少量のワインを口につけると、伯爵は笑った。

「それにしても、変わってないな」

「それはどう意味で、かしら？」

「勿論、誉め言葉だ」

そして、また伯爵は左手でグラスを持ち、ワインを口につけた。

「ねえ」

「ん、どうしたんだ？」

女性は先程の顔と一変、

真剣な面持ちでこちらを見ていた。

まさか、という驚きと嘘だ、という否定が入り交じり、それが声になった。

「ねえ貴方、まさか右手が動かないの……？」

伯爵は、また、笑った。

「流石、東の大妖怪様だ」

動かない右手と左手で器用に拍手をした。

ぺちぺちと乾いた音のそれは、拍手の音では無かった。

「そつだ、私はこうやって拍手する事も出来ない。

……ましてや魔法使いや魔女が私を喜ばそうとして芸をやっても、私はそれに応えることも、出来ない」

でも、と女性は思った。

そもそも吸血鬼というものは、寿命で死ぬことなんて無い筈だ。伯爵の右手は、動かなくなったのか、それとも、動かなくなっってしまったのか。

「それって」

「寿命が近いのかもしれないな」

女性が言うのを遮るように、伯爵は静かに、言った。

「……でも貴方は吸血鬼よ？ 寿命はまだまだある筈よ」

「そうかもしれないな」

そう言うと伯爵はワインが入ったグラスを持ち、近くの月が見える窓際に立ち、星空を眺めた。

「今日貴女が来たのは”運命”かもしれないな」

「運命……ねえ」

女性がワインを一口飲むとそう呟いた。いつもより声のトーンを落としたその台詞は何か落胆したような物言いだっただけ。

「私の命はもう間もなく潰えるだろう」

「……………」

伯爵は未だ、夜空を仰ぎ見ていた。そして、続けた。

「私が死ぬと分かれば、教会はこの館に火を放つだろう。…………でもそれだけは避けたい。そこでだ」

「まさか、」

伯爵は少し躊躇った後、重い口を開いた。

その”頼み”に女性は微かに、頷くと伯爵はワインを飲み干した。

「さて、今日は半月のようだ。そういえばそっちはどうなんだ？」

「……………」

声のトーンが戻り、まるでさっきと別人のように、懐かしんだような声で伯爵は訊いた。

その問いに一瞬首を傾げる女性、すかさず伯爵は

「本で読んだんだが、あんたは人間が好きなのか？」

「……………そんなの出鱈目よ」

「ははは、ジョークだジョーク。そりゃそうだ、貴女は人間を貪るようなレディでもないしな」

「真顔で言うから冗談なんて分からないわ」

「くくくつ、冗談だからこそあらゆる方法で笑わせてみたいのだよ」

「あら笑わせる事でも勉強したのかしら？」

「全然」

伯爵が肩をすくめ、両手を挙げた。

「貴方と会うのは今日で最後かもしれないからな、……………今夜は楽しもう。永い夜に、なりそうだ」

ツェペシユの傳き幻想 第二章

「パチユリーおはよー」

「おはよー……って、もう深夜よ？」

「吸血鬼は夜が朝なのよ」

あれから私は図書館の本を読み、ほとんどの本を読んできました。俗に言う”閲覧可能”な本を。

それでも本を読むことによって、私はある程度の魔法を修得していた。

例えば火を起こしたり、風を吹かせたり。神の力と言われた四大元素を操る程度には至った。

やはり、四大元素は神の力なんてものじゃなかったけど、それでも、やはり人の目には神秘に写るし、科学では証明出来ないような力。

ましてや神の力と謳ってる教会は魔女という存在はやはり驚異であり忌むべき存在なのだと感じた。

「教会？この館は大丈夫よ」

前に不安に思い、レミアに訊いたら、そう返された。

確かに、魔女や魔法使いがたくさんいるのに教会の手がかからないと言っことは、

教会がこの館の存在に気付いてないか、或いは強大過ぎて手に負えない、という事だろう。

そうパチユリーは考える。

「ねえパチユリー」

「ん」

「パチユリーってなんか呼びづらい」

「そんな事言われても」

「パチエなんてどうかしら？」

「……………」

「うっ、どうせ私にはネーミングセンスなんてないもん」

「仕方ないわね、貴女だけよ」

「…………… 貴女だけ？」

「親友である貴女だけ、パチエと呼ぶことを許してあげる」

「やったー、じゃあ私のあだ名も考えて！」

「そうね……………」

全く、…………… 気に入ったなんて言えないじゃない。

「レミィ、なんてどうかしら？」

「パチエってまさかネーミングセンス無い……………？」

「……………」

そこまでストレートに言われるとショックを隠しきれない。

まあ、レミィってのはパツと思いついた名前だし仕方ないわと、正当化して、ショックを和らげる。

「でもレミィってのもいいかもしれないわね」

あれから少し経ち、本を読み始めた頃合いに不意にレミリアがそう言った。

遅いわよ、と内心突っ込みたかった。

「パチエ」

「ん」
「ふふ、呼んでみただけ」

*

「魔女……狩り……？」
「ああ、教会はどうやら私達を狙っているらしい。肥大化した魔術軍団として恐れられていたみたいだが、それでも私達を消そうと躍起になっている」

レミリアが怖くないように伯爵は手を握った。
温かくて大きなその手は力強く、優しい、手だった。

「私達……、殺されちゃうの？」
「いや違うよレミリア、私達は死なない。この館には地下室があるだろう？　そこで暮らせば大丈夫だ」

レミリアはもう頷く事しか出来なかった。

最近、館の外には怪しげな人間が徘徊するようになった。
人間の服装からして教会の者だ、と見抜き伯爵や賢者達での会議が始まった。

結論としては、伯爵が言った武力解決ではなく犠牲の少ない和平的解決の案が採択された。

その案は館の住人を地下の大きな空間に一時期まで住むという事だ。

「火？そんなもので私達はしなないさ」

教会は館に火をつけるだろう。

だが火をつける事で地下への経路を消し、存在を隠せるという案に賢者達は顔をしかめた。

何故なら、この館は、この場所は紛れもない”故郷”だったからだ。

「館よりも、皆が生きてくれた方が私は嬉しい」

その一言は重く、賢者達は伯爵の案に賛同した。

あくまでも犠牲の無い手段で、今も会議が毎日開かれている。

「ずっと地下に住まなきゃならないの……？」

「いやずっとではない、来るべき時までの辛抱だ」

来るべき日、

そう伯爵は館の皆に言った。

それが何の日なのか、何時やってくるのかは言わずに。

皆がかつてない館の危機に対して不安を抱くなか、伯爵だけはいつもの伯爵だった。

「パチユリーと言ったかな？レミリアと仲良くしてやってくれ」

「……あ、はい」

娘を案ずる父の顔はとても穏やかで、

もしかしたら、このまま何も起こらないんじゃないかなとか、

そう、思ってた

ツェペシュの傳き幻想 第三章（前書き）

『しめんなさいね、伯爵』

ツェペシュの傳き幻想 第三章

あれから数週間後の満月の日のこと。

「ねえ、そういえば貴女に妹がいるのよね？」

今考えれば時期を考えるべきだった。

でも私は好奇心からか、レミリアに聞いてしまった。

「そういえばパチエは会ったことないんだっけか」

そうかそうか、と妙に納得しながらレミリアは口元を釣り上げ、口元に手をあてにいと笑いながら、

「んじゃ今から会いにいきましょう」

窓から溢れる満月の光はとても、優しかった。

「そういえば貴女の妹さんはどこにいるの？この館ならほとんどの部屋に行ったことあるのだけど」

何十年も館に居り、この館のほとんどの部屋にはもう出入りしたことがある。

それにレミリアの妹に会ったなんて話も聞いたことない。

ましてや、存在していないとさえ言ってる者もいるくらいだ。

「まあまあ、何も言わずに私についてきなさい」

レミリアはそう言いながら朱色の絨毯をすたすたと歩き、

「まあでも、眠ってると思うしホントに会うだけかもね」

「……え？」

驚く私を見て、彼女は不安にさせないように笑った。

「何百年も眠りから覚めないの」

笑えない。

「……驚いた、貴女の妹は地下にいたのね」

そうよ、とレミリアは言って地下への階段に足を伸ばした。

地下に生活物資を置くために大衆に開放されてるせいか、階段を降りる私達を誰も咎めはしなかった。

……それもそうだ、この幼いようなこの少女はこの館の主の娘なのだから。

そして会いに行くは、彼女の妹。

階段を降りるとそこは大きな廊下が広がっていた。

赤い絨毯が広がり、ほのかに私達を照らすシャンデリアがあった。

私はてつきり石畳のような冷えたものばかりと思っていた。

「このシャンデリア、火の魔法かしら？」

「んー、私はいまいち分からないけど多分そうよ」

眩しくなく、暗くなく、揺らぎの無いシャンデリアについているキヤンドルの火。

……この館の賢者達の魔法の力は計り知れない。

「でもパチエもこれぐらい出来るんじゃない？」

「まあね」

「まあね、って大層な自信だねえ」

「貴女が寝てる間に私は実験を何度も繰り返したんだから」

「だって図書館は退屈なんだもの」

すたすたと歩く二人。

やがて一番奥、金のドアノブがついたドアに辿り着く。

「ま、私は何度も見てるから今さら、って感じなんだけどね」

そう言つて、吸血鬼は微かに笑い、ドアノブに手をかけた。

「」

レミリアがドアを開けると、そこには白いベッドと少女が一人。

私はおもむろにその白いベッドに眠っている少女に近づいた。

綺麗な金色の髪、白く透き通った肌に、幼いながら整った顔立ち。

まるで西洋人形かと思わせるそれは、小さく息をしており、まさしく”眠って”いるのだった。

「綺麗」

「でも綺麗だけじゃないのよ」

レミリアがすつと、が彼女の腕の近くにあるものを指差す。

「……っ」

指の先には、レミリアと同じ彼女の翼があつたのだろう、が、しかしそれは翼と言えるようなものじゃなかった。彼女の翼は朽ち、植物の茎のようにだらりとして吸血鬼としての象徴は既に消失していた。

「もしかしたら、彼女は目を覚まさずに」

レミリアが口を止める。ハツとし俯く。

私はそんなレミリアを初めて見た、誰にもそれを見せたことがないのだろうか、いやそうに違いない。

「吸血鬼は寿命が長いよね？」

「……うん」

「なら寿命によるものではないのね」

ふと、彼女の身体にそつと触れる。

……冷たくも、温かくも無かった。

そして、

「魔力が感じられない……」

「どづいつこと？」

「彼女には生きるために必要な魔力が枯渇してるのよ、……ねえレミイ彼女を他の魔法使いに触れさせたことはある？」

「……ないわ、お父様はフランを大切にしてたもの」

ならば、魔力が枯渇してるという事実を知らず、野放しにしてきたのだろうか。

魔力は無くなれば吸血鬼といえど直に身体も腐敗していくだろう。ということとは、魔力さえ十分に戻れば彼女は彼女は目覚めるのかしら？

それにはどうすればいい、どんな手段で、どのくらいの魔力を必要とするのか……。

ふと、気づいた事がある。

魔法使いは魔力を高めるために魔法陣のような媒体を使うことがある、それを応用すれば。

「レミイ、もしかしたら」

目を覚ませる事が出来るかもしれない。

「それは……、本当？」

「……多分ね」

レミリアが私の袖を掴んで、言った。

「お願い」

弱った、あくまでも推測であってそれが正しく、目を覚まさせる保証なんて無いのだ。

……でも、

「分かったわ」

彼女の期待は裏切れない。

いや違う、きつと応えたいんだと思う。

そう考えたら、不可能なんて無いと思えてきた。

それから、時間さえ流れてるのか分からないくらい本を読み耽った。

それくらい片っ端から手がかりになるものはないかと必死だった。

レミリアに関しては、あれから魔女や魔法使いと手伝って館の家具や生活用品を地下に持っていった。

館は随分と片付き、以前のような輝きは消え、がらんとした光景が広がっていた。

それに続き、この図書館も段々と本が片付けられてきた。

「これも違うわね……」

魔法といったって様々だ。

大きな絨毯から一本の違う色の糸を見つけるようなものだ。

そんな本を読み続ける生活も数週間が経った。

*

「……これって」

捲っていた手を止め、もう一度表紙を見る。

間違いない。これはちゃんとした魔法の本。ファンタジー等ではない、ましてや紛い物でもなさそうだ。

それを確認し、再びパチュリーはページを捲った。

七つの系統、

七つの属性、

七つの曜日、

魔法の根底にある、理が、そこには在った。

かつての錬金術士や魔法使いが夢見た、幻想の秘。

賢者の石に関する本を私は見つけた。

しかし、何故この本の存在に誰も気付かなかったのだろうか。

一通り読み終わり、息を全部吐き出すようにため息をした。あとは解らないところを読み解くだけだ。

珍しい、貴重な本というのは表紙等は目立つような派手な装飾ではなく、簡素な作りである事が多い。

タイトルも賢者の石じゃなくて「石」と表記されてるあたり、誰もこの本を読んでいないのだろうと思う。

ふと周りを見たら誰もいなかった。

ぼんやりと窓の外からは月の光が漂っていた。

パチュリーはそれを目を細めて見つめ微かに深呼吸した後、大きな分厚い本を手に取り、暗く、静かな図書館を後にした。

図書館から出ると、真っ暗な闇が現れた。

この時間ならレミアアや伯爵が普段起きる頃合いだから自然と召使い等がこの廊下を通ったりしている。

それなのに、物音一つしない。

考えても仕方ないという結論に至り、きっと地下にいけば皆いるだろうと思いい足を踏み出す、その時だった。

どっか、遠くで何か音が立てた。

金属の音のようなそれは、館の門を開けるときに聴こえる

「……嘘」

今、考えた結論を確かめるべく、咄嗟に図書館に入り月光射す窓に近寄る。

もしもの場合に備え、机に置いてある賢者の石の本を手に抱え、窓を覗いた。

「」

啞然だった。

”来る筈の無いその時”がやってきた。

門の前に数十の鎧を纏った人間、騎士と呼ばれる武装集団が松明を片手に携えていた。

さっきの音はやはり門が開いた音のようだ、体格の良い人間が一人、門を開けて館の様子を調べていた。

その出来事、事実には、胸の鼓動が高鳴り、肩が震えてきた。

「あれはなに？教会・・・？ 怖い、怖いわ……。早く皆の元に帰らないと……」

*

「全く、パチエは何処にいるのかしら？」

教会の騎士達が現れたと情報が入り、館の住人は地下の居間に集まり、息を潜めていた。

住人達は驚きながらも緊張した面持ちは無い。

伯爵が「一夜で終わるだろう」と言ったからだ。……それでも館の賢者達は、あらゆる危機に備え、会議を始めていた。

私は大きな居間を出て、薄暗くなった地下の廊下に出る。魔力を最小限に抑えたシャンデリアのキャンドルの火は風に靡かれ今にも消えそうだった。

地下にはまだいくつかの部屋がある。

本を蔵書した部屋や食料を確保するための部屋、あとは妹の為の部屋と父上の部屋。

他にも住人が生活できるような部屋が数多にある。地下で暮らせと

言われても可能な作りなのであった。

背伸びをし、ひんやりとした地下特有の空気を感じながら、軽い足取りで父上の部屋に向かう。

足音が響き、無意識に足音のしないような歩き方になる。それもその筈で、現実味は無いが教会の魔の手がすぐそこまで来ているのだ。地上から聞こえなくても、無意識にそうしてしまう。

扉をノックし、金でコーティングされたドアノブに手をかける。

「お父様」

返事がしない。

「お父様？」

もう一度、この部屋の主を呼ぶ。

が、その呼び掛けに答える者はいなかった。

レミリアの視界には僅かに温もりがある天蓋付きのベッドとワインのグラスだけが残されていた。

これを意味するものは……？

レミリアは顎に手を添えて考えた。

大きな居間にもいなかった、ならば他の部屋にいるのだろうか。父上が行きそうな場所といえば……。

妹の部屋、か

レミリアは納得し、なんだ心配させないでよと思いつながら背伸びをして、父の部屋の扉を閉めて妹の部屋に向かった。

……レミリアは気付いていなかった。

グラスにはかつてワインが注がれていたことに。

そして、その近くに手紙が置かれていたことに。

*

こんな事態に部屋にいないから不安に思っちゃったじゃない。

こんな時に妹の部屋にいくなんてやめてほしいわ。

会ったらはつきり言ってあげなきゃね。

地下の数多の部屋の奥に存在する妹の部屋。

出入りがほとんど無い、この場所にはやはりキャンドルの火は灯つておらず、暗闇だけが支配していた。

レミリアは目を細め、闇に慣れた目で妹の部屋のドアノブを確認し、握った。

その時だった。

「貴女に与えられた役割は一体何なのかしらね」

「!? 誰？」

咄嗟、後ろを振り返り、紅い槍を作り出す。それまでにかかった時間は既に秒数ではなくコンマの世界。

だがしかし、その声の主はどこにも見当たらなかった。

……艶のある女性の声だった。

レミリアは見渡した、どこにも人の影は無い。ならば幻聴かしら？と首をひねる。

……ただ、その幻聴が頭の中で何度も復唱された。

……全く、私もなめられたものだ。これでも高貴な吸血鬼だ。そこからへんの亜人とは全然違う。

レミリアはどこか憤りを感じながら、ドアに振り返り、ドアノブを握った。

父の部屋と同じドアの装飾であしらわれた妹の部屋。

「……………」

そこにも父の姿は無かった。

いや冗談はよしてくれ、ましてやあの父だ。ジョークと言って私を驚かすに違いない。

ほら、きっと、私の後ろで驚かそうとしてるんだわ。

「いない……、よね」

天盖付きのベッドに、妹だけが平気な顔をして目蓋を閉じていた。それをぼーっと見つめながら、頭の中を整理する。私は居間に父の姿が無いからここにやってきたのだ。父の部屋にもいなかったし、廊下では誰ともすれ違わなかった。

「……違う」

もし、あの声が本物ならば？

まず私にあの口調で話すような”輩”はこの館にはいない。だった
ら

声の主は侵入者であり、この地下にはいてはならない存在。
いや地下があるという事がバレたという事か？

それならば非常にまずい、教会の奴等に告げ口、或いは館の住人を殺しにかかるだろう。

だったら、父はどこ？

何を、しているの？

一人、自分に対して悪態を付き、妹の部屋から身を翻し皆がいる部屋へと走った。

廊下には誰もおらず、キャンドルだけが自己主張するように火をゆらゆら灯していた。

居間に入ると、一同が私を見た。

「……ここに全員いるかしら？」

静まりかえった部屋にレミリアの声が響き渡る。

低く威厳のある声に、住人達は互いに顔を見合せ全員いるかどうか確認する。

「魔女が一人いません……」

返ってきたのは予想外の答えだった。

その、魔女というワードに心臓が高鳴っていく。

レミリアは辺りを注意深く見渡し、誰がいないのか見極める。

そして、もしかしてという不安が、紛れもない確信へと変わった。

パチエがない

刹那、レミリアは居間から飛び出した。
一陣の風が、吹いた。

「お待ちください、お嬢様！」

地上への扉に手をかける瞬間、後ろから声がした。

「……なに？」

振り返らず、その声の主に耳を傾ける。

その声は年老いた賢者だった。普段は大声など出さないのだろう、叫んだその声は多少裏返っていた。

「夜は危険です」

「私はね、」

賢者を制すように、”扉に向かって”言い放った。

「友を見殺しに出来るような冷静な奴じゃないの」

「ですが」

「他言に無用よ、貴方達はここにいなさい」

そして、レミリアは扉を開いた。

向かうべき場所は、ただ一つ。

「待っててね、パチエ」

ツェペシュの傳き幻想 第四章（前書き）

全く、貴方は優しすぎるのよ

馬鹿みたい。

「……そろそろ、かしら」

ツェペシュの傳き幻想 第四章

「何を躊躇っている？」

伯爵がため息混じりに呟いた。

門が開けはなたれた音を聴いて既に数分が経っていた。

ああ、突撃の準備をしているのか。そう考え、ふと乾いた笑みを溢す。

緊張が感じられないな、

まあそんなものなのだろう

全く、私はどうかしているのかもしれない。

でも、それが”私”なんだろうな。

館の入り口、玄関ともいえるエントランスで伯爵はまた笑った。自嘲気味に笑ったそれは、他人からみたら寂しい顔をしていた。

足音が扉越しに聞こえた。

さあ、来なさい

早く、その扉を、開けておくれ。

そして、扉が開け放たれた。

*

教会の騎士達が乱暴に扉を開け放った、その向こうには一人の男性がいた。

白髪混じりの髪の毛に、使い古されたような黒のロングコート。

正装した、この館の主が騎士達の目の前に、いた。

「こんばんは、こんな館に何かご用でも？」

騎士達は驚愕した。

あの伯爵は怒気を込めて追い返すか、もしくは力で解決するんじゃないかと思ったからだ。

だがその反対に、この館の主は丁寧にお辞儀をし寂しそうな声で客をもてなした。

「神の名の下に、貴方を、ツェペシユの末裔を処刑させてもらう」

騎士達の中から一人、体格のいい男が出てきて、サーベルの剣先を伯爵に向けながら言い放った。

その剣先は、微かに震えていた。

それを見、伯爵は

「一つだけ、あんなたちに頼みたいことがある。」
「事によるが、聞いてやろう」

予期せぬ事に、後ろの騎士達が微かにざわめく。

「永年、この大きい館で”独り”で暮らしていたんだ。

最期もこの館とともに死にたい。……君達に手は出さない、その代わり、この館を荒らさないでくれ。……頼む」

最後に伯爵はまた深くお辞儀をした。

敬意なんてものは、既に騎士達には無かった。けれど、異形の者であれ、その態度に目を見張るものがあつた。

「ふむ、これ以上犠牲が無いのは良いことだ。その頼み、考えてやろう。悪魔よ」

そして、一人の騎士がサーベルで心臓を貫いた。

伯爵は抵抗、しなかった。

*

「……やっぱりここにいたのね」

「レミイ。怖かった…怖かった……」

館の図書館、いや元図書館にパチュリーはいた。
震えるパチュリーをぎゅっと抱きしめる。

「教会の騎士達が外にいるみたいなの……」

「そう……」

ついに来てしまったか。

レミリアはパチュリーを撫でる。

緊張をほぐすために。

「貴女が地下にいないから驚いたわ」

「……ごめん」

「でも安心した。捕まったんじゃないかって思って駆け出したのよ」

「レミイが？」

「ええ」

何の変哲も無い会話。

それでも、何故か可笑しくて、笑顔になってしまっただろうか。

「そつだ、ねえレミィ」

「ん」

「見つけたわ」

「何が？」

目を輝かせるパチュリー。

よく見るとパチュリーの手には一冊の本があった。

「……まさか」

「そのまさかよ、ううんそれは可能性でしかないんだけど。けど、見つけたわ、貴女の妹を目覚めさせる方法を」

二人は、やったと言わんばかりに微笑んだ。

「さつ、地下に帰りましょ。皆が待ってる」

レミリアが言ったその瞬間、大きな音が響き渡った。

きつと入り口が乱暴に開かれたからだろうと予想し、パチュリーの手を握る。

「あいつらに見つかったらおしまいね」

「分かってるわ」

意を決し、元図書館の扉を慎重に開ける。

変な物音は立ててはいけない。それでも足早にいかなくてはならない。

二人に緊張が走る。

二人で仲良く歩いたこの赤い廊下が、いまでは暗く冷えきった無機質な廊下だった。

今じゃシャンデリアに火は灯っておらず、少し色褪せた壁が、ここに私達二人しかいないことを際立たせていた。

しばらく歩くとエントランスの近くを通る廊下に出た。

緊張のせいか二人は無言だった。

ここを過ぎれば地下への道だ。

ふと、レミリアが足を止まる。

突然の出来事にパチュリーが戸惑う。

「話し声が聞こえる」

小さく、そう言うと、レミリアはエントランスに繋がる廊下に少しだけ、顔を出した。

少しすると、レミリアは

「パチエ、先に行つてて」

「レミイは？」

「少しここにいるわ」

「危険だわ」

「大丈夫、すぐ帰ってくる」

「……絶対ね」

「分かつてるわ」

そう言うとパチュリーは地下へ向かって行った。

「それにしても、」

レミリアは見てしまったのだ。

父と騎士達が話し合ってるのを。

「お父様は何をする気………？」

レミリアはもう一度、エントランスを覗きこんだ。

レミリアは隠れながら耳を傾けた。

「一つだけ、あんたたちに頼みたいことがある。」

父の声が、聞こえた。

探しても無駄だった父は地上にいたのだ。

いや、それにしても何故ここにいるんだろうか。

頼みたいことって、何？

騎士がサーベルを向けながら、頷いたのが見えた。

父なら、あのサーベル等一瞬で粉々に出来る筈なのに。

何で……？

手に力が入り、壁に爪が食い込む。
人間等の言いなりになるの？

父が、重い口を開いた。

「永年、この大きい館で”独り”で暮らしていたんだ。

最期もこの館とともに死にたい。……君達に手は出さない、その
代わり、この館を荒らさないでくれ。……頼む」

独り？

だから、荒さないでくれ……？

「……………ッ」

父の意図が読めた時には、

「残念だったな悪魔、その頼みはやはり応じられんな」

最悪の形で、結末を迎えた。

何か音が立てて崩れた。

頭はもう、真っ白だった。

「じわああああああああ！！」

そんな事よりも、

『はっはっは、友達が出来たのかそれは良かった』

私は、

『その友達を大切にするんだぞ』

私は
!!!

二階からシャンデリアに飛び乗り、落下と共に、叫んだ。

「
私は、ツエペシュの末裔、レミリア・スカーレット
……貴方達を串刺しにしてあげる」

「やはりな、思った通りだ。悪魔の言うことなんて聞くもんじゃない。」

ツエペシュの幼き末裔。そして悪魔の少女よ、この館は既に包囲されている。我等を全滅したところで

「五月蠅い」

頭が物事を深く考えられなくなる。

右手には紅い槍。私の魔力が具現化したエネルギーの結晶。

レミリアは10メートル以上の間合いを一瞬でつめる。

「ひっ
」

剣を降り下ろす動作がスローモーションに見える。

遅い。

「お父様の仇!!!」

零距离の槍を心臓めがけて貫く。

魔力で精製された槍は甲冑を破り、何人もの騎士を貫いた。

叫ぶ間もなく、絶命する。

「突撃い！！悪魔を殲滅するのだ！！！」

その掛け声に包囲していた騎士達が窓ガラスを破り侵入してきた。

レミアは近距離では槍よりも己の爪の方が動きやすいと感じて正面玄関からやってくる騎士達を襲いかかった。

幾重の鎧を纏いても、鎧をも砕く吸血鬼の力にはただの紙でしか無かった。

幸いな事か、銀が使われている鎧は無かった。

「仇……仇……」

人間なぞに、殲滅などさせはしない……！

ましてやここは父が愛した家だ……！

……絶対に、許さないのだから。

*

パチュリーが地下に入った後、地上で爆音が轟いた。

きつと騎士達が突入したのだろう。

暗く、冷えきった廊下を歩きながら、考える。

あの時、あの場所で、レミアを踏み止めた何かがあった筈。

騎士がいたくらいで、あんな場所にいないだろう。

……考えても仕方ないか。
じきにレミリアは戻ってくる筈だ。

今は、レミィの妹を目覚めさせなければ。
なにも、こんな事態で、と思うが。
こんな事態だから、やる。と自分を正当化し、深呼吸する。

『少なくとも、貴女は何のためにやるのかしら』

後ろから声がした。

艶やかな大人の女性のような声。

少なくともこの館の住人ではないだろう。

「誰」

振り返らずに、そう呟く。

振り返るといふ隙を与えてしまっではいけない。

そう感じたパチュリーは小声で詠唱しルーンを刻み、相手の出方を待つ。

『でも、貴女の判断は間違っちゃいない』

その声がした途端、パチユリーは咄嗟に振り返り風の魔法を繰り出す。

「……」

そこには誰もおらず、

絨毯だけが風の魔法によって無惨に切り刻まれていた。

今のは一体……？

声がした所を見つめていたが何も変化は無かった。

幻聴だろうか？いやそれは無い。はっきりと聞こえたから。ならば侵入者？教会か？いやそれ以外？

だがしかし、私が無防備な状態なのに何も無いということはそういうことなのだろう。

「それでいい……、か」

振り返り、火が消えて暗くなった廊下を進んでいく。

レミイは地下に戻ったかしら？

騎士達は伯爵の言うように館を燃やして帰ったかしら？

まあそんな早く終わるわけないのだけれど、

でも

今日、が終われば。

この夜が終われば、

またいつもの日常に戻るのだろう。

そして私は、レミイの妹の部屋に入った。
妹を、目覚めさせる為に。

*

「……………」

夜風が気持ちいい。

レミリアは騎士達の死体の山を見てため息をつく。
” エントランス ” にやってきた者達は全て殺した。
倒れてる父を、守るように。

それがこの有り様だ。

薄紅色のドレスは返り血に染まり、口の中は鉄の味で吐き気がした。

しかし、怪我一つしないだけ良かったといえよう。何十もの精錬された騎士達と傷一つなく消したのだ。血塗れの手をドレスで拭い、倒れてる父を抱き上げる。

「……………レ……………ミア？」

微かな声で父は言葉を紡ぐ。

まだ生きてる！レミアは安堵して伯爵に駆け寄る。

「お父様、大丈夫？」

「……………なあに……………、ひと……………突きじゃ……………やられない……………よ……………、レミアは……………大丈夫……………か？……………すまない……………、私の……………父さんの……………せい、だ」

肩が震えていた、レミアは涙をこらえて父のそれを否定する。

「父上のせいじゃないわ、……………父上は、悪くない」

「……………レミア」

「なあに？」

「私はもう……………、長く、ない。最後に、……………みんなの顔が……………見て、みたい」

「……………うん、分かった」

レミアは深く、頷いた。

……………最後、というワードがレミアの胸に突き刺さった。

*

「……すまないな」

レミリアは父の肩を支え、歩いた。

私は父の顔を見ずにただ前だけを見ていた。

「……………」

だって、騎士達はまだいるのだから。

父を守らなきゃ、いけない。

気配を感じるに、数人どころではなかった。

何十もの騎士がこの館にいるだろう。

私達は誰にも見つからずに、地下に入らなければいけない。

騎士に見つかって地下がバレてはいけないのだ、応援を呼ばれてしまつてはいけないのだ。

「……………ごめんな」

何度目の言葉、だろうか。

けれど私は、仕方無いわと言って慰めるのだった。

そんな言葉、父には相応しくないのに

それに、父を騙したのはあの人間達だ。
父は悪い事などしていない。

それに

「……地下に逃げさせたのはそういうことだったのね」

あの交換条件を聞いてしまった。

父は優しいのだ。それにお人好しなのだ。

だから、血を流さない父なりの最善の手を選んだ。
けれどそれは人間の裏切りになって潰えた。

「……ああ、けど、それも駄目、だった」

小さな声でそう呟いた父はどこか寂し気だった。

地下への隠し扉は見つかった形跡は無かった。

赤絨毯を捲らないとその扉は無いからだ。

……ともあれここまで来て見つからなかったのは奇跡といえよう。

私は隠し扉に手をかけて厚い扉を持ち上げた。

一層、冷たい風が頬を掠める。

無言でレミリアと伯爵は扉の向こうの階段へと足をかけた。

伯爵はというと、刺されたのにも関わらず多少よろめたりするが、
自力で足で立てるようになっていた。

地下に入り、地上への扉を閉じる。

微かに聴こえる住人達の話し声が、私達だけじゃないということ
再確認させた。

「もう少しよ、お父様」

長い廊下を、歩き始めた。

*

妹の部屋まで数メートルと差し掛かった頃、後ろで叫ぶ声がした。

「その怪我は一体……？」

その声二人は後ろを振り返った。

「案ずるな、……この通り、生きてるよ」

後ろには、館の住人達全員がいた。

魔法使いや魔女、使用人が伯爵とレミリアを見守っていた。

その住人達の温かさに二人は微かに微笑み、

「久々に全員が揃った」

伯爵は皆一人一人を見回し、そして笑った。

「君達が不安な顔を見ると私まで気分が優れなくなるじゃないか」

その一言に、皆の緊張が解れていく。

こんなにも人望が厚いのはやはり、この人柄なのだろうと伯爵の娘は思った。

この事態を、あのやり方で解決しようとした伯爵。

誰も、憎めない、そんな、

吸血鬼らしくない、吸血鬼なのだ。

「不安なら私についてくればいい、今から娘の部屋に行くところだ。どうだ、ついてくるか？」

皆、頷いて伯爵に寄り添い、笑顔が灯った。

こんな事態なのに、伯爵は刺されたのに、

こんなにも、温かいのはきつと

伯爵の、父の、力なんだろう。

*

「……パチエ」

眼前には幾重にも書き連ねたヘキサグラム。その中心に魔女、パチ

ユリーが本を片手にスペルを唱えていた。

「もしかしたら、目を覚ますかもしれないの」

レミアが伯爵含め後ろについてきた皆に対して言った。

伯爵は目を見開き、期待の眼差しで魔女を見つめる。

魔女は静止していた。

身動きせず、ただ淡々と韻を含んだそれは、とある魔法使いがまさか、と呟いた。

彼女は、あの賢者の石を、発動させようとしている。

幻の秘術が、今まさに発動されようとしている。

各々が息を飲み、その完成を待ちわびていた。

魅入っていた、その光景に。

魔力が渦巻き、肌がびりびりする。

七色の属性が渦巻き、この部屋を支配する。

その時まで、気付かなかった。

伯爵の血が流れていたことに、

「
」

地下を発見し、騎士達が私達の後ろで剣を構えていたことに。

後ろで、叫び声が聞こえた。

一瞬、文字通り皆が凍りついた。
何でここに奴等がいるのか、と
その疑問も吹き飛ばし、爆ぜた。

「教会の奴らが来たぞ!!」

「伯爵を守るんだ!!」

「我等も立ち向かうんだ!!」

胸が熱くなる。

「皆逃げて!!私」

レミリアが叫ぶ。

「大丈夫です、お嬢様に指一本たりとも触れさせはしません」

魔法使い達が魔法を放ち、部屋と廊下を越え、戦場と化した。
魔法は騎士を死に誘い、騎士の剣は詠唱中の魔法使いの心臓を貫く。
遠距離からの魔法で、少しだけこちら側から有利だった。

いやそれよりも

「やめなさい」

「やめてくれ!!」

父の怒号が響き渡る。

その怒号に魔法使い、騎士達までもが剣を降り下ろすのをやめた。

「もう、人が死ぬのはみたくないんだ」

「伯爵……」

「あの悪魔、何をいつているんだ！」

「これは罠だ、うるたえるな!!」

騎士達が我に返り剣を降り下ろす。

その刹那、

「扉を閉めるんだ!!」

剣は扉に突き刺さり、騎士達を廊下に閉じ込めた。

いや、閉じ込められたのは私達か。

それでも伯爵の判断は間違っていなかった。

絶妙なタイミングで魔法使いたちが魔法で扉を強化し、鉄の頑丈な扉と化した。

幸い、刺された魔法使い数名は致死には至らずなんとか一命をとりとめた。

そして、伯爵は悲しげに低い声でこう言った。

「皆に、言っておきたいことがある」

「伯爵……?」

伯爵は動かなくなった腕を擦りながら、

「私の腕は……もう動かないんだ。それ、にもう長くは、生きられない」

そう短く、言った。

レミリアは立ち尽くした。

腕が動かない、病気? そんな訳は無い筈だ。ならば、嫌だ、そんなことは、

それは住民達も同じ気持ちだった。まさか、嘘だ、という眩きが聞こえた。

「どうやら、私は夢を見すぎたのかもしれないな」

つまりは、段々体の機能が失い、最終的に死へと向かう。

そう、寿命が近いという事を意味する。

レミリアは戦慄した。

この事態が過ぎればなんでもないただ平和な日々がやってくると信じていたのだから。

優しい父が、死ぬなんて考えられなかった。

それこそ剣で刺されてもなお笑ってみせた父が死ぬはずがないのだ

と、どこかで信じていた。

「騎士達は、私が、止める」

終止符を打つために。

「お止めください、伯爵！」

住民達が叫んだ。

「私達は伯爵に命を救われたと言っても過言ではない、私達を捨ててくれたその日から伯爵に忠誠を誓ってます」

「だが、」

「だから今度は私達が、伯爵、貴方をお守りしなければいけない」
「……………っ」

住民達の意志は頑なだった。

皆、伯爵の恩を忘れていなかった。

拾ってくれた伯爵を、温かく笑顔で迎えた伯爵を、忘れてなど、なかった。

「……………ありがとう」

一言、伯爵は頭を下げて小さく呟いた。

「しかし……………」
「レミィ」

凜とした声が伯爵の声を掻き消し、部屋に響き渡った。
魔女はレミリアをちらりと見た。

「呪文が、完成したわ」

「賢者の石が　？」

「ええ、そうよ」

その賢者の石という単語にざわめきが起こった。

「　けど」

「　けど？」

パチュリーは軽くため息をつき、こう述べた。

「七曜の属性を司るこの石は、七つで賢者の石とされるの。」

彼女の朽ちた翼に使う石はバランスよくやらなきゃいけないわ、
七つ、つまりは3：4であってはいけないの。

魔力の流れが不安定になって元通り。ましてや一つ残して六つ使
つてしまえば賢者の石の力は衰えてしまい何れ力を持たなくなるわ。

……私の魔力じゃ賢者の石を出来るか出来ないかのレベル。1：
1に釣り合うようにもう一度やらないといけないのだけれど……」
「それで、娘は目を覚めさせられるのか？」

パチュリーは伯爵の方に向く、

伯爵の刺された傷を見て驚き、たじろぎ、何を言おうか迷ったが平

静を装いいつもと変わらぬ口調で

「ええ、きつと」

と言った。

伯爵は感動したように声を震わせ、ヘキサグラム上の彼女に応えた。

「じゃあ、私がやろう」と。

そして、誰にも止めらぬまま伯爵はヘキサグラムの上に乗った。

「私に続いて」

「ああ」

部屋の中に緊張が走る。

ヘキサグラムが光り、部屋に魔力が満ちる。

レミリアは二人の光景を眺めていた。

ふと気になり、扉の方に向き直る。

この部屋に行けなくなったとしても、そこで諦めるような奴等じゃない。それこそ、命知らずの狂人だ。

すつ、と扉の方に歩き、

扉の向こうに耳をすませ、

その時だった

僅かに聞こえた、「これで崩れるぞ！」という騎士の声。

扉に手を触れるその瞬間、

”扉の周りの壁が崩れ去った”

崩壊音に、パチュリーと伯爵以外の住民達が振り替える。

そして崩壊音が消える前に、向こうから幾千の矢が降ってきた。

最初に動いたのはなんと住民達だった。

「お嬢様、後ろに！」

主を守る為にレミアアを後ろへと腕を引き、抵抗する間もなく、また交戦が始まった。

「私がやる　！」

その叫びもむなしく、部屋に響き渡る騎士と住民達の怒号に掻き消された。

ただ、私は見ている事しか出来なかった。

ツェペシュの傳き幻想 第五章（前書き）

始まった。

紫のドレスを纏った金髪の女性が、無表情でその光景を”見て”いた。

そう、始まったのだ。

人間が勝つか、亜人が勝つか、

この時代の人間が変われば、”今”の人間は変わるのかしら。

……あらやだ、何を考えてるのかしら。

「でも……」

騎士と住民達を見て一言。

「どちらに転がっても、約束は守るわ。私の友人。」

ツェペシュの傳き幻想 第五章

茫然、とじていた。

耳の鼓膜が破れたかのように、キーンという音以外何も聞こえなかった。

騎士の唸るような叫び声も、魔法使いの断末魔の叫びも。

何もかもが、そこにはあるはずなのに、何も感じられなかった。

背後では、きつと二人がヘキサグラムの上で呪詛みたいに延々とスperlを言ってるのかもしれない。

もしかしたら、賢者の石が今まさに完成したのかもしれない。

確認しようにも、

足が動かなかった。

ヒトが死ぬ度に、血で満たされる廊下。

死体は、もはや肉塊と化し、山となる。

私の前でずっと守ってくれた年老いた魔女も、騎士達に向かっていった。

私は、ただ、茫然と、見ていた。

状況は歴然だった。

住民達と互角だった騎士達は外で待機させていた援軍を交えて突撃していたのだった。

生活に密着した魔法しか使わなかった彼らにとって、致死させる魔法を使える者は指で数える程しかいなかったのだった。争いを好まない彼ら、だからこそその敗因だった。

そう、敗因、だ。

「お嬢ちゃん、そこ通してくれねえかなあ？」

私はおかしいのだろうか。

身内の死体を見ても、何も感じないのだから。

そこにあるのは”無”

胸にぽっかり穴が空いたような、虚無に支配されたただの傀儡。

でも、

「どかないなら」

この、異常なまでに透き通った感情は、……怒り？

悲しみすら越えてしまったのかもしれない、もしかしたら

麻痺するぐらい感情が高ぶったのかもしれない。

でもそんなの、

「どうでもいい」

聞こえないなお嬢ちゃん、
そう言おうと騎士は屈んだ。
それが、仇となった。

レミリアは小さな握りこぶしで騎士の甲冑を砕き、右からの強烈な蹴りで脊髄を砕き、騎士を絶命へと至らせる。
返り血に染まり、鉄の匂いが充満する廊下に、ざわめきが起こった。
幼い少女が一介の騎士を殺したのだ。
が、そのざわめきも一瞬で収まり、レミリアに向かって突撃していった。

レミリアも地を蹴り、蹴散らすかのように次々と、騎士達を殺していく。

返り血にドレスが紅に染まり、肌も鮮血に染まった。
一人、また一人と、息の根を止めていく。

少女は、槍に刺されても、剣で切られても、戦い続けた。

目に涙を浮かべながら。

*

「完成したわ」

パチュリーがふう、と息を吐く。
賢者の石が完成した。

これで、彼女を目覚めさせられる。

傍らにいた伯爵は疲れたのか、彼女のいるベッドに横たわっていた。
それもその筈だ、私だって尋常ではない疲労が襲いかかってきていた。

最後に、私は呪文を唱え、
彼女の翼に賢者の石を吊るした。

後は、待つだけ。

*

「……………」

ゆっくりと、彼女は目を開けていった。

最初に感じたのは、光。

眩しくて、頭が痛くなりそうだった。

時間が経つと、そこには紫の髪をした女性が現れた。

何か、口をパクパクさせてるけど何を言ってるのか分からない。

「」

「ル？」

聴覚が、段々、感じてきたのが分かる。

この感じは、なんだろう。

なんだか、温かくて気持ちがいい。

「フラン……ドール？」

それが、きっと、私の名前。

*

私が彼女の名前を言うと、フランドールは返してくれた。
永き眠りから目覚めたのだ。

喜びのあまり、嬉し泣きしながらも、伯爵を起こす。
娘を一番見たかったのは、伯爵に違いない。

「起きて！」

体を揺すって、伯爵を起こす。

伯爵はぴくりとも動かなかった。

「フランドールが起きましたよ！」

さっきより強い口調で言った。

……それでも、伯爵は動かなかった。

「嘘……、でしょ？」

パチュリーが伯爵の体を起こし、心臓の音を確かめる。
音が……、しなかった。

体を支えながら、フランドールの横に伯爵を移動させる。
フランドールは不思議そうにその光景を眺めていた。
純粹無垢な少女は、きつと分からないのだろう。

フランドールの横に寝かせた伯爵の顔は、安らかで笑顔だった。
嬉しいのと悲しみが、交じりあい、パチュリーは白いベッドに泣き崩れた。

親を親と知る前に、
目の前で死ぬという事実を、
少女はその現実を、

呪った。

*

「……………」

あたまのなかがまっしろ。

最後の騎士を槍で串刺しにし、レミアは崩れ去った。
騎士達から見れば、真っ向から攻撃してくるレミアには隙がありすぎた。

そのせいか、少女の体は槍が刺さっていたり剣で切られ、血がかなり出てしまった。

「……………」

あたまがいたい、
ちをながしすぎたかしら、

血で湿った紅絨毯に突っ伏し、ゼーはーと呼吸は荒く、目は虚ろだった。

「……………」

あれは、だれ？

レミリアはふっと糸が切れたように、
目を閉じた。

ツェペシユの傳き幻想 最終章（前書き）

「もうすぐ夜明け、ね」

鉄の臭いがする廊下を、すつと女性は歩く。

「……あら」

しばらく歩くと、そこには吸血鬼の娘がいた。

薄紅色のドレスが、血で紅に染まった姿に息を飲む。

女性は娘に手をあて、死んでいない事を確かめたうち、廊下から続く目の前の部屋に足を踏み入れた。

天蓋付きの白いベッドには三人の姿があった。

一人は吸血鬼の娘、

一人は七曜の魔女、

一人はこの館の主。

娘と魔女は疲れたのか、寝てしまっていた。

魔女の方は目元が赤く、きつと泣いたのだろうか。

館の主は、吸血鬼の娘の隣で息もせず寝ていた。

優しい顔をして、嫌いなものなんてないような、そんな吸血鬼だった。

「スカーレット、貴方はそれでよかったのかしら」

ああ、そうよね。

「いや、それが貴方の道なのね」

女性は深呼吸をして、傘を閉じる。

「約束は必ず果たすわよ」

ゴゴゴと、地響きが起こる。

館全体が、震え、窓ガラスが割れていく。

館は黒い空間に吞まれ、跡形もなく消していく。

「ちて、と」

くるり、と女性は振り向く。

「貴方の為に、私の為に、確実にこの館から屑共を消してあげるわ」

薄く、笑い、女性は部屋を後にした。

「幻想郷に貴方達はいらないの」

ツエプシユの傳き幻想 最終章

「 起きて! 」

「 ミィ起きて! 」

「 レミィ起きて! 」

パ…………チエ?

「 あなた…………誰? 」

「……！」

レミリアが目を醒ますと、目の前には自分の妹がいた。純粹無垢な少女が目の前には立っていた。翼には賢者の石を携え、キラキラと輝いていた。

ハツとして、自分のドレスをみる。

血で染まったドレスや血でこびりついた肌はそこには無かった。あるのは薄紅色のドレスに純白の綺麗な肌。おまけに、傷も塞がってるではないか。

一体どういうことなの？

と考える前に、レミリアは自分の妹に精一杯の笑顔で、

「私は貴女のお姉ちゃんよ」

「お姉ちゃん……？」

「そうお姉ちゃん、血の繋がった姉妹。家族よ」

「……家族」

そうだ、父はどこにいるのかしら。

妹を一番に見たかったのは父の筈だ。

部屋を見回すと、父は簡単に見つかった。

妹が寝ていたベッドに、一人、父は寝ていた。

「起きて、妹が目を醒ましたのよ！」

体を揺すり、父を起こす。

その体を触った瞬間、レミリアは驚いた。体が冷たいのだ。

「……えっ？」

ゆっくりと父の胸に自分の耳をあてがう。
そして消え入りそうな声で、こつもらした。

「嘘……、でしょ……？」

一番に妹を見たかった父が、
一番に人を愛していた父が、

死ぬわけ、無いのだ。

「……ごめんなさい、私のせいだわ」

後ろで、パチユリーが静かに、けれどハッキリした声でレミリアに
言った。

「うっん、”お父さん”は他の魔法使いに賢者の石を作らせなかつ
たと思うわ、だからパチエは悪くない」

そして、少しの時間が経ち。

「もう、終わったわ」

終わった。何もかも。
全てが。

「……………皆を土葬するには労力が必要だわ。火葬にしましょう」

レミリアは立ち上がって、後ろの二人に云った。

「レミイ、貴女それでいいの？」

「それでいい、その方がいいわ」

「この部屋自体、燃やすわ」

レミリアは薄く笑った。

未練も無いし、すぐ燃やさなきゃ気味悪いし情が移ってしまっじやない、と

パチュリーはそれを嘘だと見抜いた。

意地っ張りでプライドが高い彼女だからこそ、嘘。

「後悔は……しない？」

「……ええ」

なら、と魔女は彼女の妹を連れ部屋に出ようとする。

「待って」

レミリアがそんな二人を止め、

「少しだけ、一人にさせて。……燃やすのはそれから」

「分かったわ」

そして、パチュリーとフランドールはこの部屋から出ていった。

レミリアは出ていったのを見届けると、拳を握り締めて、静かに泣いた。

*

パチュリーは廊下の光景を見て、さっとフレンドールの目を手で覆った。

「ん……？」

「少し我慢してね」

酷かった。

鎧はあるのに”中身は”無いのだ。

それなのに、血の臭いが充満していた。

そんな不思議な光景に魔女はぞっとした。

レミリアには中身だけ消すという能力も技術も無い。

つまりは

「……ここ、やだ」

「そうね、外に出てみようかしら」

何者かがいたということ？

鎧の群れをかき分け、地上へと二人は歩いた。

何故、地下への道がバレたのか分かった気がする。

パチュリーは地上に出てその原因を見てそう感じた。

伯爵のあの刺された傷口から血が流れていたのだ。

騎士達はそれを辿って来たのだった。

迂濶、なにか魔法で入れないようにすれば良かったんじゃないかと思う。

地下とは対称的な綺麗な洋館に、目を覆ってた手を戻すとフランドールは驚いた。

きつと朝を迎えたのだろう。

廊下は暗くなく、エントランスから漏れる白く輝く日光が見えた。

そういえば、フランドールも日光は危ないんじゃないかと思い、歩いてきた足を止める。

そのフランドールは突然足を止めたパチュリーに首を傾げる。

そうだ、元図書館の部屋に行けばいい。

あそこからの外の眺めは良いのだ。

「さ、こっちよ」

元図書館は荒らされた形跡も無かった。

本も少ししかなく、空き部屋のようなこの部屋は騎士達も見逃したのだろう。

そして、窓から漏れる光にフランドールは目をぱちぱちさせ、慣れしてきたのか二人は段々窓に近づく。

「痛かったら、言ってね」

「ちくちくするけど、平気」

「うーん……、とりあえずそこにいなさいね」

「……分かった」

一人、魔女は窓のガラス戸を開けようとして、手を止める。
目を見開き、その出来事に驚く。

「どづいつこと……？」

パチュリーはフランドルを連れて、レミリアの元に足早に向かった。

レミリアは部屋から出ると、そこに二人の姿は無かった。

地上に出たのかしらと思いい、血の臭いを我慢しながら外へ出た。
生憎、騎士達を見下ろす真似はしなかった。

「レミイ大変よ！大変！」

「どづいつたのよ」

「とにかく大変なの！こっちに来て！」

レミリアは何事かと思いいながら、パチュリーに腕を引っ張られ、懐かしいあの図書館へとやってきた。

「窓の外をみて」

「やだ眩しいじゃない、それに日光は」

「いいから！」

「……少しだけよ」

パチュリーに急かされるまま、レミリアは窓の外を覗きこむ。レミリアの目の前に広がる光景に啞然とする。

まず、目に飛び込んで来たのは大きな湖。そして、向こうに聳える山々。たくさんの森林が広がっていた。

「ここ……どこよ……？」

「分からないわ」

館が移動した、のだ。

いつも見ていた館からの風景とは全然、似ても似つかなかった。

「ま、夜になったら外に行ってみるのも悪くないかも」

「日中は館から出れないし、火葬した後、掃除しないとね」

「ええ、そうね」

「存外、驚きはしないのね？」

「驚きというより嬉しいさ、けど今は何も感じないの。あまりに大きなことが立て続けに起こったから、受け止めきれない」

「正直いうと私もよ、レミィ。信じたくない自分がいる」

「それでも私達は生きてるんだ」

レミリアは伸びびをして、欠伸をした後、パチュリーとフランドールに、さ、行きましょと言って部屋を後にした。

「掃除の得意な召し使いがいればいいのにね」

「同感ね、あと館を守ってくれそうな人とか」

「それいいわね、いちいち教会に怯えなくて済むわ」

そう言いながら、地下の廊下を歩き続ける。

フランドールは疲れたと言ったためレミリアの部屋に寝かせておいた。

この光景を見せてはいけないと二人は思ってたため都合がよかった。それにフランドール自身、初めての出来事が多すぎて疲労も半端無いのだろう。無理をさせるわけにはいかない。

「未練は無いかしら？」

「無いさ、悲しみに取り込まれたら終わってしまうわ」

パチュリーの風魔法で騎士達や住民達の亡骸を部屋に運び、パチュリーは火葬する為に火を手に浮かべる。

「便利ね、パチエの魔法」

「それで家事全部任せるとしてないわよね？」

「うっ、バレたか」

「ま、三人のうち手伝ってあげるわ」

「ありがとね、パチエ」

「どういたしまして」

「んじゃ」

「ええ」

火が、ゆっくりと絨毯に落ちる。

火はゆっくりと絨毯を燃やし、大きな炎となる。

「さようなら、みんな」

全ての思い出し、さようなら。

*

火葬が済み、二人は部屋を後にした。

パチュリーの魔法で燃え広がらず、全てが灰となった。

パチュリーは骨でも遺しておきなさいよと言ったが、レミアは首を横に振った。どうやら彼女なりの戒めなのか分からないがそういうことなのだろう。

674

血の嫌な臭いがする廊下を歩き、伯爵の部屋へと入る。

どうやら、騎士達は地下の部屋には入っていないらしい。

図書館同様、荒らされた形跡は無かった。

レミアはここも燃やすと言ったが、パチュリーが制し、なんとかこの部屋は燃やさずに済んだ。

「なんで燃やすのよ？」

「出来るだけ思い出したくないしね」

「嫌でも思い出せなくなる時が来るわよ」

「……分かったわよ」

「あら、これは何かしら？」

パチュリーが何かを手取る。

テーブルに置かれた、本？

いや、

「ダイアリー……、日記かしら」

そこには日記としか書かれていない簡素な日記帳だった。

「まさか」

「伯爵の？」

二人は恐る恐る、日記帳を開いた。

『この日記帳で何冊目だろうか、物心ついた時から書いていた日記もこれで何回目だろうか。』

そこは数えたくないので割愛しよう。

何故、今になってこんなことを書くか。

まあ簡単に書くならば、私の片腕は動かなくなったということだ。確かにこの日記も更に書きづらくなる訳だ。

そして私自身の寿命が近いのだろう。

それは杞憂でありたいが、自分の体だ。自分が一番分かっている。だから、これからは1日1日を大切にしていこうと思う。』

無言で、二人はページを捲る。

『今日は嬉しい事があった。』

なんと娘のレミリアに同じ背丈くらいの友達が出来たみたいだ。館には子供が少ないから寂しい思いをさせ続けていたから、レミリアが私に延々とその友達の話をしてくれた時は嬉しかった。それを召し使いにいったら親バカですねと言われた。』

『今日は古い友人が遊びにきた。』

なんだかんだであいつは元気みたいだ。片腕が動かないといったら驚いていた。ふむ、この有り様じゃ館の奴等に言うのはまずいかもしれない。余計な心配をかけてしまっただけじゃない。とりあえず、今日は飲みすぎた。早く寝よう』

伯爵の日記が綴られている。

「ねえ」

「ん」

「最後の日記、読まない？」

「……そうね」

そして二人は最後のページを捲った。

『長きに渡る、この日記もこれで最後になるかもしれない。

遂に教会が私達を狙い、殲滅させようとするだろう。

先祖が国の奪還の為に戦ったというのにこの仕打ちはどうなのか
と思ったが、世間は変わったのかもしれない。

時代は変わったのだろう。

教会は私を、私だけを狙っている筈だ。

つまりは私さえ死ねば、彼らは退くだろう。

それに、友達は私の頼みを聞いてくれた筈だ。

きっと今夜にでもあいつらを運んでくれるだろう。

私もその幻想郷とやらを見てみたいものだ。

そこは人間と亜人が仲良く共存している世界だという。

私にとってそれはまるで夢物語のような世界だろうが、彼女の事
だろう、本当らしい。

なんでも、東の地に似た環境らしい。

ますます行ってみたいじゃないか。

まあでも仕方ない。

犠牲は最小限に済ませるならこの方が一番だ。

戦うという意見が大半を占めたが、相手は人間。私達と同じ魂を
もつのだ。

人間にだって優しい者もいる。

分け隔てなく得た命は粗末にはいけない。

私が粗末にはいけない。と書いても説得力はないが、つまり
はそういうことだ。

この日記を手にしたあなたへ。

きつと、ふとした部屋の掃除の時にこれを手にしたことだろう。きつと、これが遺言になるのだから、今のうちに書いておこう。

きつと、そこは見知らぬ世界だろう。

それが日記に書いた、幻想郷だ。

驚いていた事だろう、不安だろう。

けど、しかし、安心して欲しい。

私は死してもなお、この館を見守っているのだから。

私が”視た”世界は皆が笑顔で暮らしていた。

私はそんな生活が大好きだ。

平凡でもいい、それが幸せだと私は思う。

だから、皆にも幸せに生きて欲しい。

最後にレミリア。

こんな父で申し訳ない。

けど、ありがとう。そんな私を理解してくれた。

友達を大切に、幸せになってくれ

それが、最後の私の我が儘だ』

最後のページだけ、微かに、涙の跡が残っていた。

ツェペシュの傳き幻想 Ending

「パチユリー様にもそんな過去があつたんですね……」

小悪魔が呟く。

「ま、過去は過去よ今を楽しく生きればそれでいいんじゃないかしら」

「はい……！」

「分かったならこの本の山を片付けてくれるかしら」

「はい！」

*

「おはよう、パチエ」

「こんばんは、レミィ」

「いや私の感覚じゃさつき起きたばかりで……ふわあ……」

「夜風にあたりながら散歩もいいわよ？」

「ん、今日は満月だっけ」

「ただだけどそろそろな筈よ、まあでも今日は月が綺麗よ」

「ふーん、ま、ちよっと散歩してくるね」

「行ってらっしゃい」

*

レミリアは空を見上げた。

綺麗な、十六夜の月だった。

湖はきらきらと輝き、水面に移る月はとても幻想的だった。

「ん、なんだあれ」

湖の畔に誰かがいた。

暇な私はそれに近づいてみる。

もしかしたら強い奴かもしれない、そのときは私を楽しませてくれる筈だろう。

そっと、近づく。

近づいてみると、それは寝ていたようだ。しかも少女。

なんだか不思議に思いながら、まあでも幻想郷だしと自己解決して少女を起こす。

いや起こしそうとしたら起きた。

「あ、起きた」

「貴女は……？」

「私？私は紅魔館の主レミリア・スカーレットよ」

そして、久しぶりに吸血鬼の少女は笑った。

f i n . . .

ツエペシユの儚き幻想 Ending(後書き)

なんだかんだで、紅魔館シリーズ三作目ですな。
紅魔館の方々は個性豊かで書きやすいです。

地霊殿やら星蓮船の話も書きたいところですが、作者のパソコンのスペックのせいでプレイ出来ずじまい。

原作やらないと書けない人なんですごめんなさい。
緋はなんだかんだで書いてませんね。

さて、解説みたいなのは次から。

今回は、紅魔館の元、主を書かせていただきました。

本編の主人公は、パチュリーと伯爵。そしてフランドール。
ツエペシユの幻想は、

伯爵の日記に書かれていた、誰もが平和に生きる理想郷、つまり幻想郷です。

(ただ、求聞史記にはスペルカード制定前後に争いが絶えなかったという記述があった気がします。まあそこは二次設定ということでお許しを)

ちなみに、今回の殺す描写は簡単にしました。

というのも、圧倒的な力の前には屈せられないというのがありますからね。

例えるなら、

蟻を踏み潰した時でしょうか。

蟻を殺したという事実よりは、どこか軽い印象を与えます。

まあ蟻という印象が印象だけありますが、妖怪にも人間なんてそんなもんなんでしょうね。

エンディングを見ていただいた方は薄々感じた気がするかと思いますが、

エンディングは短編集の不完全な満月の部分です。

この時、咲夜の手を握り、咲夜の過去を垣間見て、自分と同じ境遇なのだと気付きます。

彼女達は、守られ、守ってくれる人達が無惨にも死んでいくさまをただ、見ることしかできませんでした。

その共通項を見つけ出したレミリアはどこか咲夜の事が気になってきます。

まあそこは不完全な満月を。

なんだかんだでこの短編集も違う話から伏線を拾っています。

まあ世界が同じですし、舞台は限定されますからね。

ともあれ、この短編集もあと二つ三つの話で終わりを迎えると思います。

その終わりは、作者の制作意欲や話が書けないとかそういう意味ではなく、

東方短編集〜The Another Storyという、一つの話として完結するということです。

これからの話はこの短編集を書きはじめる時から、考えていたもので、

東方短編集の特徴である”俺設定”が強烈な話です。

そこはまず最初に謝っておきます。ごめんなさい。

ともあれ、最後まで、応援よろしくお願いします。

……まあ、まだまだ先のような気がしますかね。

八雲紫が愛した幻想郷

「霊夢ーお茶ー」

「ちよつと待つてて。……つてなんだ、紫じゃない」

冬の寒い日常が過ぎ、幻想郷にはほかほか陽気の春が来た。

ここ最近白玉楼では花見を連日行っているらしい。

冥界なのに夜雀の屋台を呼んだり酒好きの鬼達がやってきていいのか、と思っただが

幽々子の「まあいいんじゃないの？」で一蹴された。

「無視しないでよ、ねえ霊夢ったら」

「……」

「お茶」

「……」

「お茶ーお茶ー」

「……」

「お茶をくれなきゃ……」

「……」

「そこは反応しなさいよ」

「お茶を注がなかったら、何？」

「うーん、そうねえ」

ずずー、といれたたのお茶を飲み、隣にいる紫を一瞥する。

紫はと言つと顎に手を当てて、わざとらしく悩んでるポーズをとっていた。

「……霊夢と結婚する！」
「死ね」

「変な冗談やめてくれないかしら？」

「んー、私はまんざらじゃないわ」

「はいはい、……でわざわざここに来たのは何の用かしら？」

「お茶を集りに」

「集る……って、紫にはお茶を淹れてくれる式神がいるじゃない」

「いや飽きたからたまには霊夢が飲んでるお茶とかいいかなーと」

「……お茶一杯なら茶菓子と交換よ」

「交渉成立ね、ちよっと待ってなさい今取ってくるわ」

「取ってくる……、って隙間使えば簡単じゃない」

「ああそうだったわね、……よつと」

「わわっ、一杯出てきた！？ 煎餅に、金平糖に……。なんだか私

の知らない菓子も含まれてるみたいね」

「霊夢の口に合うか分からないけどね」

炬燵の上には、隙間から出てきた色んなお菓子があった。

どうやら紫は皿に入ってたまま、まるごと持ってきたらしい。

霊夢は見たことのないお菓子に目を輝かせながら、煎餅を手取る。

「結局煎餅なのね」

「楽しみは後でとっておくのよ」

「あ、食べる前にお茶お願いね」

「仕方ないわね、ちよっと待ってなさい。……あ、お茶淹れてる間

にお菓子つまみ食いしないでよね？」

「はいはい分かりました」

「はいお茶、熱いから気を付けなさいよ」

霊夢が紫の目の前にお茶の入った湯呑みを置く。

鮮やかな緑の湯を見る限り、霊夢もお茶を淹れるのが上手いのだろうと紫は思う。

「あら」

「ん」

「茶柱」

「きつと今日は不幸な事が起きるわ、うん、そくに違いない」

「あら霊夢ったらひどいのね、私は幸せよ？」

「はいはい」

霊夢が煎餅に手をつける。

紫はというと熱いお茶を冷ましていた。

「ねえ」

「んー」

「あんたは花見……ていうか、宴会に行かないの？」

「そういう貴女はどうなのかしら」

霊夢はうーんと背伸びして一言。

「面倒」

と、ぶっつきばらばらに言ってお茶を啜る。

「紫はどのようなのよ？いつも幽々子と飲んでなかったかしら、こんな時期に私の所にやってくるなんて珍しいじゃない」

霊夢が紫に訊く。

ようやく飲めるようになったお茶を一口飲んで紫は笑いながら

「面倒だから」

と静かに応えた。

「あら、宴会の事でも気になるのかしら」

「いや別に」

「ふーん」

紫はつまらなさそうな顔をして煎餅を一枚とる。

「紫も結局煎餅なんじゃない」

「お茶には煎餅が似合うのよ」

パリッ、と煎餅を手で割る紫を見て霊夢が「口でそのまま食べなさいよ」と何気無い口調で言った。

「どんな食べ方したって美味しいものは美味しいのよ」

「まあそうなんだけどね」

「それにしても」

「ん」

紫が陽の当たる縁側の向こうを眺めながら、哀愁を感じながら呟いた。

「幻想郷は今日も平和ね」

「平和かしら、ここ一年に何度異変があったと思ってるのよ？」
「あら、平和の何物でもないわ」

紫が縁側に立って、真っ直ぐ前を見た。
でも紫の視界は前だけじゃなくて

「……そういえば気になってた、紫、あんたはなんでそんなに幻想郷の事考えてるのよ」

「ひ・み・つ」

霊夢は縁側でにやにやしてるのが目にとれた。
全く、胡散臭いことこの上ない。本当に考えてるのかすら疑ってしまふ。

「はぐらかさないですよ、いつもそうやって……」

「分かったわ、なら教えてあげる」

「え？」

思いがけない答えに霊夢は煎餅を取ろうとしていた手が止まる。

「その代わり」

「その代わり？」

「宴会に难道いかないのか教えてくれたら、いいわ」

紫はまだ、向こうを見ていた。

「……は？」

「貴女は勘は良いけど嘘は下手ね。まあ、嘘はつくもんじゃないけど」

「いいわ、分かったわ。ただし他の奴等に教えちゃ駄目よ。恥ずかしいし」

「はいはい、分かったわ」

はあ、と霊夢はため息をつく。

「私が行ったところで別に何にも変わらないじゃない、

いくら異変解決して宴会の住人が増えたって私は人間よ、いつかは死んで忘れられる。

だからこそ嫌なの。仲良くしてたら、私が死んだ時どうするのよ？ どうせ辛気くさい顔して泣くと思うわ、それが嫌なのよ」

……思わず余計なことを言ってしまった、と思う。

そしてら、からかうと思つてた紫から意外な一言が返ってきた。

「優しいのね」

紫は続けた。

「けどね、だからって皆から忘れられようとするなんて無駄よ。

初めて弾幕ごっこした時から絶対に忘れる事なんて出来ないのだから」

「なら、嫌われてもいいわ」

「あら、嫌な奴演じるつもり？ 無理よ、貴女は嘘が下手だから。諦

めなさい、そういう運命なのよ。

大人しく泣かれて辛気くさい顔で見送ってやるわ」

「……………っ、今日はどうしたのよ？やけに言うじゃない」

「いや別になんてことないわ、ただ霊夢には楽しく生きて欲しいから」

「ふーん、紫が言うとなんだか胡散臭くて」

「胡散臭くていいのよ、私にとっては」

霊夢がお茶を一口飲んで紫に訊いた。

「なんだかあなたに言ってすっきりしたわ、けど私はこの関係の距離が心地良いのよ。」

近づいたら自分が自分では無くなっちゃう気がしてならないの、いやもしかしたら周りが変わるかもしれないわ。

それも嫌。あーあ、私ったらとんだ我が儘な女ね」

無理に笑った。

嘲るように。

もしかしたら自分に対して笑ったのかもしれない。

霊夢はそれが可笑しくて笑う。

「霊夢は霊夢よ、心地良いのならそれが良いと思うわ」

笑い声が止んだ。

「そうするわ。……………話が逸れたけど、理由は言ったわ。さ、紫の番よ」

全く、嘘が下手なんだから。

彼女は、きっと人との接し方が分からないのだろう。

博麗の巫女としての立場、異変解決の巫女として、それに応えていたからこそ、分からない。

生まれながらにして負う宿命とは、罪なものね。

紫は霊夢に見られないように、一人、笑った。

「えーっと、何を言えればいいんだっけ？」

「簡単に言えば、幻想郷を愛してるのかってことよ」

「ああ、なるほど」

わざとらしく、こほんと咳を一つついて紫は言った。

「私はね、誰もが平和に楽しく暮らせる理想郷を作りたかった」

紫はまだ、前を見ていた。

紫がどんな表情をしているのか、霊夢には分からなかった。

哀愁を感じてるのならそれは紫には似合わなさそうだし、普段胡散臭そうにしてる彼女がどんな顔して語るのか不思議だった。

「どんな弱い人間も、妖怪も、誰もが平等に、在ることが出来る世界を私は望んだ」

紫の声はいつになく冷静な声だった。

「とある大きな山を境界で引いて外界と切り離し、幻想郷、つまりは大きな山の一带の並行世界を創り、

外界から幻想郷へと至る物質的な干渉は出来るだけ消して、外界で忘れ去られたものが流れ着く、

所謂幻想入りシステムを確立した。けど、問題があったわ」

「……問題？」

「力の均衡よ、それこそ忘れ去られたもの、つまり文化や妖怪には力を持つものがいたわ。

それによつて人間と妖怪の間には決定的な溝が生じ、力こそ全ての地獄絵図が出来た

私は精一杯考えたわ、人間と妖怪が共存し、助け合い、平等に扱われるようになるような、そんなルールを。

考えて、考えて、……けどそんな夢みたいなルールなんて無かつた。外界ですら、そんなルールを諦めていた。

そんな時に、ある1人の吸血鬼が数多の妖怪を従えこの幻想郷を覆そつとしたわ、圧倒的な力の前にひれ伏した弱い妖怪。

事態は悪くなつていく一方よ。けれどその吸血鬼事件も過ぎて、私の元に一通の文が届いた」

「……………」

霊夢は気付いた、

紫が何を言おうとしているのか、

「スペルカードルール」

紫が、はじめて、その単語を嬉々と言った。

「目を通して私は戦慄したわ、誰もが見つけられなかった”ルール”がそこにはあった。」

これなら、力をもて余した妖怪も、弱い妖怪も、人間も、妖精も、全てが対等になる夢のルールだった。

私は、大妖怪という立場から慎重に行動しなければ無かった。私がルールを制定した所で、大半の妖怪が反感を買うのは分かりきっていた。そこで13代目の巫女にそのルールに改善を加え、巫女自身に、制定するような言い回しで私はその旨を文に託した」

「あれは……そういう事だったのね」

「ルールは紅霧異変以降、瞬間に広がったわ。効果は絶大。馴染む事無かった紅魔館の住人は人里から、妖怪からも理解され、平和になった。そして貴女が弾幕ごっこをして、それから輪が広がっていった。」

「大袈裟よ」

「人里から理解が得られたからこそ吸血鬼の食事となる血液も、人間を殺さずに、血液の代わりに紅魔館の食料を交換することで和解したわ。霊夢、貴女のお陰でこの世界に、一つの平和が完成した」

「……………」

「春雪異変、永夜異変……まだまだあるわ、けど最後は仲良く宴会をした。少し前まで敵だった者が、あっさり」と

霊夢は紫の背中を見ていた。

いや、見られずにはいられなかった。

大妖怪の彼女の、秘めていた思いに、気付いたから。

くるり、と紫は霊夢に向かった。

「ありがとう、霊夢」

今まで誰にも見せたことが無いような笑顔で、大妖怪、八雲紫は笑った。

「ばか、私は誰のためにもやってないわ、自分のためよ！私は平和に暮らしたいから、ただそれだけよ」

そう、全て自分の為に異変を解決しただけ、だからそんなお礼を言われる筋合いは無い、ましてやあの紫が”ありがとう”？

……気持ち悪い。なんだかとても居心地が悪い。

「あ

けど、私は言ってしまった。

平和に暮らしたいからという、意思を。意図せず漏れた言葉に、私自身が驚いた。

「私は……、私分からないわ」

まるで、あの鉛色の空みたいに、お日様を鋼鉄の衣で包んだみたい。に、私のもやもやを紫は。

「霊夢には感謝しても感謝しきれないわ」

「……それなら何で今なの？言えるチャンスなんてたくさん……」

そこで気付いた。

霊夢と紫の立場が、

霊夢は博麗の巫女、紫は大妖怪の賢者、

そんな二人が仲良く話していたら、

大妖怪が人間と仲良くしてるという事実こそが、妖怪と人間との関係にひびを入れてしまうだろう。

「なんとなく分かったわ、けどじゃあ、なんで”今”なのよ？」

霊夢は勘が鋭かった。

自分自身、嫌になるくらい。

だがそのお陰で助かった時も何度もある。

けれど、こんなときに勘が働くのは嫌だった。

八雲紫の笑顔、

誰もが宴会に集まる……。

つまり、紫はここに霊夢しかいないことを知っていた。

「紫、あなた何を企んでるのよ？」

「んー、やっぱり貴女の勘は鋭いのね」

「答えなさいよ」

「……今日はね」

紫がまたくるりと後ろを向いて、縁側の向こうの光景を眺める。振り向き様に見た紫の顔はなんか、笑っているようにも見えて、

「今日は、幻想郷が生まれた日よ」

「幻想郷が生まれた日？」

「ええ、そうよ」

「なんだ、またなんか異変を起こすのかと思ったじゃない」

「なんだとは何よ今日は大切な日なんだから」
「あー……」

霊夢は気付いた、
いつもはぐらかす話を今日に限って話した、その理由が。

「で、宴会でもやるのかしら？」
「いや、しなくていいわ」

懐にあるお茶は既に湯気がたたなくなり、温くなっただろう。
それを一瞥して、冷める前に飲もうと思いつつ、紫の話に耳を傾ける。

「少しで、いい」
「ん」

「少しでいいから、この世界の事を想って欲しい」

「幻想郷の事なんて考えたこと無かったわ」

「今日くらいは、いいでしょう？」

「……そうね」

霊夢も、紫のいる縁側に向かう。

「改めて見ると、綺麗ね」

「ふふ、私がいる間は絶対にこの風景を壊させはしないわ」

「私がいる間……って」

「ええ、この風景は百年、いや千年以上変わってないの」

「……紫は、なんでそこまで出来るの？」

「だって、好きだから」

静かに、暖かな声で紫は言った。

「この世界が好き、この世界の風景が好き、この世界の人達が好きだから」

「紫……」

「だから、私は全て覚えてるわ。道端に落ちてる石ころだって私は忘れない。

忘れ去られた者がここに流れ着くのなら、私は絶対に忘れはしないわ」

「……それは、私が死んでも？それから百年も千年も過ぎても、絶対に……？」

「ええ、絶対に忘れられないわ。霊夢の髪の毛の数すら覚えてるんだから」

「ばか」

これが、幻想郷。

紫が昔から、今も、そしてこれからも守っていく、幻想郷。そんな事を考えたら、

紫がどれだけの想いで、今を作ったのか、そんな、柄でも無いことを考えて

「ん、霊夢？」

「あーっ、今日はやけ酒よ！紫、酒持ってきてきなさい！」

「あら霊夢から誘ってくれるなんて嬉しいわ」

「いいから、酒とってきなさい酒！」

「はいはい」

「.....」

「感謝したいのは私の方よ」

霊夢は小さく呟いた。

夢は貴女と共に（前書き）

メリー、隠すの下手なんだから
だから私も騙されてあげる
何かあったか分からないけど
メリーと、また逢える日を信じて

私は待つよ、いつまでも

謝らないで、貴女は悪いことをしてないから
だから私は笑う
メリー、私は笑って待っているから

「許してあげる」

夢は貴女と共に

「遅刻よ、蓮子」

「あれ今は……、17時52分、ありや遅刻しちゃった。ごめんごめん」

「正確な時間が分かるのにそれじゃ駄目じゃない」

「いやほら、まあ、その……」

「言い訳無用。どうせ図書室にでも行って本読んでたら時間が過ぎたってことかしら」

「メリー、何で知ってるのよ!？」

「いや、私も図書室にいたから」

蓮子とメリーは最後の高校生活を過ごしていた。

季節は秋、読書の秋なんて言うが、この時期になると受験生が図書室を利用し、優雅に読書なんてしてられない。

邪魔するなら帰れという無言の圧力である。そして蓮子はそんな空気を読まず、平然と図書室にある難しい本を読んでいた。

欠伸をしながら読んでいるが、見掛けによらず博識でそれでいて変人だ。

変人というのは、変わり者の事を指すが、蓮子にはその言葉がよく似合う。

「待ち合わせは17時30分よ」

「あら、メリーの腕時計少し遅れてるわよ？」

まず第一に、彼女は空を見上げるだけで現在の正確な時間を把握できらしい。

秒数まで正確に分かる事から、蓮子の特技とみた。

個人的には太陽の位置や影の角度から複雑な計算をして時間を導き出していると思っていたが、どうやらそういうものじゃないらしい。意識すれば手にとるように分かるようだ。

まったくもって便利な特技だ。

けど彼女はそれを上手く活用出来ないようだけど。

「これで、よし……っと」

「ありがと、って二分しか遅れてなかったのね」

「二分でも遅れてたら困るでしょ？」

「貴女は何分遅れたのかしら」

「分かった分かった、今度パフェ奢るから、ほら機嫌直してさ……」

「仕方ないわね、まあいいわ今日は久しぶりの”友人”に会うからよしとするわ」

「おお、良かった良かった」

ふう、と蓮子がため息をつく。

メリーが、さ、行きましょと言って目の前の石段を登る。

これは、蓮子とメリーが体験したとある秋の不思議な物語。

「いつ来てもこの石段は慣れないわ」

「ホント、いつまで続くのかしら……」

「パフエの他に何か一品追加したい気分だわ……」

「……帰りはファミレスに決まりね」

その会話を最後に、二人は無言になり長い石段を登っていく。

秋の18時というのは夕焼けから夜の闇に染まる、ちょうど境目だ。メリーが後ろをふと振り替えたなら、地平線に太陽が沈みかけていた。

「……登りきった！」

数分後、二人はようやく長く渡る石の階段を登りきった。

あまり運動をしてなかった二人は息切れしながらも疲れた表情は見せなかった。

蓮子が背伸びをしながら、前に歩き始める。

守矢神社。

それが私達の目的地だった。

「お待ちしてました、お二方」

目の前には緑髪の巫女装束をした女性が、いや少女が一人。名前は東風谷早苗、この神社の巫女でどうやら非常に運が良いことで有名だった。

「久しぶり、学校に来なくなったから心配になってね」

「そうそう、蓮子ったら失踪したとか縁起でも無いことを言うんだから」

「あはは、ごめんなさい。神社の手伝いで学校いけなかったの」

早苗が丁寧語から普段の言葉遣いになる。

彼女から丁寧語と巫女装束を取ったら普通の女子高生なんじゃないかとメリーは思う。

いや、早苗が学校に来てた頃も普通の女子高生だったんだし、そりゃそうよねと一人自己解決をして早苗を眺める。

「ごめん早苗、遅れちゃって」

「ん、大丈夫大丈夫。どうせなんだし夕飯一緒に食べない？」

「あら、ご馳走になっていいのかしら？」

「ええ、私が腕によりをかけておもてなしするわ」

早苗がはにかんだ笑顔を見せ、そして「あ」と蓮子とメリーの後ろを指差した。

「あら」

「お」

茜色に染まった空や雲、そして、

黄金色の夕日が、地平線に沈んでいて綺麗だった。

「綺麗……」

まるで、”夢で見たような”景色だった。

「それで、早苗は大学いかないのね」

「ええ、神社の仕事で一杯一杯だしね」

母屋のとある和室で三人はくつろいでいた。

早苗曰く、既に料理は出来てるらしい。用意周到とはまさにこの事だろう。

蓮子はというと、大きなちゃぶ台におつかかって「飯はまだかー」とうめいていた。

「二人はどうするの？この時期じゃあ皆受験モードじゃない、随分と余裕みたいけど大丈夫なの？」

「あ、私とメリーは既に大学受かったのよ」

「ああ、そっか、二人とも頭良いもんね」

メリーは全然頭良くないというジェスチャーを交えて首を横に振る。蓮子はというと逆で、まあねえ、と調子に乗っていた。

「そっぴや今時、神社ってどうなのさ。今じゃ科学が発達して月に旅行できたり仙人掌エネルギーなんてのが発達してる世の中じゃない、そこら辺どうなのかしら」

腹を空かせた蓮子が暇潰しに早苗に質問した。

腹を空かせたのに料理が来ないのは、単に早く食べちゃつと夜中にお腹が減るかららしい。

「確かに参拝客なんて微々たるものよ、神様に祈るくらいなら株価の市場を見てた方がいいなんていう考えの人が多いからね、しかもそれが私達みたいない子供までもが言う時代になつちゃったんだからびっくりよ。でも、少しでも参拝客、つまりは信仰があれば神社としては嬉しいな」

「あ、私達は参拝客？」

「信仰があれば嬉しいな」

「まあ……考えとく」

「ところで早苗、夕飯まだー？お腹が背中にくっついちゃうわ……」
「懐かしいわねそれ、子供の時よく言ってたわ、今も子供なんだけれども」

「飯……もう7時だよ……」

「そだね、7時になったし夕飯にしましょ。メリー、ちょっと手伝ってくれるかしら？」

「ん、いいわよ」

早苗の後ろをメリーはすたすたとついていった。

メリーは考える。

この科学が発達した時代に、非科学的な、つまりは信仰などというモノは生き残れるのか、と
生き残れなかった時は、
きつと、誰も気付かず、完全に忘れられた時が来るんじゃないか、
つまりはそれが、現代における”死”なのだろうか。

誰の記憶にも残らず、

この世界から消えていく。

そんなのって、寂しい……。

「メリー、どうかな」

「お、美味しそうなお肉じゃがじゃない！他にも南瓜の煮付けとか……」

……、全部早苗が作ったの？」

「まあね、無駄に嫁入り修行してないもんね」

「あら相手なんていたかしら？」

「う……、さっ早く夕飯にしましょー！」
「はいはい、これを持ってけばいいのね」

*

「わあああああ肉じゃがだあああああ」
「黙れ」

料理をちゃぶ台に置いていくと、腹を空かせた蓮子が味見させて！とどこからか仕入れたのか分からない爪楊枝を片手に私の手元にある肉じゃがを狙ってきた。

「もう少し我慢しなさい」

メリーに一蹴され、蓮子が黙る。それをみた早苗がくすくすと笑う。やがて、早苗の作った料理が並べられ、ちゃぶ台の上には肉じゃがの他にも数々の和食が並べられていた。これには蓮子も感嘆せずにはいられない。おお……とうめいていた。そりゃそうだ、蓮子とメリーはコンビニの弁当で済ませているからだ。

「……………んじゃ、」

早苗が、手を合わせるのを見て二人が手を会わせる。

「「「いただきます！」」」

数十分後、三人は早苗の手料理を食べきり、床に伏していた。

蓮子に至っては食べ過ぎてさっきから無言で天井を仰いでいる。早苗とメリーは皿を重ねながらも、その動きは遅かった。

「南瓜のやつ……作りすぎたわ……」

「サランラップで包んで冷蔵庫にいれれば良かったんじゃないかしら？」

「……、確かに」

メリーは腕時計を見ると、既に20時を過ぎていた。この地域は2時を過ぎると高校生は補導対象になるのであった。つまりは、補導されちゃ進路に響くかもしれないので22時を越える前に家に帰りたいのであった。

「蓮子、蓮子」

「………後は任せた」

「………全く。そうだ早苗、皿洗い手伝うわ」

「ありがとう、一人じゃ大変で……」

重ねた皿を集め、台所へ持っていく。

台所はどうやら温かい水が出ないらしく、いつも冷水であらってるみたいだ。

「冬になっても冷水？」

「まあね、こればかりは流石に慣れないのだけれども」

「そりゃそうよね。あ、この洗剤つかっていい？」

「うん、そういやメリーは寮に住んでるんだっけ？」

「まあね、けど蓮子も寮住みよ？」

「そうなんだ、まあでも納得かも」

キュツキュツと皿を洗い、手が透き通るピンク色になった代わりに、そこには綺麗に拭かれたいくつもの皿が鎮座していた。

ちなみに、二人が居間に戻ると蓮子は大の字で寝ていた。

蓮子を起こし、三人は少し駄弁った後、蓮子とメリーの二人は帰っていった。

壁に掛けられた時計を見るに、九時を過ぎていた。補導されないといいなと早苗は不安げに思い、乾いた食器を棚に戻していく。

*

「早苗ー、お友達は戻ったかい？」

後ろから、女性の声が聞こえた。

「はい、帰りました。お気遣いありがとうございます、夕飯は大丈夫でしたか？」

「まあ、なんとか。諏訪子と二人でカップラーメンに四苦八苦してた」

「あらら、申し訳ありません」

「ん、いいんだよ。今あるこの時間を大切にして欲しいからね」

「……？」

棚に皿を全て片付けた後、早苗は後ろを振り返った。

そこには赤い、紅葉色のような服に身に纏い、髪は紺色で、それは胡座をかいて早苗の方を眺めていた。

「神奈子様、夕飯は友達と三人で食べきました」

「……へ？」

神奈子と呼ばれた女性が啞然とする。

いくら三人と言えど食べきれないから、残り物でも戴こうかと思っ
ていたからだ。

「そうかい、……んじゃ諏訪子は「ただいまー！」」

神奈子の後ろの障子が勢いよく開け放たれ、そして威勢のいい少女
の声が響き渡った。

「台所にお酒があつたから持ってきたよ！さーて、南瓜の……、あ
れ？」

「ごめんなさい、食べきっちゃいました」

「そういうことだ、諏訪子、一緒に台所について何かおつまみを探
そう」

「……お腹減った」

金髪のセミロングに、早苗より一回りいや二回りも小さい諏訪子と

呼ばれた少女が、神奈子と共に台所へドドドドと向かう。

「……………」

「……………」

それを見て、早苗が、

「ごめんなさい、非常時の為の乾パンしか無いです……………」

と、申し訳なさそうに言うのであった。

「乾パンねえ……………、水があればいいんだけど水あったところで飽きるし……………」

「乾とか貴女の専門じゃない、ほらほら食べ食べー」

「あぐつ……………、ちょ、ああああ!？」

「……………分かりました、料理作るうにも時間が時間なんで何か買ってきます」

「あ、んじゃなんかおつまみで」

「私はえんどう豆!本物じゃなくてお菓子のやつ」

「はいはい、それまで散らかさないで下さいね?……………では着替えて行ってきます」

「……………行つてらっしゃいー」

神奈子と諏訪子の二人が早苗を見送ると、それまで乾パンをそれぞれの口に入れるというしょうもない乱闘がピタリと止まる。

……………そして、諏訪子が小さく、ため息をつく。

「……、で引越しの事は話したの？」
「いやまだ言っていない」

は？と諏訪子が驚き、神奈子を睨む。
それをあしらうかのように神奈子は視線を逸らし、どこにでもない虚空を見つめる。

「どういうことよ、それ。現に早苗にはさっき来たように友達だっている。いくらこの神社をあの子が支えてるからって心はそんなに強くないんだよ？その事が分かってる」
「分かってるさ」

神奈子が、遮る。
落ち着いた声で神奈子は続ける。

「分かってるから、辛いんだよ。私が言えば、早苗は私に対して笑顔を見せるだろう、私が私であるがために、早苗は笑顔で受け止めようとする。けど、一度部屋に戻ったら彼女はきつと泣く。それくらい彼女は脆くて儂い。だからだよ、早苗には無理させたくない。だけど、早苗も来なければならぬ。……迷ってるんだよ、私はどの選択肢を選べばいいのか」
「早苗は溜め込むタイプだからねえ」

引越し、
つまりはこの顕界から別の世界、幻想郷へ”無理矢理”神社ごと移動する事だ。
理由は簡単、この顕界では神様を信じるような信仰が無くなったから
だからこそ、その存在の為にも是が非でも行かなければなかった。

「身勝手だって、つくづく思うよ」

二人の神様は一人の人間に頭を抱えた。

数分後

「やっぱりさ、言った方がいいと思うよ」

「……そうだな」

「早苗が行くって言うのなら、私達は早苗を命を懸けてでも守る」

「私だってそうだ、早苗を小さい頃から見てるんだ。娘同然だよ」

「それにしても」

「ん」

「……いや、やっぱりいいや」

*

「ただいま帰りました。スーパーがまだ開いていて良かったです」

「おお、枝豆スナック！」

「おお、酒に合うおつまみ！」

早苗がレジ袋を提げて帰ってきた。

腹を空かせながら真剣な話をしていた二人は眼前の物を見るなり、

目を輝かせた。

早苗はレジ袋を卓袱台に置いて、買ったものを広げる。

二人の注文の品以外にも、食料や日用品を買っていたのだった。

「なあ、早苗」

いよいよ諏訪子が菓子を食べようとした時に、神奈子が口を開いた。

「なんででしょうか？」

「この神社を引越しようと思う」

「……引越し？」

「信仰を得られないこの世界じゃ私達はやがて消えていく、だから別の世界に引越しするんだ。……早苗はどうする？」

何も、このタイミングで、と諏訪子は思った。

だがしかし、このタイミングでは無ければ神奈子が早苗に話を持ち込むのが難しいだろう。

仕方ないのかもしれない。心の中でため息をついて、神奈子と早苗を見守る。

「別の世界……？いや、仮にその別の世界があったとしても、この世界に帰れる保証は……」

「無い」

「……！」

「早苗にも友達がいるのだから分かる、だから断っても……」

「……行きます」

「えっ？」

望んだ答だった、

なのに、予想外の答だった。

神奈子は早苗の言った事を復唱する。

「後悔……しない？」

「はい」

「本当に？」

「ええ」

早苗が毅然とした口調で神奈子に答える。

「ただ」

「なんだい？」

「一つ、お願いして欲しい事が」

柄でもない、早苗の頼みに、
神奈子は更に驚いた。

*

早苗が部屋に戻るのを見届け、神奈子はため息をつく。

「はっ、早苗に行きたくないって言われたかったの？」

諏訪子が馬鹿にした口調で神奈子を問い詰める。

「違うさ、……ああもう、何を迷ってるんだ私は。早苗が良いと言
ってくれたんだ、私は」

「私はね」

さつきと一変、諏訪子は神奈子を宥めるような口調で言った。

「覚悟があるのなら、私は何も言わないわ。だけどね神奈子。迷ってるような生半可な覚悟じゃ」早苗を渡さないよ”……まあ、早苗は誰のものでもないのだけれど」

「分かってる」

結局のところ、二人は同じ気持ちだった。

幼い頃から早苗を見ていた二人は早苗に苦勞をかけたくない、そして早苗には出来る限り普通の人間として、生活して欲しかった。

ただ、そんな儂い願いも

「信仰を失う」そんな問題を天秤の秤にかけ、結局は早苗よりも自分だったのだ。

そんな自分の馬鹿らしさに、早苗を振り回すのかと思い、腹が立った。

「……今日はやけ酒だわ」

「ちびちび飲まなきゃすぐ無くなっちゃうからね」

「……………」

一人、薄暗い部屋のなかで早苗は涙を堪えた。

あの二人の前では毅然としていたが、それは心配させない為であり、

決してそれを望んだ訳では無かった。

だけど、この神社の巫女となった時から私は”普通の高校生”という人生から大きく道が逸れる事を覚悟していた。

覚悟していたけれども、やはり辛い。

友達がいるこの世界ではなく、また違う世界。海外や月ならまだいい、帰る事が可能だから。けれど戻れない一方通行の場所に行く、それがもう後戻りが出来ない現実を目の当たりにしたような感じだった。

布団に倒れ込み、枕に顔を埋め、迫り来る涙と嗚咽を必死に抑え込む。

「……なんで」

神奈子様が言うには、明後日らしい。

いや正確には明日の深夜0時。その時、神奈子様の力で神社ごと「引越し」するらしい。どうやるのか分からないけど、本気のようにだった。

「なんでっ……」

分からない

「なんで、私なの」

いや、分かってるつもりだ。

ただ私は、東風谷早苗という”特別”を、認めたくなかった。

幸運の少女。

確かに私は運が良い。

テストの記号問題だってほとんど正確するし、赤信号には会わないし。

結局のところ、その程度の話だ。

神奈子様が言うには、私は奇跡を起こす力があると言われた。

けれど、奇跡って何？奇跡は起こすんじゃない、起こるものじゃないの？

私は困惑した、使いようによっては”世界が変わるかもしれない”この力に。

無意識下においてでしか、微々たる”奇跡”を起こせない。それは私が制御してるのか、それとも世界がそれを制御しているのか、分からない。

だからこそ、その幸運が、力なんだと言われた時は驚いた。

ああ、普通の人間じゃないのだと。

「……………っ」

抑えていた涙が、不意に溢れた。

枕に染みがついても、今はそんなこと考えられなかった。

そうだ、あの二人になんて言おう。

蓮子とメリーに、なんて、言おう？

あのオカルトな二人の事だから、他の世界に行くなんて言ったらどんなことも調べあげて私の元へ必死に会いに来る筈。けれどこれは私の問題、彼女達を巻き込みたくない。

「……………」

明日、二人に会おう。

涙で携帯の液晶が歪んで分からなかったけど、それでも、一字ずつゆっくりと打った。

送信ボタンを押す前に、気付いた。

「会って、どうなるっていうのよ……」

励ましてほしい？

いや違う、思い出が欲しいんだ。

最後に会いたいという気持ち。

けれど後はどうなる？

私より彼女達の事を考えたらと考えると、身勝手な行動なんだと分かる。

結局は、彼女達の「後」の事を考えていなかった。

私が、嘘について海外に行くとか言えば見破られるだろうし、余計に心配をかけるんじゃないだろうか。

「バカ……、私、なにやってんのよ……」

我ながら、嫌になる。

私は「特別」という芯に「普通」を着飾っただけなのだ、

その「普通」が崩れ去るのが嫌なんだと。

つまりは最後に会うという特別が、私を普通に繋ぎ止める鎖を断ち切るといふ事に気付いた。

早苗は拳を作って、枕を何度も何度も叩いた。

それでも、涙は止まらなかった。

それでも、嗚咽感は止まらなかった。

……それでも、私は彼女達にメールを送れなかった。

次の日、起きたら昼過ぎだった。

それもそうだ、泣き疲れて寝たのが日が昇る頃だったから。最近では早起きしてたから、昼過ぎに起きるといっものは何か違う感覚がするものだ。

目を擦りながらも、布団を畳み、障子を開ける。障子を開けると、日の光で目が眩み、光に慣れるまで目をぱちぱちさせ、お昼はどうしようかと考えた。

……、冷凍したご飯があるから炒飯でいいかな。

そんな事をぼやーっと考え、居間によろよると向かう。

「……………あれ？」

居間には誰もいなかった。

普段は神奈子様と諏訪子様が寝転がってたりするのだけど、今日に限っていなかった。

代わりに、卓袱台に書き置きが一つ。白い半紙に筆ペンで書いたよ
うな字で、

「今日は諏訪子と一緒に遊びに行ってくる。夜の十一時までに帰ってくるから、よろしく。」
神奈子
と書かれていた。

これが、神奈子様なりの配慮なんだろうと思ひ、
なんだか、申し訳なくなってくる。

だって、結局は何も出来ないから。

漫画や、ドラマでみるようなお別れのようなシーンなんて、現実じ
や出来やしないのだ。

玄関を飛び出したって、私は蓮子やメリーの家をよく知らない。路
頭に迷うのが目に見えてる。

体が、特別を拒絶する。

今日一日、普段通りに過ごせば、明日もまた、普段通りになるんじ
やないかと錯覚する。

勿論、錯覚であって、これから起こる事を曲げたりなどは出来ない。

はあ、

とため息一つ。

軽く伸びをして、

自室に戻り、いつもの巫女装束に着替え、昼ご飯の料理に取りかか
る。

東風谷早苗の、少しだけの「普通」が始まる。

卵をとぎ、炒飯の素を解凍したてのご飯の上にかけて、フライパン
で炒める。

数分後、

炒めた炒飯を皿にのせ少し遅い昼飯が出来上がった。

「いただきます」

手を合わせ、一人でそう呟いて食事を始める。

そういえば、久しぶりに一人でご飯を食べたのかもしれない。いつもは神奈子様と諏訪子様と食卓を共にしていたから。

「ごちそうさまでした」

炒飯を食べ終わり、意外と量があつて作りすぎたかもしれないとお腹を擦つてため息をつく。

「……………」

皿を洗い、いつものように、神社の掃除を始める。

秋の境内は落ち葉が尋常じゃない。落ち葉に火をつけて薩摩芋とかを食べていたらしいが、それも昔の話。

今じゃ薩摩芋は”科学的”に作られているらしい。

まあ、月まで旅行で行けるようなご時世に、そんなことに驚くのが野暮なのだろう。

早苗はあまり街を歩かなかつたし、俗世の情報源は新聞紙だけだった。

だからこそ、真実味を感じなかつたし、”その程度”としか捉えていなかった。

けれど、どうだろうか、

この技術の進歩によって失われた伝統は幾つあつただろうか。

それこそ、数百いや数千もの伝統が忘れ去られた。

物質では言い表せない、それらは忘れ去られた事は、死を意味する

事に同義する。

そう、この守矢神社も例外ではない。

だからこそ、その引越しの必要性も分かっていた。

茜色の落ち葉を箒で掃いて、一通り境内を掃除をし終わり、ふと早苗は境内から見える街の景色を眺める。

いつもの景色も、

今日で見るのも最後かもしれないと思うと、なんだか寂しかった。

「……………」

夕日が沈み、あの青空も茜色に染まり、星達が輝き始めた。

……………参拝客は来なかった。

秋の夜は冷える。

流石にこの巫女装束では、寒すぎる。早苗は箒を片付け、居間に早々と戻った。

居間に戻っても、部屋は静まり、そして寒かった。それもそうだ、誰もいないのだから。

独りって寂しいな。

ストーブをつけて、その間に巫女装束から普段着に着替える。程なくして、部屋が暖まり、壁にかけてある時計を見ると既に6時を過ぎていた。

「夕飯作らなきゃ」

冷蔵庫には何も無かった。

面倒臭くなって、夕飯も炒飯にする事にした。
今回は昼飯に作ったよりも量を減らそう。

「うちそうさまでした」

食器を片付け、台所周りを掃除したら既に8時だった。
タイムリミットまで残り四時間。
けれど、なんらかのアクションなど、してなかった。

風呂に、いつもより長く入って、寝巻きに着替えた頃には9時を過ぎた。

「……………」

蓮子とメリーは、私がいなくなったらどんな顔をするのかな。

……………悲しませてしまうのかな。

携帯のメールを読む。

それらの日付は数日前のから一年前の古いものもある。

内容は、明日の時間割りとか他愛もない世間話。

それでも、それらの日常が大切で、いつまでも携帯に残っていた。

そう、会うか会わないか、どちらにしる友達を悲しませる結末だった。

……………無駄にした一日だった。

残り、三時間。これまでの数時間がどれだけ貴重なのか思い知った。

そして、私に何が出来るか考えた。

メール……………手紙だ。

手紙を書こう。

*

「結局、早苗はずっといたわね」
「……ああ」

神社の屋根に神奈子と諏訪子が座っていた。

早苗が境内を掃除してた時は見つからないようにと、はらはらしていたが、日が暮れてその必要も無くなり、二人は冷蔵庫から拝借したお酒とつまみを広げ、小さな宴会が始まっていた。

「ねえ、神奈子」

「ん」

「この世界は、好き？」

「微妙」

「そっか、神奈子らしいね」

「……諏訪子がそんな事聞くなんて珍しいじゃない」

「なんとなく。私はなんだろうな、何も感じないや」

「人間は神に勝ったのさ、機械を発明し、天気さえも操り、拳げ句の果てに植物を枯らし天上を越えて月にまでたどり着いた。私達の役目など、とうの昔に終えていたのさ」

「これからいく世界は、私達を必要としてくれるのかな」

「必要としてくれる筈さ、私は信じる」

「なら、私は神奈子を信じる」

「ほう、さてここらで一杯どうかしら」

「今日は満月、月見酒もいいかもしれないね」

「……諏訪子」
「ん」

風が強くなってきた。

月の角度から、そろそろ夜の十一時だということが分かる。
さっきまで楽しく話していた神奈子がさっと表情を変えて満月を眺めていた。

諏訪子はそんな神奈子を見て酔いが醒めた。

きつと、神奈子は最初から酔って無かったんだろうと思う。

「ありがとう」

真面目に言った神奈子が可笑しくて、
何故か笑ってしまった。

「……何がおかしいのよ」
「っ……、あははははっ!」

涙が出るくらい、笑えた。

今更?

けど、嬉しかった。

「バカ、私は早苗の為にやってるの。神奈子の為にやってるんじゃないもんね」

今更すぎて、諏訪子は照れ隠しした。

大国の神がその戦に負けた神に「ありがとう」だなんて笑い話かどうかがある。

”そんなことを覚えてた”事自体、笑える。

「さて、時間かな」

「あら酔ってると思ってたのに」

「水増しした酒をちびちび飲んだって酔わないっての」
「確かに」

さて、タイムリミットまで一時間。

二人の神様は神社の屋根から降りていった。

*

二人が帰ってきた。

時刻は23時20分、ついに一時間を切った。

「ん、早苗、それはなんだい？」

「手紙です、私が急にいなくなったりしても大丈夫なようにと」

可愛らしい便箋が入った封筒。封にはカエルのシールがちよこんと貼ってあった。

一昔前の女子高生の手紙みたいだった。いや早苗も女子高生なのだからども。

「二人は何をされてたんですか？」

早苗の突拍子の無い質問に、ギクリとする二人。

……神社の上で早苗をずっと監視してたなんて言えなかった。

「さ、散歩だよ」

諏訪子が、思い付いたように話す。
神奈子もそれに合わせる。

「…………お気遣いありがとうございます」

早苗は二人の神様に向かってお辞儀した。

二人は何もしなかった少女に、心を痛めた。

*

二十三時四十八分。

神奈子様と諏訪子様は”引越し”のために御神殿の方に行った。
神奈子様によると0時になるまで神社の中にいて、過ぎたあと神奈子様がくるまで出ちゃいけないようだ。
だから湯を沸かしてお茶を注ぎ、その時を待っていた。
魔法瓶にはお湯が入ってなかったため、水をやかんにいれて沸かせなければならず、思いの外時間がかかってしまった。
そういえば、引越しは神社自体ならば、この手紙をどこに置けばいいんだろう。

私がついていちゃ意味が無い。

残り10分、
急いで私は靴を履いて、神社の外に出た。

綺麗な、星空に、

大きな丸い、満月がそこにはあった。

秋の夜は肌寒く、微かに吐息が白く染まった。

よく見れば、オリオン座が夜空に鎮座していた。もうそんな時期なのね、と思い夜風を感じる。

神社の入り口の、石階段に腰を下ろし、手紙をそつと置く。
風に飛ばされないように、綺麗な丸石を手紙の上に置いた。

「後は」

私がやるべき事は後一つ

携帯電話を開き液晶画面が光り輝くなか、ボタンを押して耳に
当てる

「もしもし、蓮子？」

「……お、早苗じゃない。どしたのー？」「なになにー」
メリー
静かにっ

「あつメリーもそこにいるの？」

「まあね、二人で勉強してたらこんな時間になってさ、拳げ句の果
てに今日は泊まるとか言ってるさ。あ、そういえば何か用があつて
電話したんじゃないの？」

「あ、うん、えとね……」

少し間を置いて、一言。

「家の用事で、しばらくの間会えなくなるの……」

「……えっ」

「急にごめん、でも二人を悲しませたくなくて」

「……」

蓮子の声が、聞こえなくなった。

変わりに、涙を堪えているような微かな音が携帯越しに聞こえた。いや、聞いてしまった。

覚悟していたとはいえ、胸が締め付けられるような感覚に、早苗も泣きそうになる。

「蓮……子……?」

「っ、あはははははは!」

「蓮子?」

「何言ってるのさ早苗、でっかい神社残していくんだから帰ってくるんだよね?ま、その時まで待ってるから早苗は私達の事よりも自分の事を優先にしなよ、ね?」

「……………うん」

蓮子の言葉に、私は、本当の事を言えなかった。

「待ってるから」

その一言が、

嬉しくて、

けれど悲しくて。

「ありがとう……」

涙声で、そう、言った。

「泣かないの、あ、メリーに代わるね！」

「あ、早苗？蓮子から聞いたのだけど……、私も待ってるから。その時は早苗に赤ワインでも……」

「っ……、あははっメリーったら酔ってる？」

「まあねー、まああれよあれ、……待ってるから」

「うんっ……」

「んじゃ、蓮子に代わるわね」

「まだ二十歳行ってないのに酒飲んでるの？なんていうツッコミは
いらないからね！……こんな時間に電話ってことは、明日は会えな
いのかな？」

「会えない……、あ、けど」

「けど？」

「神社の前に、手紙を置いてきたの」

「手紙？」

「そう手紙。口頭だと恥ずかしくて」

「うん、わかった。明日二人で行ってみるよ」

「最後に……」

私は、一つ間を置いてこう言った。
言わなくちゃいけない気がして。

「二人に会えて良かった！ 本当に、会えて良かった……、今まで
ありがとう……っ！」

「ちよっ！？ さな」

プーッ、プーッ……

早苗は、電話を切った。

秋の夜空は、何も見えなくなるくらいぼやけて見えて、
けど、何故か清々しくて、
私は、くるりと向いて、神社へ走った。

後日。

「……………」

「……蓮子？」

蓮子とメリーは気分転換に散歩にきた。

”なんとなく”二人は石階段を登っていた。

「この先に何かあったかしら？」

メリーが蓮子に問う。

「さあね、まあでもこの階段を登った先で見た景色はなかなかだと
思ってたね」

「ふーん」

なんだか、ここに行かなくてはならない気がした。

携帯をみたら、知らない人からの通話履歴が残っていたし、メール
の受信箱にも差出人がわからないメールがいっぱいあった。

でも、気付いた時にはそれ自体が消えていた。

この事をメリーに話すと目を輝かせてミステリーだわ！と言っていたが、そういうんじゃないような気がした。

何か、大切な事を、忘れてる気がして。

けれど、何も思い出せなくて。

この、石階段の登った先に、

何かあるような気がして。

そういえば、気付いた時には私は泣いていたような気がする。でもそれが何故なのか分からなくて、メリーも泣いていた。時刻は0時過ぎだった。

結局、その後二人は睡魔に負けて寝てしまった。

今思えば、酒を飲んだ跡があった。もしかしたら、酔った勢いでなんか話したのかもしれないし、違うのかもしれない。

「着いたー!」

数分後、石階段を上りきり、二人は深呼吸して目の前の光景を見た。

「なんだ、何も無いじゃない。なんかあると思ったのに」

「メリー、これ何かしら?」

蓮子が、表面が滑らかな丸石の下に置かれた手紙を指差す。メリーがそれをとって、蓮子に手渡す。

「手紙、かな」

可愛らしい手紙。

カエルのシールで封をされたそれは、紛れもない誰かに宛てたものだった。

「……あれ?」

その手紙には、

宇佐見蓮子、そしてマエリベリー・ハーンへと書かれていた。

「私達に……？」

「開けてみましょう」

ペリっ、とシールを剥がし、数枚の便箋が顔をだした。

『蓮子、そしてメリーへ』

急に引越しをすることになって、しかもそれが二人に会う前に出発する事になってごめんなさい。

手紙なんてしたことないからなんて書けばいいのか分からないけど、とりあえず色々書いてみます。

だけど、時間もあんまり残って無いから簡潔になるかも。

あはは、なんだか思った事を書いてる二人と会話してるみたい。

……楽しかったよ。別れるのはつらいけど、また会える日を信じてる。

いや、もしかしたら戻ってこれないかもしれないけど、けどそれでもいい。ただ私を覚えてくれていたら嬉しいな。

私は二人の事を忘れないよ、絶対、絶対に忘れたりなんかしない。もし、もし私がここに帰ってきたなら、

その時は、二人と一緒にいるんな所に行ってみたい！

ううん、他にも三人でレストランとか行って、おっきなパフエも食べてみたい。

もちろん私の奢りでもいいから、行ってみたいの。……そろそろ時間かな。

ありがと、これがお別れにならないように、この言葉で締めようかな。

また会える日まで
』

差出人の名前は、書かれていなかった。

「約束、だからね。私は待ってるから
」

その優しい声に蓮子自身が驚いた。

そんな言葉が、自然と出たのだった。

自分自身約束など忘れていた筈なのに。

「あ、あれね。なに言ってるんだろ私ったら」

あはは……、と力無く笑って誤魔化す蓮子。

それをみて、メリーもうつすらと笑みを浮かべる。

そのぽっかりと埋まることの無い大きな穴は、あいたまま、けれどそれがなんとなく理解出来そうで、出来なかった。

早苗達は無理矢理幻想郷へと引越した。

外の世界で忘れ去られたモノが流れ着く世界にきた代償は、この世界に、この少女達に深い爪痕を残した。

無理矢理、幻想入りすることによって、

早苗という、少女、そしてそれに関わった事象が全て”消失”した
そして、二人の神様についても神社の名残はおろか、何処かに眠る
彼女らの文献すらも、消滅した。

世界の記憶から消滅することによって、
彼女らは理想郷へと赴いた。
それが、幸か不幸かは分からないけども。

「ねえ、蓮子」

「……………」

「風が気持ち良いわ」

「……………そうだね」

結局は、

二人はどんなに足掻いた所で掴む事が出来ない答を目の前に、
結局諦めることでしか出来なかった。
ただ、二人はなんとなく気付いていた。

この手紙の差出人は、
私達の大切な、友人なのだ。
そして、私達は約束を守らなくちゃいけない。

『私達は待つよ、いつまでも』

一陣の風が、二人を通り抜けた。

東方短編集 〈The End Story〉(前書き)

紡ぎだした、一本の糸は、
やがて切り落とされ、
闇へと葬られる。

幻想のままに。

「ここも、寂しくなっちゃったわねえ」

紫のドレスを着た金髪の女性は微かに笑うと、神社の鳥居をくぐった。

標識には博麗神社と筆で書かれた文字、その達筆な文字も風化していて目を凝らして読まないといけない。

女性は神社を眺め、なにかを思い付いたように足を止めた。

ゆっくりと瞼を閉じ、懐かしむように、深く、深く深呼吸をした。

「あの頃は、皆いたのよね」

そんな女性の呟きも、一陣の風となって消えていった。

ここは幻想郷。

外の世界で”幻想”となったものが幻想郷に入り込んでいく。

ここには妖怪、妖精、神様、忘れられたものが存在している。

俗に言う”幻想入り”システムは幻想郷を包む結界、博麗大結界を通し、幻想郷に存在する事が出来る。

幻想入りすれば、外の世界では忘れ去られた事を意味する。

それは事象も人間も含まれる。

「ねえ紫、貴女の仕業かしら？」

「やーねー、私はそんな事しないわ」

「なら、この天気は何よ！」

そうそう、天人までもが幻想入りしたんだっけか。

神社を壊し、大きな地震を起こそうとしていたのが、今になれば懐かしいの一言で片付けられる。

「ねえ本当にこの道でいいのかしら？」

「そろそろ地霊殿へ着くわ」

「道案内とアシストは任せたわよ」

ふふ、あれは冬の事かしら。

温泉やら間欠泉やらが沸いて驚いた、まさか温泉が幻想入りするなんてね。

風化した賽銭箱に私はなけなしの金を入れる。

カーンという乾いた音、それにつられて彼女が来るんじゃないかって、つい、期待してしまう。

「あら、貴女が賽銭を入れるだなんてどんな風の吹きまわしよ」

もし、今も彼女がいたならば、そんな事を言っただろう。

永遠の、あの楽園の巫女は、もういない。

鬼が新しく建て直したこの神社も、木は腐り、雨漏りにより畳が変色していた。

主がないこの神社に、神はもう、いない。

「紫様、ここにいらっしやっただんですね」

後ろから私の式、八雲藍の声が聞こえた。

さっと私は後ろを振り返り、未練が無いようにこう言った。

「さ、行きましょう」

「えっ………？」

あっさりとした反応に藍は驚いた。霊夢と紫は仲が良かった事を知っていたからだ。

それなのに、簡単にここを離れる事なんて出来ない筈だ。

「思い出がある場所だから、長くいたくないのよ」

藍の思いを知ってか知らずか、傍げに、そう言っただけで藍の目の前に黒い空間を開いた。

その黒い空間は、紫や藍等が隙間と呼んでいるものであり、その隙間は遠く離れた場所に移動出来たりする便利なものだった。

「次はどこに？」

その問い掛けに、紫はクスツと笑った。けれど紫の笑顔に、どこか陰りが見えた気がした。

お気に入りの傘を携え、大きく開いた隙間の中に入っていく。その後ろに藍がついていく。

隙間から出ると、そこは大きな階段が目の前にあった。

見覚えのあるそれは、藍が初めて博麗霊夢と出会った場所だと気付く。

だがそれよりも此処は、主人にとって大切な場所であった。

「この冥界も、やがて消えていくのね」

紫は誰に向けた言葉でもなく、ただうわ言のようにそう言った。

コツコツコツ、と足音が響くあたり、霊魂も妖精もないのだろう。

ただ、見事に咲いた桜の木が私達を見下ろしていた。

「妖怪風情が、幽々子様には指一つ触らせません！」

「まあまあ妖夢、紫は私の友達よ？」

耳を澄ませば聞こえてきそうな、懐かしいあの声。

私の友達はある時桜の下に眠る自分の亡骸を見て成仏した。

庭師は私に刀を渡した後、静かに死んでいった。

何を思ったか、二人は綺麗な桜の木の下で、安らかな表情を浮かべていた。

もしかしたら、

二人は誰かの温もりを感じながら逝ったに違いない。

それは誰なのか、いやもしかしたら二人は残っていく者と逝ってしまつた者を想つたのかもしれない。

ある大きな桜の木の幹に触れ、耳を澄ませる。

もしかしたら聞こえるんじゃないかという思いで。

案の定、聴こえなかった。

そうだ、今、この冥界、白玉楼には私と藍しかいないのだ。

聞こえたら、それはただの幻聴。

「……………最後に、ここに来て良かった」

「紫様……………」

肩を震わせ、何かを堪えようとする紫に藍は優しく、こう言った。

「泣いても、いいんですよ」

紫は藍の懷で静かに、泣いた。声を殺して泣く金髪の女性は今では

あの頃の少女だった。
藍は子供を寝かせる母親のように、腰をぼんぼんと叩いて紫を優しく包んだ。

冥界の亡霊姫、西行寺幽々子が亡き博麗の代が潰えた今、紫は独りだったのかもしれない。
私は、それに気付いてやれなかった自分を責めた。

「さ、行きましょう」

しばらく経って、落ち着いた紫がまた大きな隙間を開いた。
隙間の先は、マヨヒガ、
つまり我が家だった。
呆気にとられる私をおき、紫は

「疲れたから寝るわ」

そう言って障子を開き、布団に入ってしまった。

最近、紫の寝る頻度が増えてきた。
それと同時に能力をあまり多用しなくなった。
昔はよく隙間を使って、夕食のつまみ食いとかちよっかいをかけた
りしていたが、今じゃそんなこともなくなった。
そして、後一つ気になっている事がある。
紫の、いわゆる冬眠の間隔が大きくなってきている事だ。
別に危惧すべき事じゃないと思っていたが、月人が月に還る少し前
に名医である八意永琳に試しに聞いたところ、

「きっと彼女の体が能力の力に耐えられなくなったんでしょう。それに寿命が近いのかもしれないわね、

体が無意識に永く生き延びようと眠らせようとしているのかもしれないわ。

貴女、紫の式でしょう？主を失ったら

そうだ、私が紫の式では無くなったら、どうするのだろうか。
遠く離れた場所で暮らすか？

……きっと私は、ここにずっといるのかもしれない。
何年も、何十年も、紫の傍にいて、
きっと、いつか来るその日まで。

ああ、毛布一枚だけじゃお体が冷えますよ。
今、掛け布団をお持ちしますね。

1ヶ月の間、紫様は起きなかった。

それまで、藍はこの幻想郷を覆う結果の調整をしていた。
博麗の代が潰え、紫様の力が弱まっている今、覆う結果も藍の力で
も現状維持など出来る筈がなく。

日々、弱まっていく結界に藍は頭を悩ませていた。

藍は紫の式、

だからこそ紫以上の力は無いし、あつたとしても出せない。

いや何れにしろ、この難解な計算で構成された障壁、半分も理解出来ないのが現状であった。

「おはよう、藍」

「おはようございます、紫様」

1ヶ月前と変わらないその仕種、容姿に安堵する。

そういえば稗田が書いた幻想郷縁起を見たことがあるが、紫様は妖怪でも珍しく部類に入るらしく。八雲紫という人物であり、種族なのだ。

もしかしたら、

紫様は妖怪ではなかったとしたら？

あの、全ての理をねじ曲げる力が無かったら、

人間、なんじゃないか

って考えてしまう。

でも能力が無かったら、の話。

人間ではあり得ない強大な力と、たぐいまれない計算力を彼女はやってのける。

彼女が幻想郷を創ったと言う者がいた。

紫はそれを茶化して笑った。

けれど、私も信じていた。何故なら、このマヨヒガも顕界とも幻想郷とも違う微妙な境界によって隔離されているから。

だからこそ、その曖昧さに迷子が多く来たりしていた時期もあった。兎も角、マヨヒガのように曖昧ながら隔離出来るのなら、幻想郷も可能なんじゃないか。と思う。

けれど、それも藍の憶測に過ぎなかった。

……つまるところ、藍も紫の事を全て知らなかったのだ。

目を覚ました紫は何か書き物をしていた。

藍が何を書いているのですか？と聞いても、秘密よとの一点張りだった。

書き物をして、二日後に紫は寝てしまった。

紫が次は半年後だったりして、と笑いながら言って藍は胸が締め付

けられるような感じがした。

「そんな事言わないで下さいよ」

その言葉も虚しく、消えていくのだった。

紫が眠っている間、藍はいつものように家事を行った。

紫と藍、まるで虹のようだなと藍は思う。

私はともかく、紫は一番内側で他の色を支えているのだから。

赤、あの巫女が消えた時点で虹という幻想郷は消えたのかもしれない。

いや、違う。

ただ単に虹はずっとそこに在るわけじゃないから。あの巫女が消えたから幻想郷が崩壊するなんていうのは当て付けだ。

……こんな馬鹿げたことを考えるなんて全く、どうかしてる。本当に、どうかしてるよ。

半年が、経った。

「藍、おはよ」

「おはようございます、紫様」

紫は宣言通り、本当に半年後に起きてきた。

毎日が繰り返しの藍にとっては思っていたよりも早く感じて、本当に半年経ったのかと思ってしまうた。

ご飯を食べて、すぐ書斎に向かってまた書き物を始めた。

藍は紫にお茶を出すついでに聞いてみた。

「紫様は何を書いているのですか？」

「秘密よ」

半年前と同じ事を言った。
藍には教えないつもりなのだろう、紫はお茶を少し飲んでまた書き物を始めた。

三日後、紫様はまたお休みになられた。

「書き物がもう少しで終わるのに眠くなるなんてね、次は……そうねえ、一年と半年ぐらいかしら？」

「分かりました」

「ねえ藍」

紫が布団の上で、藍にさとすような口調で話す。

「藍、いつでも私を見捨ててもいいんだからね」

儂げにその言葉を紡ぐ

紫は目を閉じて、薄く笑った。

「何、言ってるんですか」

「……」

「一度も、貴女の事が嫌になった事なんてないんですよ、捨てる訳無いじゃないですか」

「ごめん、ね」

主人が、初めて”弱さ”を見せた。

いつもの紫なら、それこそ藍をからかって笑い、じゃあね、と胡散臭く隙間の中に消えていくのに。

目の前にいるのは、紛れもない少女だった。

弱さを見せず、頑丈な壁を作り、決して奥にある心を見せないようにしている。少女が。

藍はなんとなく理解した。

「待ってますよ」

「……………えっ？」

「紫様が、目を覚ますまで何度も何度も。私はその日の為に待ち続けます」

「藍……………」

「だから、そんな顔をしないでください。そんな目で見ないでください。目を覚ましたときに、私が笑えるように、私は、ずっと傍にいますから」

「……………ありがとう」

恥ずかしくて、紫は寝返りをつつて藍を背に向けて、迫りくる睡魔に身を委ねる。

いつのまに、こんなに大きくなっちゃって。

いや、私が小さくなったのかしら？

にこやかに笑みを作って、紫は静かに、眠った。

紫が寝てから数カ月後、

紫の書斎を掃除をしていた時だった。

「あれ、これは」

藍の目に留まったのはある一冊の本。

黒一色の、表紙も何もない無機質な本。
藍はおもむろにその本を開いた。

「……………あれ？」

藍は首を傾げて、ページをどんどん捲る。

どういうこと？ ページを捲るスピードが上がり、ついには最後のページまで捲った。

おかしい。

これは本であって、紫様が書いていた筈なのに

「なんで、白紙なの」

藍はそつと、書齋に本を戻して再び掃除を始めた。

1つの疑問を残して。

*

「……………んっ」

長い、長い、夢が覚めた。

はあ、と深呼吸して額に手をあてる。

仄かに温かいその手で拳を作ったりして感覚を取り戻し、目を開ける。

一年と、半年ぶり、だったか。

長い間自分の家を見ないでいると本当に自分の家なのか？とさえ思ってしまう。

畳の匂いを感じながら、布団を剥いで体を起こす。

一年以上寝ていても、何も食べずに生きながらえるとは、まるで生き仏になったようだ。

「おなかすいたわ……」

うわごとのように呟いて、

一年以上前に起きていたほんの数日を思い出す。

そして、ハツとして紫の顔が強張る。

「今回で、最後……」

そんなことをいつのまにか呟いて、紫は立ち上がる。

「藍ー！起きてるならご飯作って」

そう、今回で最後なのだ。

紫が居間に向かっている途中に、たたたたたと藍が走ってきた。

一年と半年ぶりの再開に、藍は涙ぐむ。

「あら、半年じゃ泣かなかったのに」

「紫様　　っ！」

よしよし、と藍を抱き寄せて背中を優しく擦る。

「藍」

「はい」

「待ってくれててありがとう」

紫の言葉に藍の目尻が熱くなる。

そして、優しい声で藍は

「……どういたしまして」

と言った。

その後、紫は食事を済ませ書斎に向かった。
私はこの数日で終わらせなければいけなかった。
この本を書き記して、全てが上手くいくように。

キツカケは、何億も前の出来事。

あの時、宇佐見蓮子と会っていなければ今の私は悠々と生きていた

だろう。

けどあの時私は気付いた。

外の世界と幻想郷は並行しているようで、してないという事が。

そもそもおかしいのだ。

私は何千もの年を越えていた筈なのに、蓮子はそれ相応に年を取っていなかった。

ならば、外の世界と幻想郷は同じ時間を流れていない。

それに気付いたのが、あの時。

時間、天候、場所によって隙間の向こうの外の世界は時代を変えた。ある時は、月に人類が暮らし始めた時。ある時は、植物を枯らし作り物の植物を置いた時。

でも、それらに共通する事項があった。

少なくとも、外の世界で”メリー”という人物が消えてからの数十年。

そして、宇佐見蓮子が生きている時代。

まさしく、この二人が鍵だった。

そして、この時。

この時こそが、私が最後にやらなければならない事。待ってくれてありがとう。

「みんな、ごめんね」

書き終えた

真っ白な頁を見て紫がふうと息を吐く。

準備は整った。

二年もの間、力を使わずにいた。あとはもつかどうか。

「紫様」

後ろから声がした。

どうしたの、と返して九尾の式の次の言葉を待つ。

「その本には何が書かれてるのですか？」

「……………」

最後なのだ、

最後まで私に教えてあげてもいいと思った

「何も書いてないわ、けどねそう見えて書いてあるのよ」

「……………」

「これはね、”ある人物”しか読めない本なの。読めない人には真っ白な頁しか見えないけど読める人は別。

私の稚拙な文章が読めるのよ。あ、藍は読める人じゃないわ。一人だけしか読めないの」

「その読める人って……………」

「……………私の”一番目”の、友達よ」

あつ、と藍は思う。

確か昔、西行寺幽々子の事を「二番目の友達」と言っていた気がする。

だとすると一番目の友達って……………？

駄目だ、わからない。

藍は恐る恐る聞いてみる。

「その一番目の友達というのは……………」

「その子はいつも遅刻して、私を困らせたわ」

紫が懐かしむように、本に手をあてて目を閉じた。

藍は後ろでその主人の言葉を待っていた。

「正確な時間が分かるくせに遅刻しちゃって、でもしっかり者でいざという時は頼りになる……、

そうね、親友って言ったところかしら」

「その親友は……」

「霊夢が生きてた頃に一度だけ会ったわ」

「一度……だけ？」

「彼女はね、外の世界の住人だった。こっちの世界に来るべきじゃなかった」

「……………」

「彼女だけは普通に暮らして欲しかった、私や……あの子のように”特別”しか生きられない世界にいるべきじゃなかった」

「……………」

何かが、間違ってる。気がした。

「紫様、違います」

「……………」

「紫様は皆が対等に暮らせる理想郷を作ったではありませんか、それなのに、なんで」

「ええ、そうよ。気付いた頃にはもう既に遅かった。霊夢の作ったルールで何億もの時が平和となった、

それは認めるわ。万が一、親友が世界に慣れたとしても……………」

紫は躊躇った。

次の言葉が、呪詛のように恐ろしくて、

「一体、”変わり果てた友人”を彼女が見たらどう思う？」

私は大妖怪の賢者、人間と妖怪の境界を越えた成れの果て……………！

私も彼女も辛い筈よ。

ねえ、藍。私は怖かったの、人が変わる事が。今までの積み上げていたものが崩れ去るような気がして、

貴女には分かるかしら、自分が自分じゃない程変わり果て、自分がないのか、なんだったのか忘れてしまうような錯覚を、

そこにいたのは八雲紫という私、ありとあらゆる境界を操る力をもった妖怪だった。

世界の法則すらもねじ曲げるような力に私は選ばれてしまった。

そんな女に、私は彼女に会う資格なんてとうの昔から、”私が八雲紫だった時” から無かったのよ」

そんなのあんまりだ、と藍は思う。

だったら、紫様は報われないじゃないか。

何億もの時を生きて、最後までその友人の事を想って……。

「……そんなの、そんなのって」

「同情してくれるのかしら？ありがとう。でもね、それでも、そこそ無限という時間を待ってるのよ、彼女は」

「えっ……」

「約束したの、待ってる、って。ずーっと昔の事なのにね、何故か忘れられないの」

藍は何も言えなかった。

紫とその友達が、あまりにも不条理な壁によって隔たれ、そしていつかその壁が壊れる事を待ち続ける。

壊れる事がない、その壁を。

「さて、と」

紫が立ち上がる。

紫のドレスを纏い、赤いリボンをあしらった白い帽子を浅く被った紫は藍の方を向いて、

「後はよろしく」

紫が、笑った。

……藍は思った。

これが、八雲紫という人物なのだ。

そして彼女は結局、自分の理想郷なんて作れなかった。

幻想郷という理想郷を作っても尚、八雲紫は対等ではなかった。

紫は幻想郷を愛していた、嘘、偽りなく、幻想郷一、愛していた。

幻想郷に存在する全ての事を記憶しているというのに。

「……紫様」

だからこそ、

藍は問わなければならないと思う。

「幻想郷の景色を、その親友に見せたかったんじゃないですか」

言った、

否、言ってしまった。

紫は驚いて藍の言ったことを心の中で復唱する。

私は彼女に見せたかった。

この理想郷を、いやこの幻想郷を。

自然に囲まれた、綺麗な景色を彼女に見せたかった。

「そうね、私は彼女に見せたかったわ。……けどその願いも叶わなかった」

そう、叶わなかった。
それだけの、こと。

「最後に一つだけいいですか？」

「ん」

「紫様は、これから何をなさるつもりで……？」

紫は藍に背を向けて、黒い本を携えながら、寂しげに言った。

「幻想郷を元通りにするのよ」

「……どういう」

「幻想郷を覆う博麗大結界を消し、幻想入りする要因を消して、自然だけの世界に戻すのよ。……藍、終わった先はなんだと思う？」

「無、ですか……？」

「いや違うわ、終わりの先は始まりよ。”幻想郷が始まる”というスタートラインに私は準備しなければならぬ。」

最後に用意された外の世界の時間がそう設定されてるのよ、無限回廊のように。

だから、藍。私は貴女を式という縛りから解くことにするわ」「……えっ？」

藍は紫の言った事が信じられなかった。

いや、察しがつくからこそ、次の事態が安易に読めてしまった。

「私は、良い従者を持った。ありがとう、藍」
「待ってください、紫様！！」

隙間が藍の下に展開されていく。

紫が藍に振り向かないのは、泣いているのか分からないけども、藍は下に現れた隙間を避けて叫んだ。

「紫様ツ、私は貴女に最後まで仕えと」

「……だから、嫌なの」

「えっ」

「私が向かうのは始まりではなくて終わりよ、貴女は来るべきじゃない。違う、来てほしくない。」

「貴女が藍だから、」 次の私と幸せに暮らす方がいいに決まってる”」

「仰る意味がわかり……」

紫の右手が上がる。

刹那、藍の体が妖狐の姿へ戻っていく。

九尾の妖狐にへと。

「私は、つらいの。貴女だけは生きてほしいから。だからこそ私はこの選択をした」

紫が、振り返る。

「ありがとう、そして、ごめんね」

その瞬間、藍は黒い闇に飲み込まれた。

「ほんとに、ありがとう」

終わった。

遂に、私は一人になった。

藍という従者を私は解いた。

けれどこの先は始まりではなく、終わり。今を生きるものからの視点ならば、藍の言う通り”無”が待っている。

己の寿命が潰えるまで、延々と廻り続ける。螺旋の道。

「泣いてちゃ駄目よね」

私はもう、物語の主人公ではないのだから。だからこそ、やらなきゃいけない。私が私であるがために、

紫は隙間を開き、足を踏み入れる。

行き先は勿論、幻想郷。

お気に入りの傘を持って、紫は向かう。

全ての思い出を、無に還す為に。

手を掲げ、昔のあるべき姿にへと戻していく。

この地で過ごしてきたことは、手に取るように、走馬灯のように思い出せる。

そんな場所も私が終止符を打つとは皮肉なものね、と紫は目の前の幻想を見つめながら、思う。

光の粒子が幻想郷の地を包み、全ての幻想を分解していく。自然と、涙が出てきた。

思えば、博麗は幻想郷の抗体のようなものだったかもしれない。異変が起これば、彼女が動く。

そして異変を解決しては仲良くなって……。もしかしたら羨ましかつたのかもしれない。

立場というものから、直接的に異変を解決しては妖怪と人間の均衡が破れてしまう、と。

皮肉にも、今日は幻想郷の生まれた日。

いや私が私である前に彼女が幻想郷へと”招かれた”日。

『ありがとう、紫』

全てが消失するその時に、
そんな声がした

幻想郷にいた皆からの声に、紫は驚いて周りを見た。

今のは霊夢に幽々子に……。違う、皆だ。

辺りを見渡しても、そこにあるのは広大な野原だけ。

人影など何処にも無かった。

「どういたしまして、次もよろしくね」

紫は泣きながら、けれども精一杯の笑顔で”皆”に言った。

ほんとに、ありがとう。

暫くの間、紫は幻想郷を眺めた。

ずっと眺めていたかった。

皆との思い出をいつまでも覚えていたかったから。

けれど、紫には時間があまり残されていなかった。

寿命とセカイの終演、どちらが早く終わるかの瀬戸際だった。

やるべきことはまだ、ある。

「さようなら、またすぐ会いに行くから」

隙間を展開し、一度振り向いて、けれど悲しくなりそうですぐ向き直った。

向かう先は、ただ一つ。

全てが始まった、あの出来事へと。

蓮子と神社へいったあの日へと。

私は、行く。

*

隙間をくぐった先に見えたのは、紛れもない、守矢神社の跡地。
高台にあるからこの土地を誰も買わないのだろう。「売ります」と

書かれた看板が傾いていた。

「いたたたたた、やっぱり私がいるから拒絶反応ということかしら」

外の世界にきた途端、激しい頭痛に苛まれた。

同じ存在が同じ次元にいるからこそそのリバウンドだろうか。

……だったら希望はある。この世界にメリーがいるのだから。
空を見上げたら一番星が光輝いていた。

紫は必死に記憶を辿る。

確かあれは、夜に蓮子と神社に行った筈だ。

いやまて、どこの神社だった……？

確かあの日は蓮子にノートを貸して、

喫茶店で蓮子が神社に行こうと持ちかけた……！

薄暗い、神社。

古びていて、寂しげな神社。

確かあの表札には……。

「繋がっていたなんてね……、時間が無い……急がなきゃ」

場所は彼処しか無いのだから。

必死の思いで、私は隙間を展開した。
この能力も、そろそろ限界というのに

さつきより、頭が痛い。

紫はその痛みに耐えながら、隙間の向こう　　古びた神社へと目を向ける。

石畳が所々剥がれていて、人の気配なんて無かった。

私は神社の入り口に”黒い本”を置いて、目の前を見据え、深呼吸をする。

この向こうに、二人はいる。

私はあの二人に見られてはいけない。

私に会ったという事実が影響してしまうから、私が会った数秒こそが未来を変えてしまう。

蓮子に会ってしまったえば遠い過去、いや遠い未来に私と蓮子は会っている。

その時、今会った事実を覚えていたら、何が起こるか予想ができない。

過去に行ったとしても、人一人殺せばその人に関わった全ての人間の未来が変わるということ。

その関わった人から関わった人へと未来が変わる。まるでねずみ算のように。

だからこそ、細心の注意を払わなければいけない。

だけど、この本は別。

こればかりは私の我が儘。

またメリーには、いや”あの二人”には後悔してほしくないから。だから、だから私はこの本を書いた。

神社の中へへと、足を踏み入れる。

踏み入れた途端、全身が燃えるような痛みが走った。

「……………っ」

その痛みの先に、

「ねえ、連子早く帰ろ」

「えー、せめてお賽銭くらい入れていこうよ」

「んじゃお賽銭入れたらすぐ帰るわよ」

「仕方無いなあ」

「さ、はやくはやく」

あの、二人の姿を見た。

「あ

私がもう一度戻りたいと願ったあの時に。

今、私は戻ってきた。

声に出して叫びたい……………！

いつものあの日常を少しでもいいから触れたかった。

でも結局、私は戻れない程の過ちを犯してきたのだ。

「……………そう、よね」

どれが正しい選択で、どれが正しくない選択なんてわからない。

私は八雲紫になったことが間違いだとは思わないし、後悔もしてい

ない。

ただ私は、違う選択に夢を持ってしまっただけ

「最後に夢を見て良かった」

そして、紫は操る。

無と有の境界を、

チャリーン

無と有の境界、

メリー以外の時間を無にし、時間停止させる。

境界を弄り、この神社の空間だけは風が止まり音さえも響かなかった。

「……………これが最後」

紫はメリーの死角から彼女を見ていた。

私より少し幼い顔立ち、私の愛用している帽子……。ああ、私なんだなと今更ながらに思う。

いやあれが私なら、この場にいる私は一体誰なのか。そう思っってしまう。

けれどそんな考えも境界を弄ったりバウンドの痛みで消え去ってしまっ

やり残した事は、無い。

「……………次は、もっと……………幸せに、なってね……………」

痛みで頭が朦朧としながらも、眼前に見えるメリーを見据える。
慌てふためく彼女は、
まさしく人間だった。

悲しいくらいに。

隙間をメリーの足元に展開させようとする。

「……………」

能力の使いすぎだろうか、
座標位置がずれてしまう。

「こん、なところであつ、終わるわけにはいかないのよ……………！」

無数の隙間を開く、
それこそ、おびただしい数の隙間を。

『どついつこと…………？ ねえ蓮子、助けて！』

「…………ごめん、ね」

最後の力を振り絞る。

刹那、メリーの足元に隙間が出現する。

メリーの叫び声も虚しく、彼女は隙間へと落ちていった。

終わった

全身が燃えるような痛みもひいてきた。

紫は神社周辺の境界を解いてふう、と深呼吸した。

『メリー？ねえメリーったら！』

蓮子の声が聞こえてきた。

『ここに連れてきたのは悪かったからさ！メリーどこにいるの……』

拳を、ぎゅっと握る。

私はよろめきながらも神社の影に身を潜め、蓮子を見ていた。

「じゅめん、ね……」

また、涙が溢れてきた。

蓮子が黒い本を手に取り、駆けたのを見届けた後、夜空を眺める。

雲一つ無い夜空に、星の輝きは見えなかった。

段々、視界がぼやけてきた。

ああもう、ロスタイムとか用意されてないのねと自嘲気味に笑う。

……。

……。

今更、気付いた。

私が死んだら閻魔に会うだろう。だがしかし紫が死んだという事実は無くてはならない。

最後まで、私は独りという運命だった。

「っ、あははははは！………はぁ」

涙を拭い、立ち上がる。

藍をここまで連れずに来て正解だった。

連れてきたら、こんな決断、出来なかったから。

私は賽銭箱の前に立って、なけなしの賽銭を入れる。

乾いた音が、一つ。

目を閉じて、祈る。

我ながら、最期に願ったのは馬鹿みただと思う。

また、みんなに会えますように。

私は、手を合わせて願った。

拍手は手が震えて、出来なかった。

もう使わないと思った力で隙間を開く。

右手が透き通って見えて驚いた。消滅するってこういうことなのね、と。

天はどうかやら普通に死なせてはくれないらしい。

「……………あつ」

左足が消えかけていた。

消えていく感覚に恐怖しながら、右足でなんとか隙間へ入っていく。

一方通行の隙間の中に。

「……………ひっ、あ、あなたは誰ですか」

艶やかな金の髪に淡い紫のドレスを来た少女

「……………」

……………私が、そこにいた。

「八雲紫、よ。そして貴女が向かうのは幻想郷」

「紫……………さん？ か、体が、すっ、透けてますけど……………！」

「次の未来は、任せたわ」

私はメリーに向かって微笑むと、メリーの体が白く輝いていった。きっとこのほんの少しの時間をメリーはこの瞬間になるまで思い出さないだろう。

けど、これでいい。

私が八雲紫と名乗り、幻想郷と名付けた先には、私がいた。

この螺旋の中で、私が決めたことに改めて嬉しくなる。
きつと、次もやってくれるだろう。

『待つて　　貴女は！』

「狐と猫によろしくね」

白い光が消えた頃には、メリーの姿は消えていた。
黒い、何も無い空間で私は笑う。

消え行く灯火に、身を委ねて。
きっかけは、ほんの小さな好奇心。

博麗神社

全てはあそこから始まり、

あそこから終わった。

今思えば、早苗が私の記憶から消え去ったのも理解出来たし、幻想
入りする前の思い出だって覚えてる。

ただ、思い出すのが遅かっただけ
蓮子だってそうだ、あのお墓の前で彼女に出会っていなかったら、
今私はここにはいない。

だとしても、幻想郷が廻るといふことは。

「偶然は必然、ね」

これが私の運命。

人間にも妖怪にもなれなかった、紫が、幻想郷を愛し、幻想郷の為に消える。

そんな話。

ああ、そう思うと私の人生もなかなか悪くない。

寧ろ、思い出すのは、

あの頃の幸せな一時。

『紫、はいお茶。熱いから気を付けなさいよ』

『あら紫じゃない、花見にでも?』

『紫、酒でもどろー?』

『あはは、この天人に刃向かうとは……ってうわあっ!?!?』

みんなが、待ってる。

『紫様、私はいつまでもお側にいます』

私は、みんなを待たせてきた。

今度は私が待つ番だよね。

待ってるよ。

何年も何十年も、それこそ、何億年でも。

私は全てを待ち続ける。
どんな困難が訪れたって、

いつまでも、
いつまでも。

みんなが幻想郷に来るまで

待ってるから。

*

数日後。

蓮子はその時拾った黒い本を手に取る。

メリーが行方不明になった日に拾った本だから縁起が悪いと
思って何度も捨てようと思った。

けどいつのまにか思い止まって捨てずにとっておいた。

蓮子はふとその本を読むことにした。

黒い表紙には何も書かれてはおらず、

表紙を開くとそこには筆で書かれたような字。

あ、と思い。

咄嗟にメリーから借りていたノートと照らし合わせる。

「……そんなこと、って」

同じ筆跡、同じ癖。

何年も一緒に過ごしてきたからこそ分かる小さな”糸”
手が震える。

これを書いたのはメリーかもしれない。そんな淡い希望を持って。

目次も何もない、本。

一頁目に、こう書いていた。

この本を手にとってくれてありがとう。

私は幻想の存在でもない、ただの人間。だけどここに書いて
あるのは、事実。

私が見てきた全てを、この私が稚拙ながら書き記したもので
ある。

……この本は貴女にしか読めないカラクリが為されてる。だ
からこそ最後までみて欲しい。

そして、そんな世界があると知って欲しい。

そんな理想郷に行ってみたいと願うなら、この本を大切にす
るじや。

きっとこの本を書いた私が、貴女を迎えに行くわ。
いやきつとなんてないわね、絶対に。

……この著者の言葉の使い回しに驚く。

だってメリーと”変わらない”のだから。

「全く、メリーらしいや。絶対って書くくらいなんだから本当に来てくれるんでしょうね。」

……っ、あはははっ。だったら私は待ってるよ、その日まで、メリーに会えるその時まで私は待つから」

蓮子はくすつと笑い、
頁を捲る。

どれどれ、あの子の文章力はどうかしら、誤字脱字があったら再会した時にでも見せてやろうかしら。

きつとメリーは、頬を真っ赤にしてこの本を取り返そうとするよね。だから馬鹿な私は馬鹿みたいにその日を楽しみにしてるんだからね。

そんな事を思って。

「さーて、メリーの小説。読んでみるとしますか」

この世界は決して終わる事のない人形劇。

終わりは始まりで、始まりは終わりです。

この物語は、そんな人形劇を演じた人間と妖怪の物語。

そう、この本のタイトルは……

『東方短編集』

素晴らしき幻想に、

幸あれ

End . . .

東方短編集 〈The End Story〉(後書き)

遂に、遂に。

東方短編集が完結致しました。

さて、最後を読みきった余韻がまだ続いているのなら進むのは遠慮した方がいいかもしれませんw

それでは

2007年の11月から執筆を始めたこの東方短編集も。

遂にハッピーエンド(?)で終わった訳です。

この小説は前から、短編集なのにどこか繋がりをもった小説にしようとして決めていました。

メインストーリーは考えていました。

伏線を些細な文章に入れて最後の最後に分かるようなそんな物語。

昔の話は文章が破綻していますが、読み返すとああなるほど！って思えるようなそんな話になってたらしいな。

ともあれ、この三話連続の解説ですね。

八雲紫の愛した幻想郷

紫と霊夢の平和な話。

ここではいかに紫が幻想郷を想い、霊夢に感謝しているのを書きたかったんです。

このままユカレイもいいなと思いましたが、どうみても次回からシリーズ受け合いなので没。そりゃそうだ。

あの話には幻想郷が生まれた日を春ということ、霊夢と紫は宴会に行かなかった訳ですが。

ちなみに裏話で、霊夢の誕生日という脳内設定がありました。そう考えるとあの話は色んな設定を没という返り血を受けた話になりますね。

そういう表現にしちゃうと怖いね！不思議！

ともあれ、次の話に繋げる鍵でもあり、区切りなのかなと。前の話が紅魔館話ですしね。

夢は貴女と共に

早苗と蓮子とメリーの話。

早苗達が無理矢理に幻想入りすることによって、彼女達の存在や記憶も思い出もが幻想になって消え去った、そんな悲しい話。

この舞台背景には色々と考えてたりします。

一つは西方の世界観。植物が人工的だったり、あわよくばサボテンエネルギーとか出したかったです、

西方を知ってる方ってそんないなさそうだし知らない方には不自然な文章に戸惑いを感じちゃったらあれなので没。

ただ、月面ツアーやら列車とかは入れました。さりげなく。

神主のCDに書いてあるし認知度は高いよねきつと！という考えでそして更に、紫が全てを忘れないと考えたきっかけの話でもありません。

……それにしても、なんで見ず知らずの不確定要素の大きい幻想郷に二人の神様は行こうと決断したのでしょうかね。

東方短編集 〈The End Story

気の遠くなるような、最後の話。

幻想郷には誰もいなくて、幻想郷が終わる少し前の話。読んでいて気になった方もいるでしょうね。

橙が、書かれていない事に。

話の中では橙について一つも触れてませんでした、それも意図的です。

結局彼女もまた、生きる妖怪だったという訳です。さてさて、本編ですが色んな伏線を拾っています。

第二の親友「幽々子を指す

意味ありげな台詞も遂に分かるわけで。（サイトには載せて無い話でした！ごめんなさい）

第一は誰だったのか、ここで明らかになるという訳で。

他にも意味ありげな言い回しのあるものを繋げてる部分もあります。

紫が書いていた黒い本は、まさしく、今お読みしている東方短編集です。

はい、これがやりたかったことの一つです。

黒い表紙で、まさかと思った方もいるんじゃないでしょうか。

ええそのまさかだったりします。

最終話を読み、表紙に戻れば、ああそういうことだったのか。と思う筈です。

・幻想郷と外の世界（二次設定の説明？）

一から百までの時間があって、

紫は幻想郷から外の世界の一から百までのいつでも隙間を使っています。

けれど0の時には隙間を使って行けません。

その0はつまり幻想郷が始まる時であり、同時にタイムリミット。

終わるといふ意味があります。

外の世界は一から百へと進みますが、

幻想郷の終わりのその時には0へと至る、という感じですね。

ここらへんの時間軸が文章でうまく伝えられないのがとても歯痒いですが、なんとなく感じとってもらえれば幸いです。

もう一度、最終話を読んで、また更に今と過去の邂逅の一話を読んで頂けると、ああなるほど。となる筈……！

『待つ』

というフレーズを全話通して意識したような気がします。

最後の、みんなを待つという意味は文字通り。

幻想郷へやってくる時を待ってるよ、という意味ですね。

幻想郷という世界は色んな世界に影響を与えていたような気がします。

天界、地下、冥界、地獄……。

なんだか千と千尋の神隠しみたいな世界観に似ているような気がします。

ともあれ、最終話はあまり解説というような解説はあまりしません。やっぱり読み手それぞれにイメージして欲しいですからねw

神主の、どこか曖昧な設定と世界観こそが、

今日の東方の二次創作の幅を大きく広げたのではないかと思っています。

曖昧だからこそ、クリエイターはIfを求めて、創るんです。

その曖昧こそが、曖昧からの探求こそが私にとっては楽しみであり面白さではないかと思っています。

だからこそ私はIf話を書き、夢見るその世界観に気付くんです。

この小説を読んでくれた方が何かを感じていただけたら私は嬉しいです。

小説って読むと自分も書いてみたくなるんです。私もそうでした。

これを読んで、東方の小説を書いてみたいと思ったのなら感動して涙がちよちよぎれます。うはは。

そしてこの本は一冊とは限らない訳で。

東方短編集

↳ The Another Story

2009

6/6 1:52 記

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2962/>

東方短編集 ~ The Another Story

2010年12月2日15時41分発行